

志布志町埋蔵文化財調査報告書(5)

県営特殊農地保全整備事業(十文字地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

倉園B遺跡・十文字遺跡

1983. 3

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

志布志を含む大隅地域は、昭和57年新たに発見された小牧古墳、ダグリ岬の飯盛山や塚崎、唐仁、横瀬などの古墳群をはじめ、昭和89年発掘の片野洞穴、昭和56年発掘の東黒土田遺跡など、縄文期から弥生、古墳時代に至る埋蔵文化財の包蔵地であり、地理的にも、学術的にも古代文化解明の重要な地域であります。

これらの文化財は、私たちの祖先がながい歴史の中で培い、保護保存してきた国民的財産であるとともに、私たちの生活の進歩と伝統の新しい展開を育んできたものであり、‘これら’の文化財をながく後世に継承し、文化の創造に役立てることは、現代に生きる私たちに与えられた責務だと考えられます。

特に埋蔵文化財については、考古研究者や関係者等により数多くの遺跡を確認しており、今後の調査に委ねているものが大部分であり、その究明を待たなければなりません。

心の豊かさを要請される今日、文化遺産に対する关心と愛護活動が尚一層重要性を増してきているものであります。

本町では、これらの文化財の保護保存の重要性に鑑み、埋蔵文化財への認識と理解を探めていただくよう文化財愛護思想の普及啓蒙周知を図っており、埋蔵文化財遺跡の保存整備や調査等に努めるとともに当地の埋蔵文化財包蔵地において、現状を変更する工事等が計画されるときは、その事業計画前に確認調査等を実施して、できるだけ現状保存に努めてきております。

今回の調査は、県営特殊農地保全整備事業十文字地区の確認調査を行ったものであります。

この調査には、鹿児島県教育庁文化課の協力を得て実施したもので、このほど、報告書がまとまつたところであります。

調査報告書の刊行にあたり、終始、真摯な学究的态度で調査に臨まれた鹿児島県教育庁文化課の献身的なご努力とご功績に対し、心から感謝申し上げますとともに深く敬意を表する次第であります。

更に発掘調査にたづきわれた関係者、県営特殊農地保全整備事業十文字地区に係わる関係者の方々に深基のお礼を申し上げ、本書が広く郷土理解と文化財愛護に役立つよう念願するものであります。

昭和58年8月

志布志町教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、志布志町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を得て、昭和57年度に実施した十文字地区の発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆は、倉園B遺跡の旧石器時代を長野が、その他を牛ノ浜が、十文字遺跡を長野が担当し、編集は牛ノ浜・長野で行った。写真撮影は牛ノ浜が行った。
- 3 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 4 遺物番号は、倉園B遺跡・十文字遺跡で通し番号を付し、遺物番号と本文中の番号は同一である。

目 次

序	1
例言	2
第1章 調査の経過	6
第1節 調査に至るまでの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過（日誌抄）	7
第4節 調査の概要	9
第2章 位置と環境	10
第3章 倉庫B遺跡	13
第1トレンチ～第20トレンチ	
第4章 十文字遺跡	29
第1トレンチ～第16トレンチ	
第5章 まとめにかえて	67

挿 図 目 次

第1図 倉園B、十文字遺跡と周辺遺跡	9	第85図 8号トレンチ出土遺物	32
第2図 倉園B遺跡地形とトレンチ配置図	12	第86図 8号トレンチ出土遺物	33
第3図 第1トレンチ遺物分布図と断面図	13	第87図 8号トレンチ出土遺物	34
第4図 第1トレンチ出土土器	13	第88図 8号トレンチ出土遺物	35
第5図 第1トレンチ出土石鐵	14	8号トレンチ出土遺物	
第6図 第1トレンチ出土石皿	14	第89図 8号トレンチ出土遺物	36
第7図 第2トレンチ遺物分布図と断面図	15	第40図 8号トレンチ出土遺物	37
第8図 第2トレンチ出土土器	15	第41図 1号トレンチ出土遺物	42
第9図 第3トレンチ遺物分布図	16	第42図 2号トレンチ出土遺物	43
第10図 第3トレンチ出土土器(1)	16	第43図 2号トレンチ出土遺物	44
第11図 第3トレンチ出土土器(2)	17	第44図 4号トレンチ出土遺物	45
第12図 第5トレンチ遺物分布図と断面図	17	第45図 7号トレンチ分布図・出土遺物	46
第13図 第5トレンチ出土土器	18	第46図 7号トレンチ出土遺物	47
第14図 石皿	18	第47図 11号トレンチ出土遺物	48
第15図 第6トレンチ遺物分布図と断面図	19	第48図 12号トレンチ出土遺物	50
第16図 第6トレンチ出土土器	19	第49図 13号トレンチ出土遺物	51
第17図 第9トレンチ遺物分布図と断面図	19	第50図 14号トレンチ遺物分布状況	51
第18図 第9トレンチ出土土器	20	第51図 14号トレンチ出土石	52
第19図 第10トレンチ遺物分布図と断面図	20	第52図 14号トレンチ出土遺物	53
第20図 第10トレンチ出土土器	20	第53図 14号トレンチ出土遺物	54
第21図 第11トレンチ遺物分布図と断面図	21	第54図 14号トレンチ出土遺物	55
第22図 第11トレンチ出土土器	22	第55図 14号トレンチ出土遺物	56
第23図 第12トレンチ遺物分布図と断面図	23	第56図 14号トレンチ出土遺物	59
第24図 第12トレンチ出土土器	23	第57図 14号トレンチ出土遺物	60
第25図 第13トレンチ断面図	24	第58図 14号トレンチ出土遺物	61
第26図 第14トレンチ遺物分布図と断面図	24	第59図 15号トレンチ出土遺物	62
第27図 第14トレンチ出土土器	25	第60図 15号トレンチ出土遺物	63
第28図 第14トレンチ出土石鐵	26	第61図 16号トレンチ出土遺物	65
第29図 第1720トレンチ遺物分布図と断面図	27	第62図 16号トレンチ出土遺物	66
第30図 十字字遺跡地形とトレンチ配置図	28		
第31図 8号トレンチ遺物分布状況	29		
第32図 8号トレンチ出土石	30		
第33図 8号トレンチ出土遺物	30		
第34図 8号トレンチ出土遺物	31		

図版目次

第1図	1. 倉園B遺跡遠景 2. 第1トレンチ集石	73
第2図	1. 第1トレンチ石皿出土状態 2. 第14トレンチ磨製石器出土状態	74
第3図	1. 第11トレンチ断面 2. 第17・20トレンチ調査風景	75
第4図	1. 第18トレンチ断面 2. 同	76
第5図	1. 第19トレンチ断面 2. 同	77
第6図	1. 倉園B遺跡出土土器 2. 同上	78
第7図	1. 倉園B遺跡出土土器 2. 同上	79
第8図	1. 倉園B遺跡出土土器 2. 同上	80
第9図	1. 石器 2. 第1トレンチ出土の石皿 3. 第5トレンチ出土の石皿	81
第10図	1. 十文字遺跡遠景 2. 土器出土状況	82
第11図	1. 土器出土状況 2. 石器出土状況	83
第12図	1. 遺物出土状況 2. 遺物出土状況	84
第18図	1. 石皿出土状況 2. 石器出土状況	85
第14図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土土器	86
第15図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土土器	87
第16図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土土器	88
第17図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土土器	89
第18図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土土器	90
第19図	1. 8号トレンチ出土土器 2. 4号トレンチ出土土器	91
第20図	1. 1号トレンチ出土遺物 2. 2号トレンチ出土土器	92
第21図	1. 2号トレンチ出土土器 2. 4号トレンチ出土遺物	93
第22図	1. 11号トレンチ出土遺物 2. 16号トレンチ出土土器	94
第23図	1. 11号トレンチ出土土器 2. 12号トレンチ出土遺物	95
第24図	1. 18号トレンチ出土遺物 2. 14号トレンチ出土土器	96
第25図	1. 14号トレンチ出土土器 2. 14号トレンチ出土土器	97
第26図	1. 14号トレンチ出土土器 2. 14号トレンチ出土土器	98
第27図	1. 11号トレンチ出土土器 2. 14号トレンチ出土土器底部	99
第28図	1. 15号トレンチ出土土器 2. 15号トレンチ出土土器底部	100
第29図	1. 16号トレンチ出土土器 2. 16号トレンチ出土土器	101
第30図	1. 16号トレンチ出土土器 2. 7号トレンチ出土遺物	102
第31図	1. 13号トレンチ出土土器 2. 8号トレンチ出土石器	103
第32図	1. 14号トレンチ出土土器 2. 14号トレンチ出土土器	104
第33図	1. 14号トレンチ出土土器 2. 15号トレンチ出土石器	105
第34図	1. 倉園遺跡17.20トレンチ出土石器 2. 十文字遺跡出土石器 3. 石皿	106
第35図	十文字遺跡出土石皿	107

第1章 調査の経過

第1節 調査に致るまでの経過

県営特殊農地保全整備事業（十文字原地区）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、鹿児島県大隅耕地事務所・志布志町耕地課・志布志町社会教育課・鹿児島県文化課と協議した結果周知の遺跡、倉囲日遺跡（遺跡地名表68-027）、十文字遺跡（同68-028）が含まれることから確認調査を実施することになり、昭和57年度国・県の補助事業として、志布志町教育委員会が主体となり発掘調査を実施した。

調査期間は、昭和57年12月6日より昭和58年2月10日まで行い、その後の遺物の整理作業と報告書の作成は、県文化課に依頼した。

第2節 調査の組織

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者 教育長 川之上 俊一

社会教育課課長 山 烟 敏 寛

" 補佐 那加野 久廣

社会教育課主事 東 迫 光 博

調査担当 鹿児島県教育委員会

文化課主事 牛ノ浜 修

" 長野 真一

" 中村 耕治

発掘作業員

瀬戸口望 倉橋忠義 池平澄雄 川迫兼蔵 池平親夫

肥後カズ子 有川ウルカ 有川スミ子 柿並恵子 馬越早子 持永初江

鬼塚スズエ 鬼塚ヨシ子 馬場シノエ 左近充きみ子 安楽フム子

倉橋トモ子 倉橋和江 中園良子 西田フジエ 日高あさよ 吉原サエ

有川モモエ 宮地貞子 黒川ミツエ 野村あや子 川迫五月 池元幸子

内村チドリ 野辺アツ子 今別府順子 内村京子 古川百合子

整理作業員

山下治子 河野陽子 竹下より子 橋口紀美子 野口久子 渡辺栄子

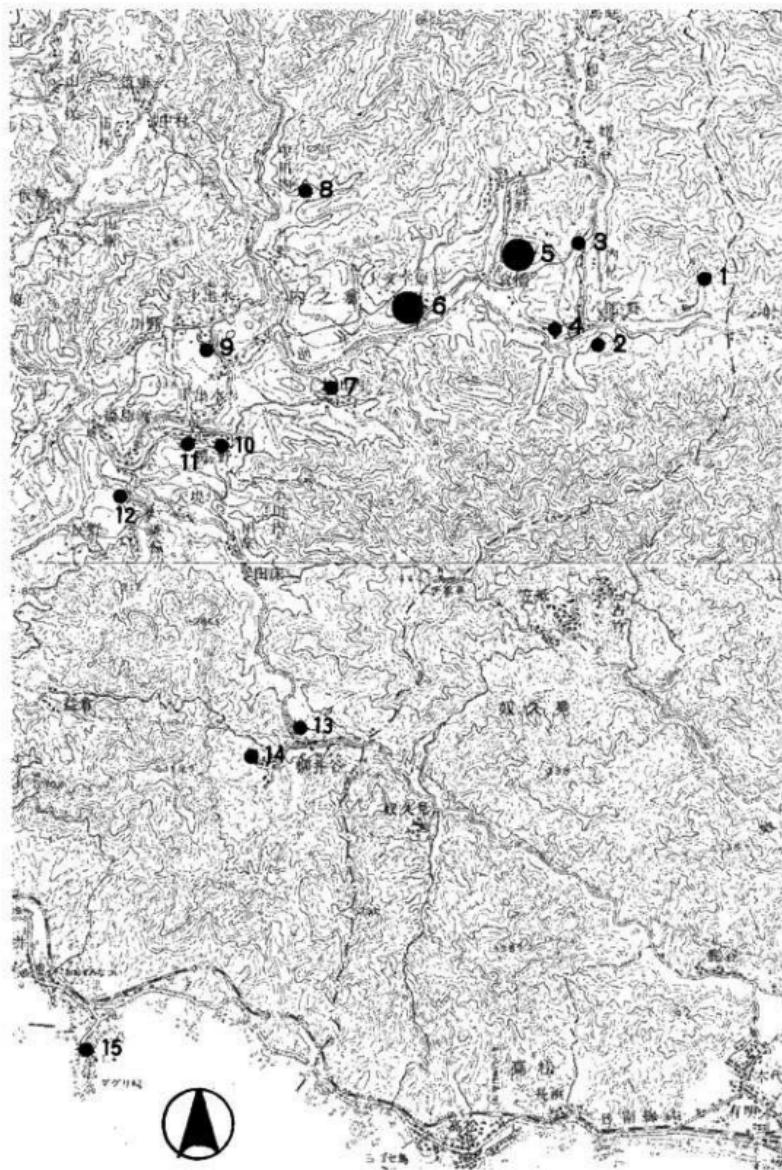
なお調査企画において、鹿児島県教育委員会文化課長 猪渡侯昭、課長補佐 本田武郎、主幹 吉井浩一、主任文化財研究員 謙訪昭千代氏等の他管理係の指導・助言を得た。

また、日本考古学協会会員の瀬戸口望氏には直接調査に参加してもらい助言を得た。

第3節 調査の経過（日誌抄）

- 12月6日（月） 発掘調査開始、説明後基準杭打ち。倉園B遺跡確認調査の為の表面採集。
区割れと調査むずかしく、畠地に沿ってトレンチ設定。1・2・3トレンチ表層除
- 12月7日（火） 1・2・3トレンチ調査、表層（耕作土）、Ⅰ層（黒色土）、Ⅱ層（黄バ
ミス層《赤ホヤ》）、Ⅲ層（黒褐色硬質土）、Ⅳ層（暗茶褐色土）
- 12月8日（水） 1・2・3・4トレンチ調査、石板式土器出土、平板実測、便所設営
- 12月9日（木） 1～7トレンチ調査、平板実測、断面実測
- 12月10日（金） 1・5～10トレンチ調査、石坂、前平式土器出土
- 12月11日（土） 収蔵庫にて図面整理
- 12月13日（月） 5・6・8～11トレンチ調査、断面実測
- 12月14日（火） 7～12トレンチ調査、断面実測、町耕地課と打合せ
- 12月15日（水） 昭和57年度予定地域の分布調査、遺物なし、9～12トレンチ調査
- 12月16日（木） 11～14トレンチ調査、遺跡全景写真撮影
- 12月17日（金） 11～15トレンチ調査、平板実測
- 12月18日（土） 収蔵庫にて図面整理
- 12月20日（月） 11～16トレンチ調査、平板実測、断面実測、朝霧強い
- 12月21日（火） 13～16トレンチ調査、14トレンチ、Ⅳ層局部磨製石器出土
- 12月22日（水） 雨の為、作業中止、図面・遺物整理
- 12月23日（木） 13～17トレンチ調査、平板実測、断面実測
- 1月24日（金） 13・14トレンチ調査、断面実測
- 1月6日（木） 午前中、文化課にて十文字原地区の調査区の打合せ。午後、収蔵庫にて十
文字遺跡のトレンチ予定地の打合せ
- 1月7日（金） 遺跡説明用パンフレット作成
- 1月8日（土） “
- 1月10日（月） 1988年調査再開、13・17～19トレンチ調査
- 1月11日（火） 13・17～19トレンチ調査、今冬一番の冷え込み、南日本報道・各新聞社取
材、八野小児童全員29名、先生5名見学
- 1月12日（水） 13・17～19トレンチ調査、午後雨の為作業中止、周辺遺跡の確認、志布志
町帖柳井谷遺跡では場整備あり、町教育委員会・耕地課と連絡
- 1月13日（木） 13・17～19トレンチ調査、17トレンチⅣ層より細石刃核出土、拡張トレン
チ設定、柳井谷遺跡緊急調査必要との結論
- 1月14日（金） 13・18～20トレンチ調査、写真撮影
- 1月17日（月） 十文字遺跡調査開始、1～3トレンチ調査、繩文時代後期の遺物出土、倉
園B遺跡20トレンチ調査

- 1月18日（火） 雨の為作業中止、図面・遺物整理
- 1月19日（水） 倉庫B遺跡20トレンチ調査、十文字遺跡1～4トレンチ調査、平板実測
- 1月20日（木） 倉庫B遺跡17.20トレンチの境拡張、十文字遺跡1～4トレンチ調査、志布志町議員社会教育課・耕地課見学
- 1月21日（金） 十文字遺跡1～6トレンチ調査、平板実測
- 1月22日（土） 写真・図面整理
- 1月24日（月） 1～7トレンチ調査
- 1月25日（火） 5・7～9トレンチ調査、町文化財保護委員見学（文化財保護デー）
- 1月26日（水） 8～10トレンチ調査、町議員全員見学
- 1月27日（木） 8～11トレンチ調査、倉庫B遺跡断面・平板実測
- 1月28日（金） 8・8～11トレンチ調査、断面実測
- 1月29日（土） 収蔵庫にて出土遺物検討
- 1月31日（月） 8・11トレンチ拡張、12～15トレンチ調査
- 2月1日（火） 雨の為作業中止、土器水洗、注記、接合、平板実測
- 2月2日（水） 8・11～15トレンチ調査、平板実測
- 2月3日（木） 11～16トレンチ調査、平板実測
- 2月4日（金） 12・14・16トレンチ調査、トレンチ埋戻し、平板実測
- 2月5日（土） 地形図トレンチ配置図整理
- 2月7日（月） 12～16トレンチ調査、平板実測、断面実測
- 2月8日（火） 8・14・16トレンチ調査、平板実測、埋戻し
- 2月9日（水） 12・14・15トレンチ調査、平板実測、断面実測
- 2月10日（木） 平板実測、断面実測、埋戻し、発掘用具・遺物収蔵庫へ、発掘調査終了、
町社会教育課終了あいさつ
- 2月14日より 8月31日まで整理作業及び報告書作成



第1図 倉園B・十文字遺跡の位置と周辺遺跡（1/5000）

第2章 遺跡の位置と環境

倉園B、十文字遺跡は鹿児島県曾於郡志布志町字内之倉に位置している。志布志町は鹿児島県の最東部、曾於郡の東南部にあり、県庁所在地のある鹿児島市より東南約88kmの国道220号線沿いにある。倉園B、十文字遺跡は志布志町役場から、さらに北東方向に約12kmの地点にあり、通称十文字台地に所在する。

志布志町は東に日南山地、西に高隈山地、南西を肝付山地、南を志布志湾にとり囲まれている。日南山地は宮崎県との県境付近に立地する山地で、福島川、安楽川などの水源にあたる。日南山地と高隈山地の間のシラス台地は、平行して流れる肝属川、申良川、持留川、田原川、菱田川、安楽川、前川などを中心とする大小河川の活発な浸食作用により急傾斜あるいは崖によって大小幾多の狭長な独立台地に分断されている。そのうち主なものを西から東へ挙げれば笠野原台地、永吉台地、大崎台地、中冲台地、有明台地、志布志台地となっている。これらの台地は厚いシラス堆積層の上に砂礫または砂層、さらにローム層、赤褐色火山灰層および黒色火山灰が覆っている。志布志湾岸は肝属川の河口から前川の河口までの約16kmにわたり砂丘が発達している。

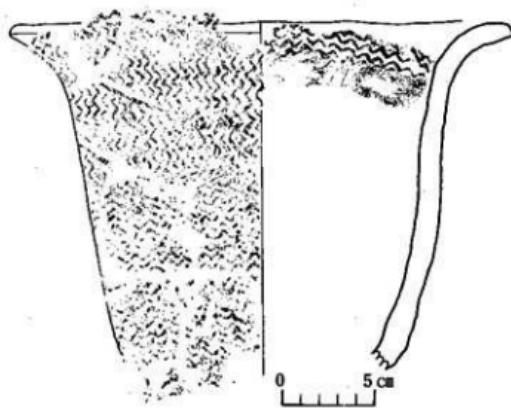
倉園B、十文字遺跡は前川の沖積台地にある。前川は志布志台地の東端部を蛇行して流れ、この前川の活発な侵食活動によって出来た沖積台地が樹枝状に発達している。

志布志町は以前より多くの遺跡が発見されていたが、特に志布志台地には縄文時代の遺跡が集中している。現在までに126の遺跡が確認されている。

表1 倉園B、十文字遺跡の周辺遺跡

1 東黒上田	志布志町内之倉東黒土田	縄文早・前期遺物、舟形石組遺構	④
2 八郎ヶ野	タ タ 八郎ヶ野	縄文後・晚期、石器	①
3 井手平	タ タ 井手平	縄文前期、平前、塞ノ神式	①
4 倉園A	タ タ 倉園	縄文後期、指宿式、鏡ヶ崎式	⑤
5 倉園B	タ タ ハ	縄文早期、石坂式、前平式、石錨	本文
6 十文字	タ タ 十文字	縄文後期、指宿式、宮之迫式	本文
7 大川内	タ 濵野大川内	縄文中・後期、出水式、指宿式	①
8 片野洞穴	タ 内ノ倉片野	縄文前～後期、曾畠式、西平式	⑥
9 上出水	タ タ 前畠	縄文早期、押型文土器、石坂式	⑦
10 出口	タ タ 出口	縄文前期、弥生、塞ノ神式、独鉛石	①
11 立花迫	タ タ 立花迫	縄文後期、南福寺式	⑤
12 錐石橋	タ 帖錐石橋	旧石器～縄文 各時期の遺物、集石	⑥
13 柳井谷	タ タ 柳井谷	縄文後・晚期、市来式、黒川式	①
14 市坂	タ タ タ 市坂	古墳時代、須恵器	①
15 鮎盛山古墳	タ 夏井ダグリ岬	5世紀、亜形埴輪、勾玉、丸玉(削減)	⑤

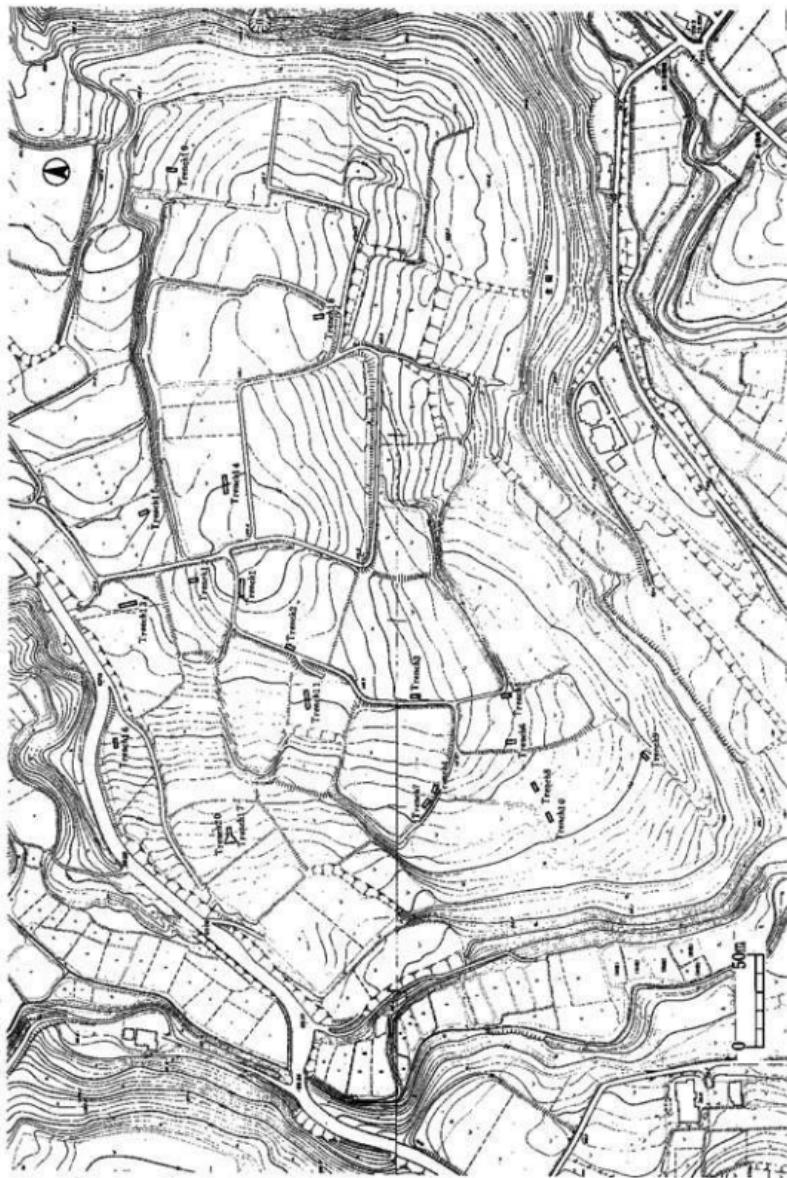
図版B 遺跡探集土器



左図の土器は昭和54年度、大隅地区埋蔵文化財分布調査による志布志町内の調査により採集されたものである。腹原口縁径は274cmを測る。胴部はあまり張らず、円筒形に近い。口縁部は大きく外反するものである。口縁部より胴部上位にかけては縦位、胴部上位より底部にかけては横位。口縁内面には横位の山形押型文が施される。押型文原体の巾は約4cmと思われる。内面には指による調整痕が観察さ

れる。胎土には、石英、長石、角閃石等を含み、焼成は良好である。胴部上位から口縁部にかけてススの付着が認められる。

- ① 鹿児島県教育委員会「鹿児島県遺跡地図」 1970
- ② 志布志町教育委員会「志布志町文化財要覧」 1970
- ③ タ 「別府(石鍋)遺跡」 1979
- ④ 潛戸口望「東黒土田遺跡発掘調査報告」 鹿児島考古第15号 1981
- ⑤ 志布志町誌上巻 1972
- ⑥ 河口貞徳「鹿児島県片野洞穴」 日本の洞穴遺跡 1967
- ⑦ 潜戸口望「上出水遺跡調査報告」 鹿児島考古第16号 1982
- ⑧ 河口貞徳、峯崎幸清、上田耕「鎌石橋遺跡」 鹿児島考古第16号 1982

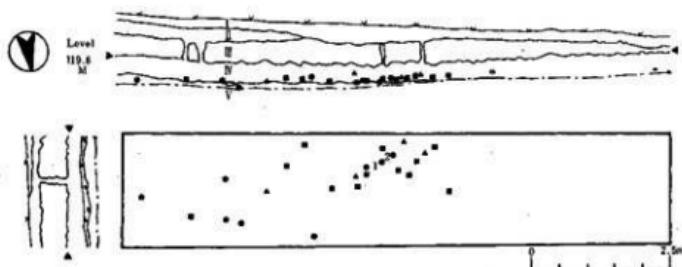


第2図 倉庫B遺跡地形とトレンチ配置図

第3章 倉園B遺跡

倉園B遺跡は、以前より縄文時代早期の土器が採集され、郷土史等に紹介されている。今回は、特殊農地保全整備事業に供う確認調査であり、当初区割を行い、トレンチを設定しようとしたが、畑地、傾斜等を考え合せた結果、任意にトレンチを設定した。その結果をトレンチ別に述べていきたい。

第1トレンチ



第3図 第1トレンチ遺物分布図と断面図

第1トレンチは、台地中央部に農道に沿い、 $10m \times 2m$ の東西に長いトレンチを設定した。

層位

第Ⅰ層 表土（黒褐色土層）で $20\sim40cm$ の厚さを有し、中央部がやや厚くなっている。

第Ⅱ層 黒色土で通称黒ニガと呼ばれていて東側が厚く、約 $20cm$ の厚さを有し、西側では削平されている。

第Ⅲ層 黄褐色バミス層であり、鬼界カルデラ起源の幸屋火碎石に対比できる。幸屋火碎石の年代は、 $6050\sim6400$ 年B.P.が与えられている。

第Ⅳ層 黒褐色硬質土であり $30\sim40cm$ の厚さを有している。縄文時代早期の石板式・前平式土器が下部から第Ⅶ層にかけて出土した。

第Ⅶ層 暗茶褐色粘質土層であり、上部には縄文時代早期の遺物が出土した。

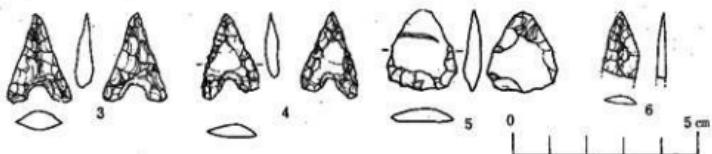


第4図 第1トレンチ出土土器

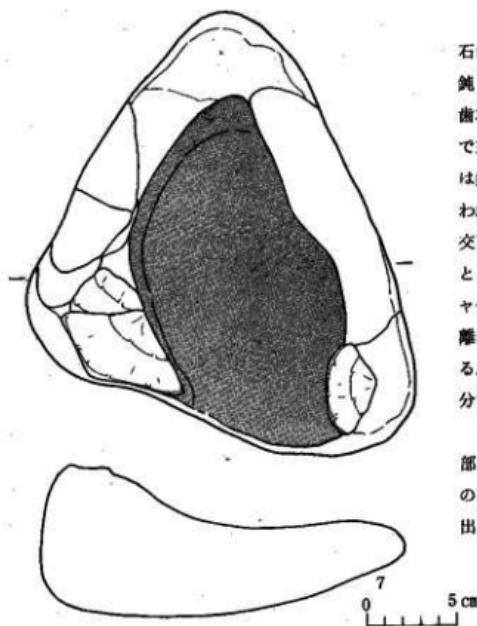
遺物

第1トレンチの遺物は、総数25点出土した。土器は、条痕文を文様にもつ石板式土器が主体を示め、チャートの剝片も多く出土した。また石錐が4点出土し、石皿も1点出土した。

1・2は条痕文を呈する石板式土器でありⅣ層上部の出土である。



第5図 第1トレンチ出土石器



第6図 第1トレンチ出土石皿

第2トレンチ

第2トレンチは、第1トレンチの南西約30mの農道に沿った畠地に5m×2mのトレンチを設定した。

層位

第Ⅰ層 表土（黒褐色土層）で20~30cmの厚さを有している。

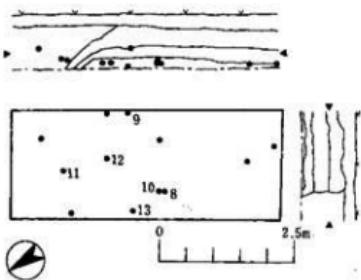
第Ⅱ層は削平されている。

第Ⅲ層 黄褐色バミス層であり、80~40cmの厚さである。

第Ⅳ層 黒褐色硬質土である。

3・4はチャートを石材とした石器で、凹基式の基部は、脚部が鋭く抉りが深い。3は、側辺が锯齒状を呈し、4は側辺がまっすぐで三角形を呈す。いずれも先端部は鋭い。5は、平基式の石器と思われるもので、側辺は片面剝離を交互に施しているチャートを石材としたものである。6はやはりチャートであり、両面からの交互剝離により薄く調整されたものである。石器とも想定したが、どの部分であるか不明である。

7は、砂岩製の石皿である。凹部は深く完形のものである。完形の石皿はめずらしく、Ⅱ層下部に出土した。



第7図 第2トレンチ遺物分布図と断面図

第7層 暗茶褐色粘質土層で縄文時代早期の遺物が出土した。

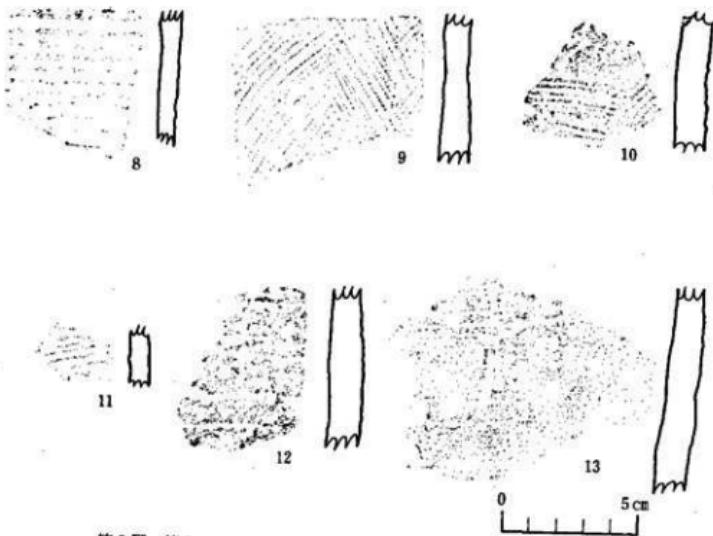
また、トレンチ北東隅では層位の横転があり擾乱されていた。

遺物

第2トレンチの遺物は、総数12点出土した。石器は認められず、自然石と土器の出土であった。

8は、貝殻腹縁を押引きした土器で田式土器である。

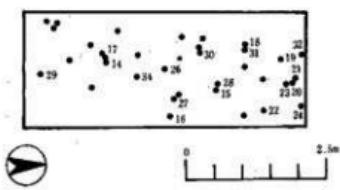
9は、貝殻腹縁の刺突と貝殻条痕を続



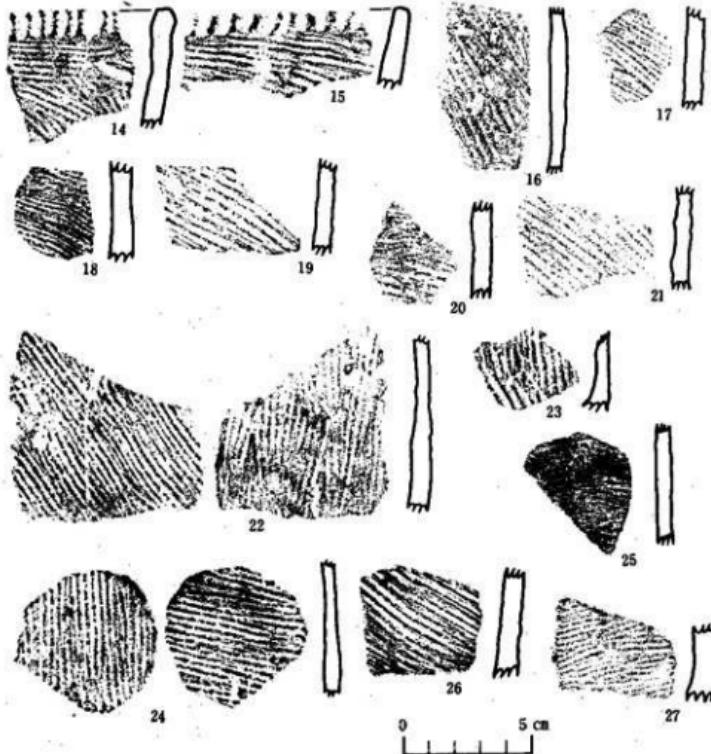
第8図 第2トレンチ出土土器

杉状に施こした土器で、10は綾杉状に条痕を施したものである。12は、貝殻腹縁を刺突したもので、9～12は石板式土器である。13は、鋭利なヘラ状の施文具を用い、横方向に沈線を施したもので、石板式土器類似のものであろう。

第8トレンチ



第9図 第8トレンチ遺物分布図



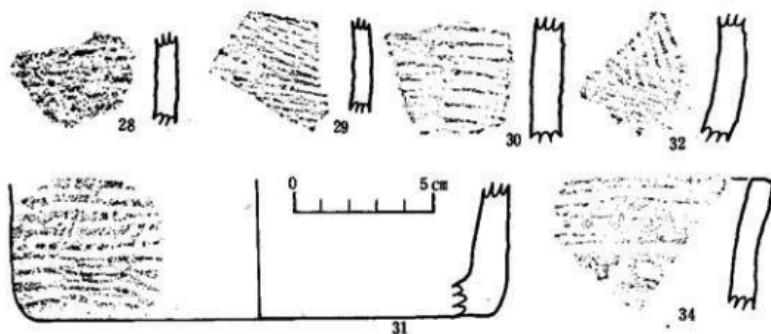
第10図 第8トレンチ出土土器 (1)

第8トレンチは、第2トレンチより南約70mの畠地に $5m \times 2m$ のトレンチを設定した。層位は、第2トレンチとはほぼ同様であり、V層に縄文時代早期の遺物が含まれていた。

遺物

第8トレンチの遺物は、総数36点出土し、縄文時代早期の前平式土器を主に、石版式土器や石器（石・石皿）の出土があった。

14-31は前平式土器で、32-38は石版式土器



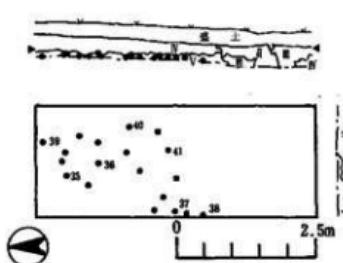
第11図 第8トレンチ出土土器(2)

である。14・15は、口縁部に貝殻腹縁による刺突を施し、胴部には貝殻条痕が横位に施された円筒形土器の口縁部である。16は、貝殻条痕を斜位に施した角筒土器であり、17~29は胴部に貝殻条痕を施したものである。30・31はやや幅の広い貝殻条痕で色調は表裏とも赤褐色で雲母・石英粒を胎土に含めている。31は底部である。32は、条痕を綾格子状に施したもので、33は、表が赤褐色で裏面は黒褐色の刺突による土器である。33は、表裏とも淡黄褐色を呈し、胎土は、石英粒を含む。やや外反する円筒形を有し、口唇部に刻目を持ち、口縁部には横位に沈線を3条巡らし、沈線と沈線の間に、半載竹管状の施文具で連続刺突文を施している。

第4トレンチ

第4トレンチは、第8トレンチの西側約50mの畠地にあり、5m×2mのトレンチを設定して調査したが、包含層と想定される地層は削平されてシラス以下の層位であり、写真撮影後埋め戻した。

第5トレンチ



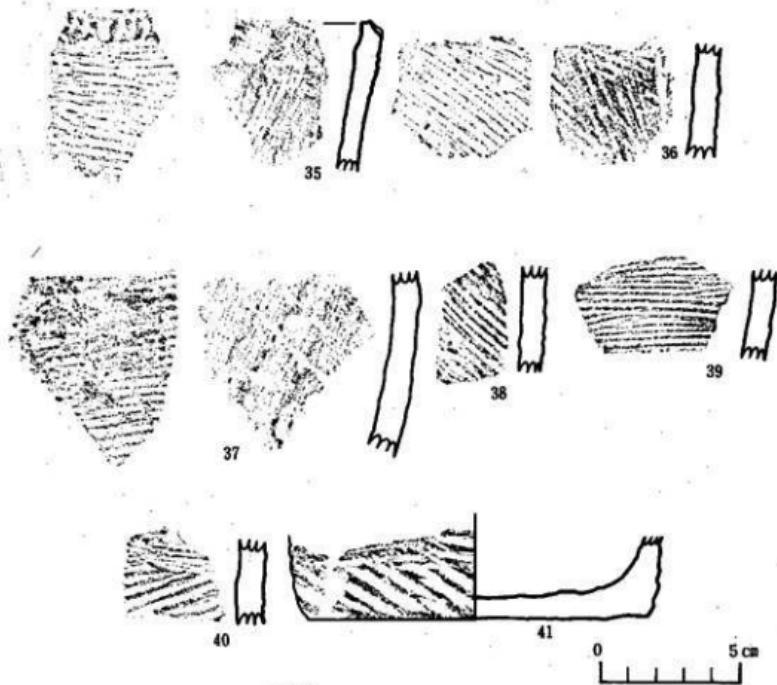
第5トレンチは、第4トレンチの南東約60mの畠地に5m×2mの南北に長いトレンチを設定した。

層位

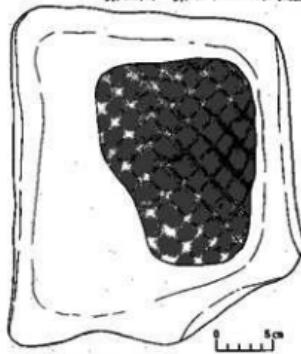
トレンチ全体的に個人的耕地整備等によってⅠ・Ⅱ層は削平され、表層の下部は一部を除いてⅢ層からの地層になっていた。トレンチ南東部には層位の断層面があり、Ⅰ層の黒色土や、Ⅲ層の黄褐色バミス層が、断層面を形成している。

第Ⅲ層

第Ⅲ層は黒褐色硬質土で20~30cmの厚さを有している。遺物は、下部からⅢ層にかけて出土する。第Ⅲ層は暗茶褐色粘質土層で縄文時代早期の遺物と包含している。



第18図 第5トレンチ出土土器

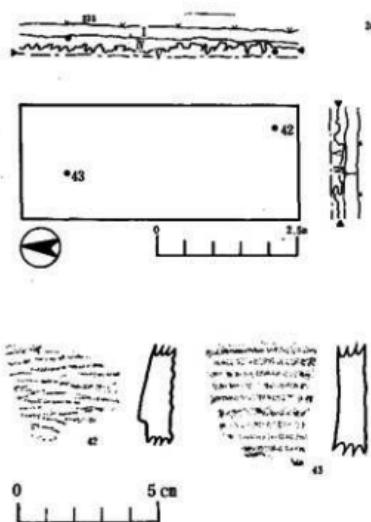


第19図 石皿

遺物

土器は全て前平式土器である。35は、口縁から口唇部にかけ貝殻腹縁による刺突、その他は横位に貝殻条痕を施した円筒形土器の口縁部であり、裏面は、ヘラガキによる調整がなされている。36-39は貝殻条痕文で裏面にヘラガキの調整痕があり、37にはススが附着している。40は、荒い貝殻条痕で文様を施した土器で底部付近である。41は荒い条痕の底部であり、底面には、ヘラガキによる調整が施されている。

石皿は砂岩を用い、研磨痕があるが長期間の使用はなされていない。



第16図 出土土器

第7トレンチ

第7トレンチは、第4トレンチのすぐ西側に $5m \times 2m$ のトレンチを設定したが、やはりシラス直上からの層位しか確認出来ず、写真撮影後埋め戻した。

第8トレンチ

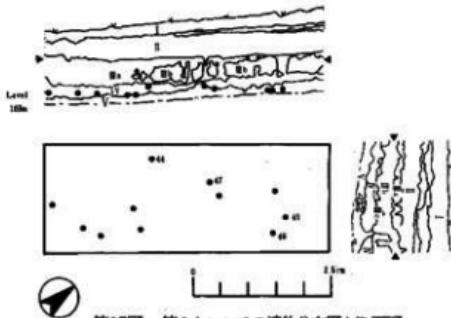
第8トレンチは、第6トレンチの南西部25mの畑地に $5m \times 2m$ の傾斜に沿ったトレンチを設定した。層位は第6トレンチと同様で遺物は出土しなかった。

第9トレンチ

第9トレンチは、第8トレンチの南側約60mの台地縁辺部で、南北に長い $5m \times 2m$ のトレンチを設定した。

層位

第1層 表層（黒褐色土層）で約20cmの厚さを有している。



第17図 第9トレンチの遺物分布図と断面図

第6トレンチ

第6トレンチは、第5トレンチの西側25mに南北に長く $5m \times 2m$ のトレンチを設定した。

層位は、やはり耕作整備でⅤ層までは削平され、Ⅳ・Ⅴ層の包含層の確認を行った。

第Ⅴ層は、黒褐色硬質土で20~40cmの厚さを有し、第Ⅳ層の暗茶褐色粘質土層の間は、腐植作用により有機物質の沈下等により不整合な面を形成している。遺物はⅤ層・Ⅳ層に1点づつの計2点出土した。

42は、淡褐色を呈する条痕を横位に施す土器で円筒形である。

43も、淡褐色を呈する貝殻条痕を施した土器である。



第18図 第9トレンチ出土土器

年1月12日の桜島大噴火の際の灰が北側に堆積している。

第Ⅱa層 黄褐色土層で通称赤ホヤと呼ばれている。

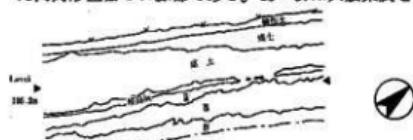
第Ⅲbc層 黄褐色バミス層で幸屋火碎石に対比できるもので無遺物層である。

第Ⅳ層 黒褐色硬質土層で約20cmの厚さを有している。縄文時代早期の土器が、下部から第Ⅴ層上部にかけて出土した。

第Ⅵ層 暗茶褐色粘質土層で遺物包含層である。

遺物

第9トレンチの遺物は、总数11点出土した。そのうち、文様等のはっきりした4点を図示した。44・45は口縁部から口唇部にかけ貝殻腹縁により刺突し、胴部に貝殻条痕を横位に施した円筒形土器の口縁部である。46・47は貝殻条痕を施した文様をもつ底部である。全て前平式土器に類する。



第19図 第10トレンチ遺物分布図と断面図

第10トレンチ

第10トレンチは、第8トレンチの15m西側に南北に長い5m×2mのトレンチを設定した。

層位は、約1mは近年の耕地整備によって盛土され、桜島の大噴火の際の灰が検出され、それ以下にⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層がみられた。他のトレンチとほぼ同様の層位であった。

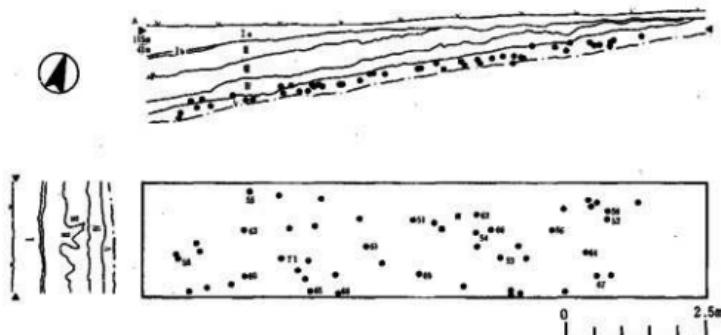


第20図 第10トレンチ出土土器

遺物は总数3点出土した。いずれもⅥ層の出土である。48・49は貝殻条痕を施した石板式土器の胴部で50は底部である。

第11トレンチ

第11トレンチは、第2トレンチの西側に隣接する畑地で約20m離れている。東西に長い10m×2mのトレンチを設定した。



第21図 第11トレンチ遺物分布図と断面図

層位

第11トレンチは、耕地整備で平らな畑地となっているが、東から西にむかう傾斜地である。

第Ia層　麦土（黒褐色土層）で西へむかって傾斜し、10~50cmの厚さを有する。

第Ib層　トレンチ西側にみられる地層であり、黒色砂質層である。耕地整備以前の耕作土であろう。

第Ⅱ層　黒色土で通称黒ニガと呼ばれていて、西側が厚く約80cmの厚さを有する。上部には桜島の大正8年の大噴火の灰がある。

第Ⅲ層　幸屋火碎硫の黄褐色バミス層である。

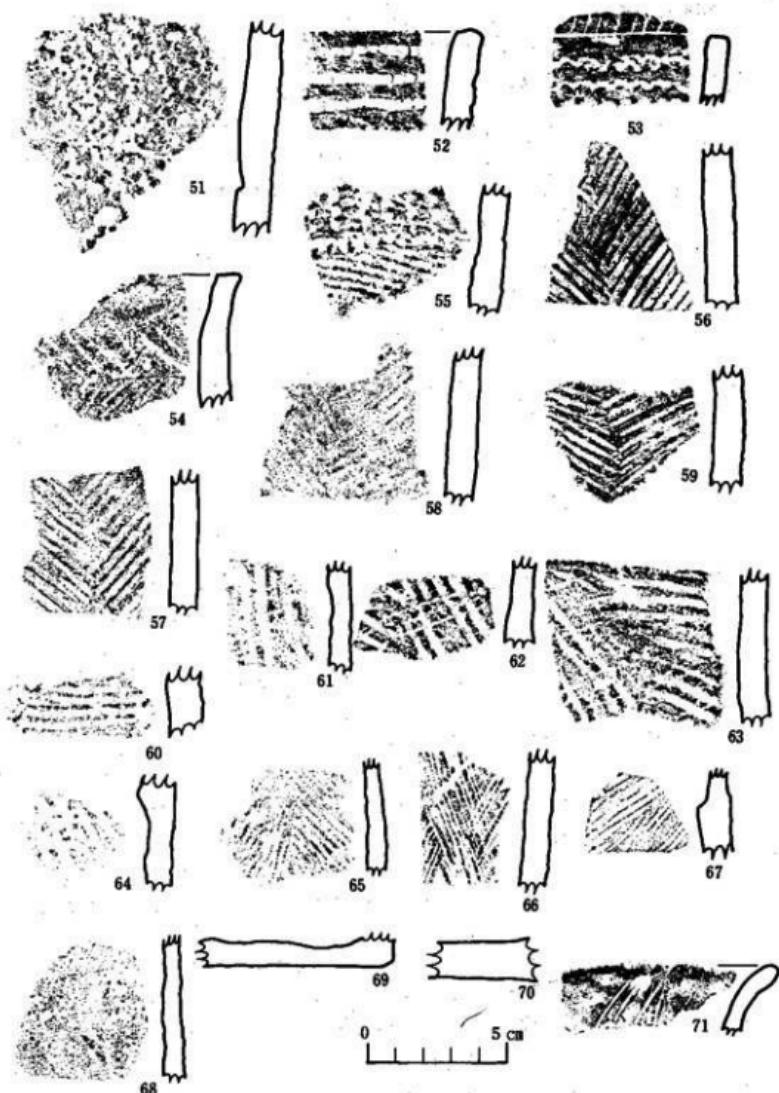
第Ⅳ層　黒褐色硬質土であり、約20cmの厚さで縄文早期と思われる無文土器が出土した。

第Ⅴ層　暗茶褐色粘質土層であり、ほぼ20~80cmの厚さを有し、縄文時代早期の石板式・前平式土器はこの層に包含されていた。

遺物

第11トレンチの遺物は、総数52点出土した。頁岩の剝片が2点出土した他は全て土器で出土層位は、5層が主であった。

51は厚い器壁を有する円筒形の土器で、縁部に貝殻刺突文を施している。器面はナデによる調整がなされているが、粗製である。52は、口唇部に平坦面を有し、文様は口縁端部から間隔を置いて三条の貝殻による刺突点文を施している。53も口唇部に平坦面を有しているが刻目がみられ、口縁部に横に貝殻刺突線文を施している。54はやや外反する円筒形土器で口唇部に刻目をもち、口縁部を貝殻腹縁による連続刺突文を右に開く羽状に施している。



第22図 第11トレンチ出土土器

55は口縁部で貝殻腹縁を縱位に刺突し、胴部は貝殻腹縁による押圧文がみられる。56~59は続
杉状に貝殻条痕を施している。60~64はやや荒い条痕が施され64は底部である。65~67は、線
の間隔の狭い条痕を続杉状に施したものであり、68は、鋭利な先端部をもつクシ状の施文具を
用いたものである。68は2トレンチ出土の18と同様で鋭利なヘラ状の施文具を用い、横方向に
沈線を施したものである。69・70は円筒形土器の底部である。71は、外反する円筒形土器の口
縁部で、口唇部は平らでなく、口縁部には右上がりの沈線が施されている。51・53・55は前平
式土器でその他は石板式土器である。71は形式名ははっきりしないがT層出土であり、縄文時
代早期の時期である。

第12トレンチ

第12トレンチは、第1トレンチの北側25mにあり南北に長い5m
× 2mのトレンチを設定した。

層位

層位は、南から北へ傾斜している。
第Ⅰ層 表層（黒褐色土層）で約
20cmの厚さを有する。

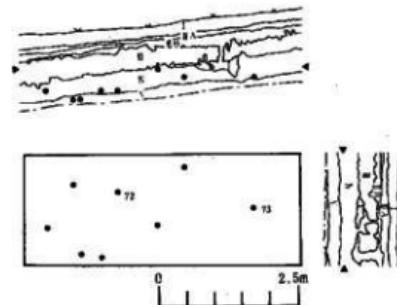
第ⅡA層 黒色土層で5~10cmの厚
さである。

第ⅡB層 砂質の混入した黒褐色土
層である。

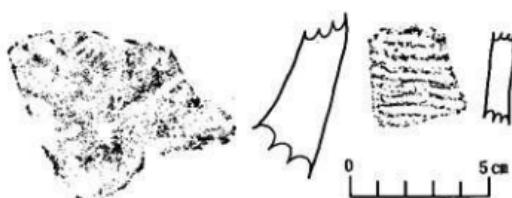
第Ⅲ層は卒屋火砂礫の黄
褐色バミス層である。

第Ⅳ層 黒褐色硬質土で
ある。遺物包含層である。

第Ⅴ層 暗茶褐色粘質土
であり約20cmの厚さを有す
る。



第23図 第12トレンチ遺物分布図と断面図



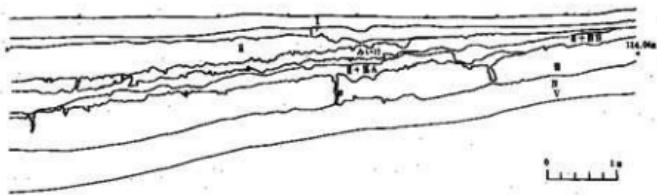
第24図 第12トレンチ出土土器

遺物

第12トレンチの出土遺物は総数8点で全て土器である。72は無文土器の底部であり、表面は
淡黄褐色で器壁は厚く、焼土は良好である。73は、貝殻腹縁による押圧文土器で吉田式土器系
統であろう。

第13トレンチ

第18トレンチは第12トレンチの北側30mに南北に長い10m × 2mのトレンチを設定した。遺
物は少く、小片が数点出土したのみであった。



第25図 第18トレンチ断面図

層位

第18トレンチは、畑地整備による削平が少なく層位は南から北へ傾斜している。

第Ⅰ層 表層（黒褐色土層）で20~80cmの厚さを有する。

第Ⅱ層 黒色砂質層であり、畑地整備以前の耕作土である。

第Ⅲa層 黒色土の通称黒ニガ層である。南側は削平により消失しているが、北側に傾斜し厚いところでは50cm程である。

第Ⅲb層 黄燈色のやや硬質の火山灰層で溶結状態もみられる。この火山灰の噴出源は霧島山系の御池に比定される。

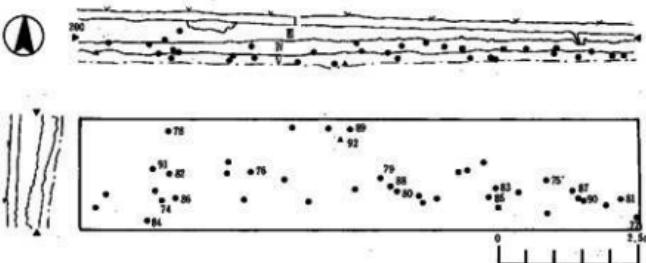
第Ⅲc層 黒褐色土層でやや硬質土である。

第Ⅲd層 黒褐色土層で砂粒の混入した土層であり他のトレンチのⅢb層に比定できる。

第Ⅲe層 黄褐色バミス層である。

第Ⅳ層 黒褐色土層で他のトレンチのⅢ層とⅣ層の区別は出来なかった。

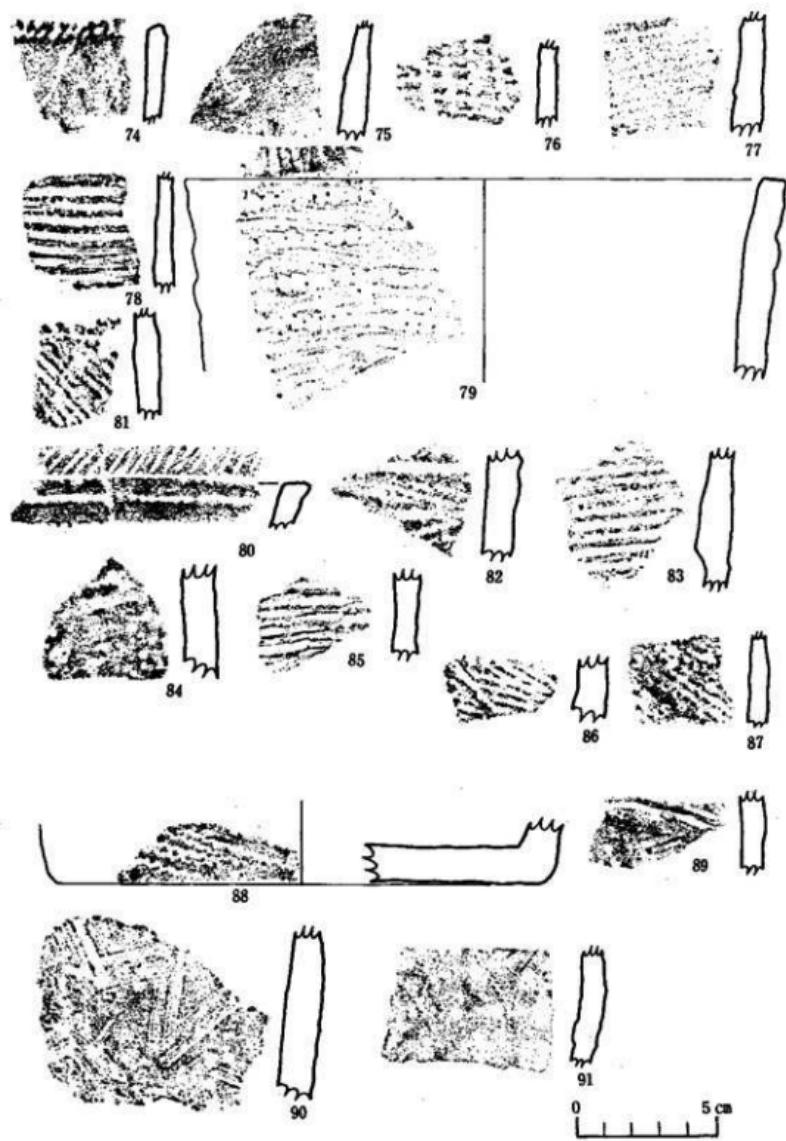
第14トレンチ



第26図 第14トレンチ遺物分布図と断面図

第14トレンチは第1トレンチの東側約50mのところに10m×2mのトレンチを東西に長く設定した。

層位



第27図 第14トレンチ出土土器

第14トレンチは、倉園B遺跡の台地中央部でⅢ層中間まで削平されていた。

第Ⅰ層 表層（黒褐色土層）で約20cmの厚さを有する。

第Ⅱ層 黄褐色バミス層である。

第Ⅲ層 黒褐色硬質土で遺物包含層である。20~80cmの厚さを有する。

第Ⅳ層 暗茶褐色粘質土で遺物包含層である。

遺物



第28図 石 器

第14トレンチの遺物は、総数86点出土した。石器2点と剝片2点の他は全て土器であり、出土層位はⅣ層・Ⅴ層である。

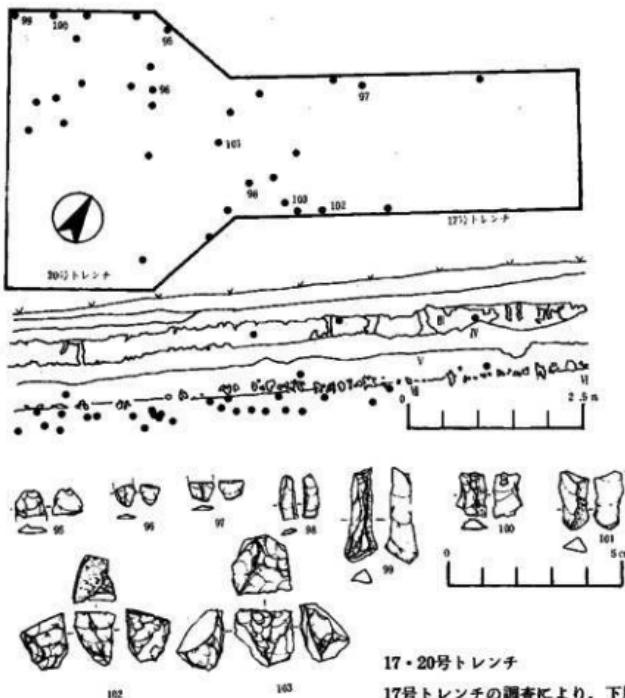
74は、口縁端部に2条の刺突をもつ小形の円筒形土器である。ナデ調整である。75も同様である。76は貝殻腹縁による押引文である。77・

78は貝殻条痕である。79は口唇部に刻目をもち、文様は口唇部から等間隔をおいて四条の貝殻による刺突連点文を施している。80も口唇部に刻目をもち、二条の刺突連点文を施している。81は刺突連点文と貝殻条痕が施されている。82は、貝殻腹縁による刺突と沈線の組合せにより文様を構成している。88~87は貝殻腹縁の条文土器である。88は円筒形土器の底部である。平底で側面は貝殻腹縁による刺突が斜位に施されている。89は条文土器である。90はヘラかきで鋸歯状に文様を施し、91は貝殻腹縁による刺突を鋸歯状に文様を施している。

92は頁岩を石材として用いた局部磨製石器である。先端部は鈍く、基部が鋭利になっていることから羅設の石器の使用も考えられる。93は頁岩による石器であり磨耗され稜が鮮明でない。

第15, 16, 18, 19トレンチ

第15・16・18・19トレンチは、第2図の配置図のように $5m \times 2m$ のトレンチを設定し、調査したが、包含層と想定される層位は削平され、シラス以下の層位であったり盛土が深く調査不可能なトレンチであり、写真撮影後埋め戻した。



17・20号トレンチ

17号トレンチの調査により、下層より
縄石器(縄石刃核・縄石刃)の出土があ

り、さっそく20号トレンチを設け拡張することとした。

第Ⅲ層がアカホヤ層、Ⅳ層が本遺跡の縄文時代早期の文化層であり、Ⅴ層が通称桜島火山灰層と呼ばれる無遺物層である。縄石器の出土層は、第Ⅵ層の茶褐色のローム層で、桜島火山灰層の下位に相当し、この出土位置は、本県の他の遺跡に順次ている。

縄石刃は、頭部(95)、下端部(96・97)があり、分割の行われたことを示している。縄石刃核は、102で二面のフルーティング面があり、左側面が先行して剝離されている。左側面では、荒い打面調整痕が行われ、最終剝離面では、縄面がそのまま残されており、打面調整の行わぬ可能性もある。103は、102同様、打面が斜行するもので、いわゆる斜行打面の石核である。剝離面に残される痕跡からは、不規則な剝離痕しか観察できない。



第30図 十字形遺跡地形とトレンチ配置図

第4章 十文字遺跡

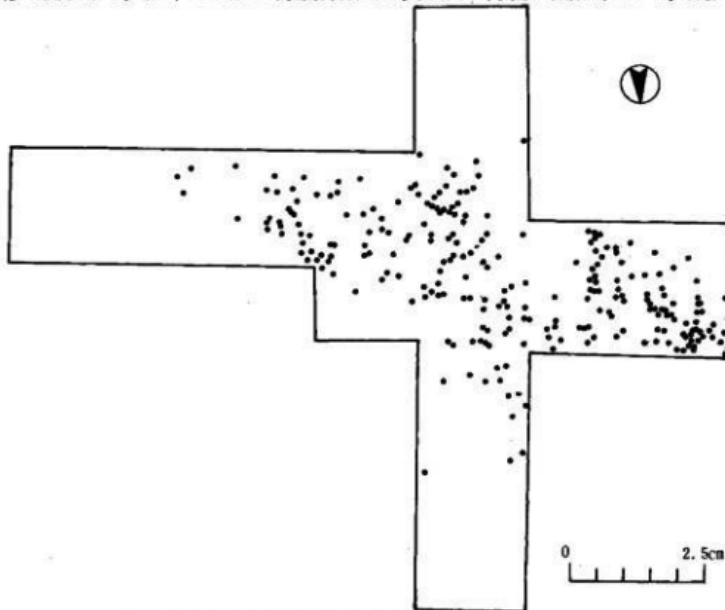
第8号トレンチ

8号トレンチは、 2×4 mのトレンチを傾斜面に平行して南北方向に設定した。その後、南北方向に烟地が開墾された際、埋めこまれ、急激に傾斜し落ち込んでいることがわかり、北部分に東西8mのトレンチを設け拡張した。分布図に見られるように、トレンチのほぼ中央部に遺物が集中し、西側と南側では遺物分布が見られることがわかった。そこで、さらに北方向に 2×5 mのトレンチを接続し、拡張を重ね北側への分布状況を調査した。その結果、トレンチ中央部より東方向へ分布が広がることが判明した。

今回の調査では縄文時代中期末より後期初頭にかけての土器片が多数出土している。そこで最も多くの遺物を出土した、本8号トレンチの遺物を分類の基本としている。分類は、文様を中心としてを行い、器面調整・器形の判明するものについても平行して記している。

石器

2点出土し、灰色の黒曜石では礎面が残される片は剝離面と思われるが風化が激しく方向等は明らかでない。2は、粘板岩を石材したもので、凹基式の長身鎌で、周辺剥離は大きな剥離で形成される。また、この石鎌は局部磨製石鎌であり両面の中央部が研磨されている。研磨



第81図 8号トレンチ遺物分布状況

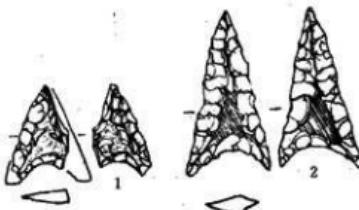
は、剥離面の上位にあり研磨は最終段階で行われたことを示している。

A類 8・4・5・6・7・8・9

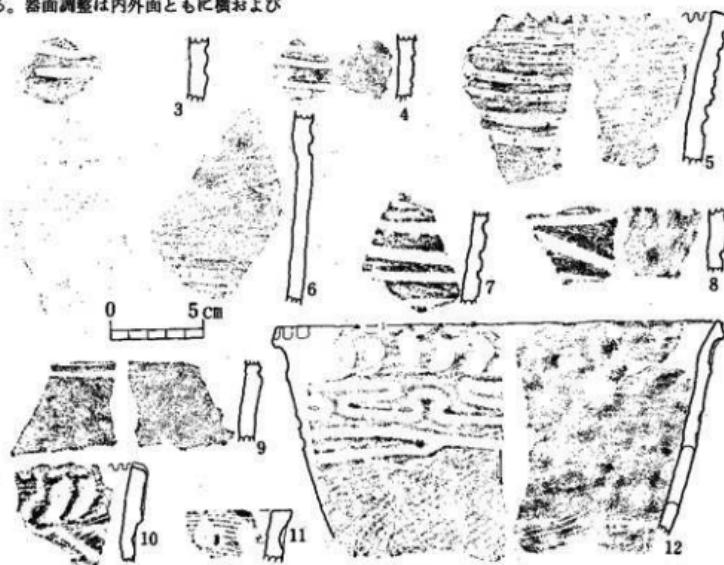
5がこの類を代表するもので、4～5mm程の棒状（ヘラ状施文具）のもので、口縁部に平行して横走する沈線文を描く土器群である。器面は、内面に横方向の条痕文が残るが、外面の文様帶は入念に擦で消されているものもある。なれ、この文様帶を擦で消す手法はこの土器に多く見られるものである。5は、口唇部は4mmくらいの棒状のもので連続した刻み目がつけられている。横走する6本の浅い四線は、先端部に筋の残ったヘラ状施文具で描かれ、凹線文の中に多くの筋状のものが残されている。器形はかなり大形の深鉢形土器で、頭部でわずかに縮まり、胴部が若干膨み鉢的最大径が胴部にあると思われる。6では、8mm程の浅い凹線文が用いられる。

B類 10・11・12・13

口縁部に縱方向の指による指先大の半月形状の凹文をもつもので、口唇部の形状は一定していない。器面は内・外面ともに条痕文が著しく、擦で整形等は行なわれない。12の口唇部前面は指先大の刻み目が連続して刻まれとい。器面調整は内外面ともに横および

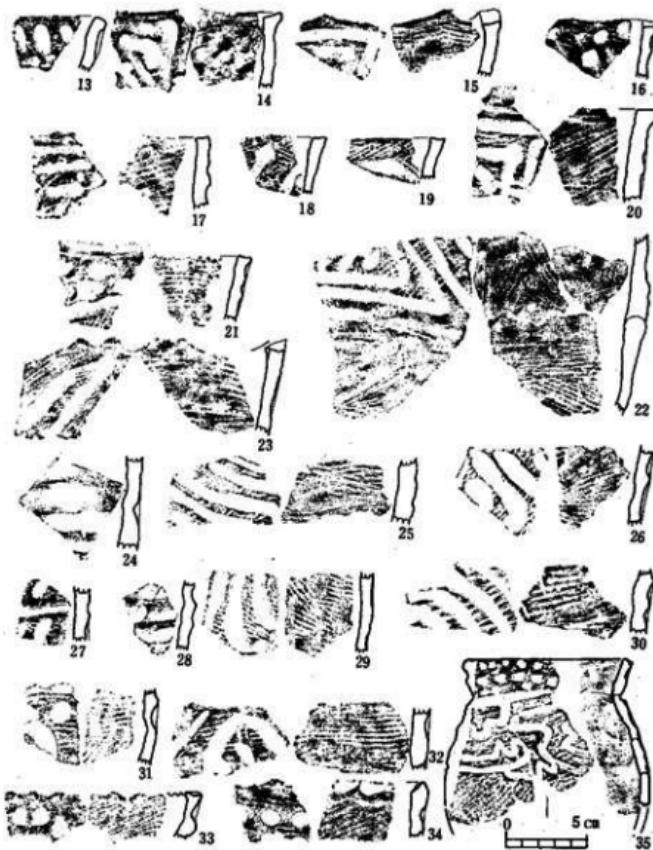


第82図 8号トレンチ出土石器

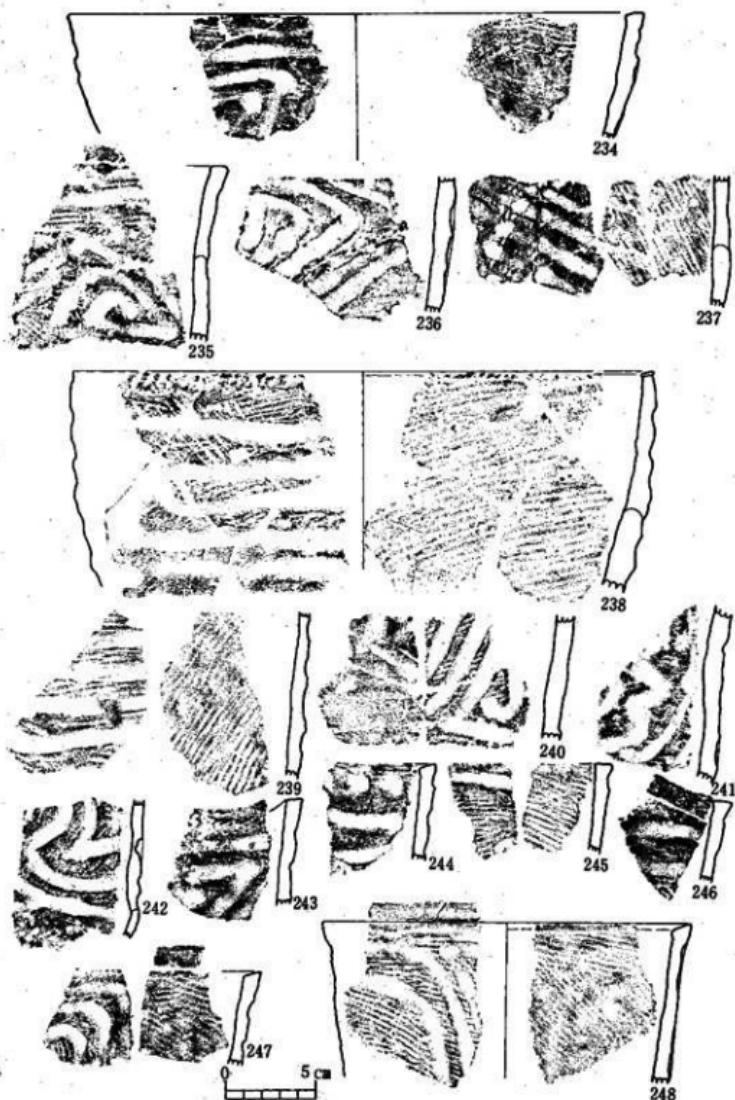


第83図 8号トレンチ出土遺物

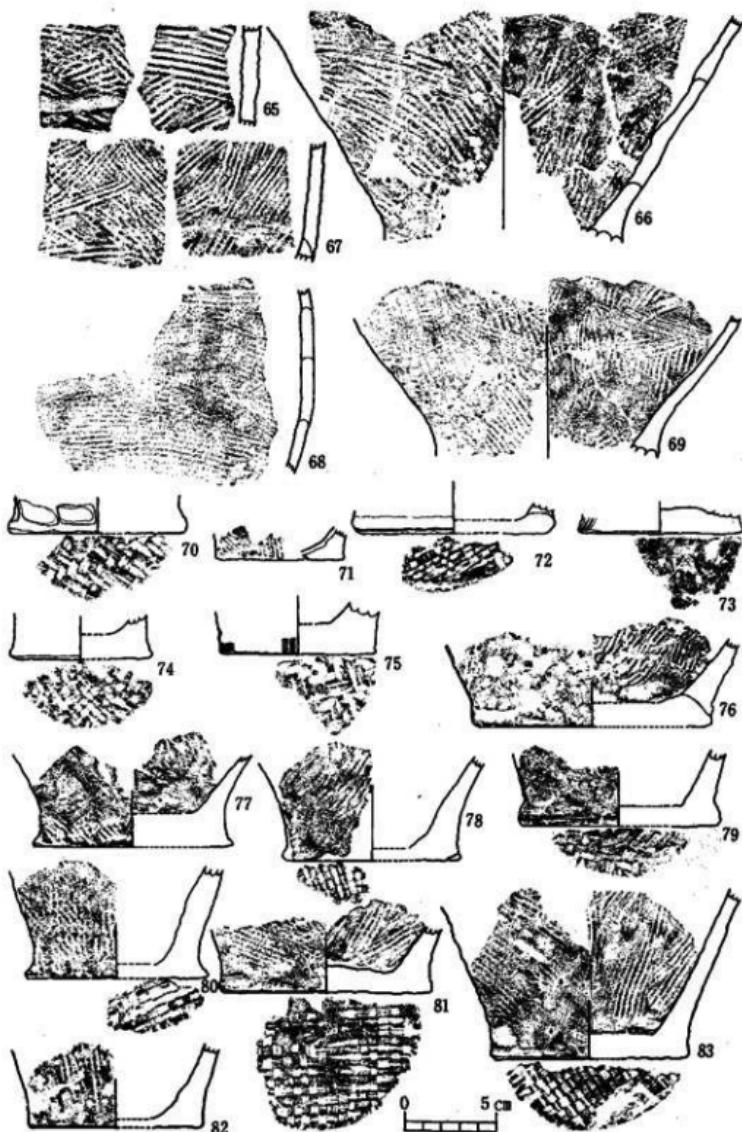
斜め方向の貝殻痕跡で調整された条痕調整である。その後、内面では一部に荒い撫で仕上げが見られ、外面の文様帶の曲線文部分でも荒い撫で仕上げが見られる。口縁部には指による直交した半月形（逆C字状）の凹線文（単線）が施されている。また、内面には指頭による凹線文を施す際に、圧痕による飛び出し（反作用）がそのまま残され、その結果、内面はデコボコしている。口縁部以下は浅い凹線文で6mm程の棒状のもので曲線文（巻貝形）がつけられる。胎土には多くの砂粒（長石・石英粒）を含み焼成は堅ろうである。10では連続する割み目口唇部



第34図 8号トレンチ出土遺物

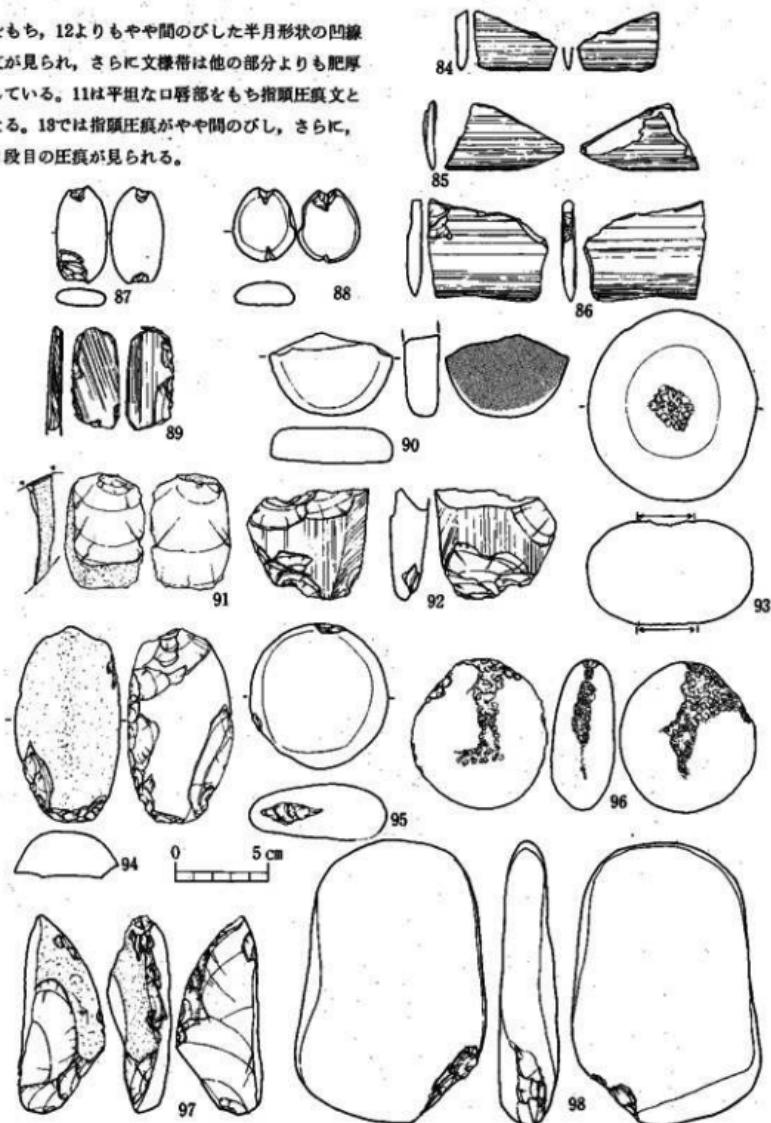


第35図 3号トレンチ出土土品

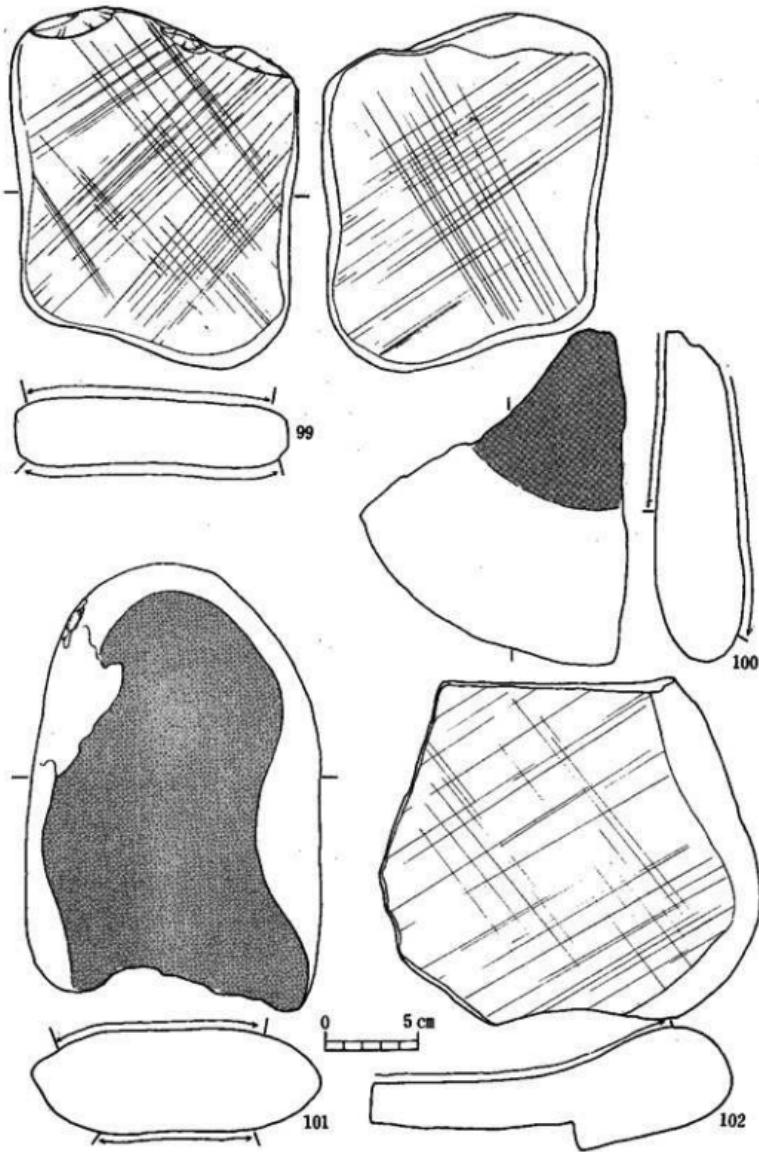


第36図 3号トレンチ出土土器

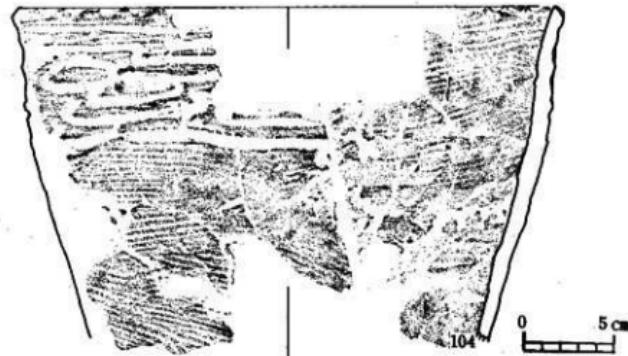
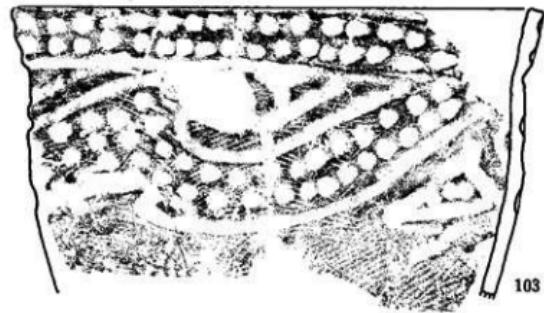
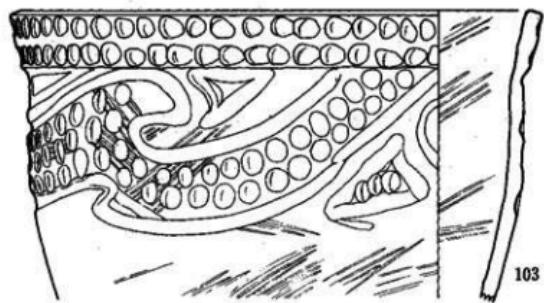
をもち、12よりもやや間のびした半月形状の凹線文が見られ、さらに文様帶は他の部分よりも肥厚している。11は平坦な口唇部をもち指頭圧痕文となる。18では指頭圧痕がやや間のびし、さらに、2段目の圧痕が見られる。



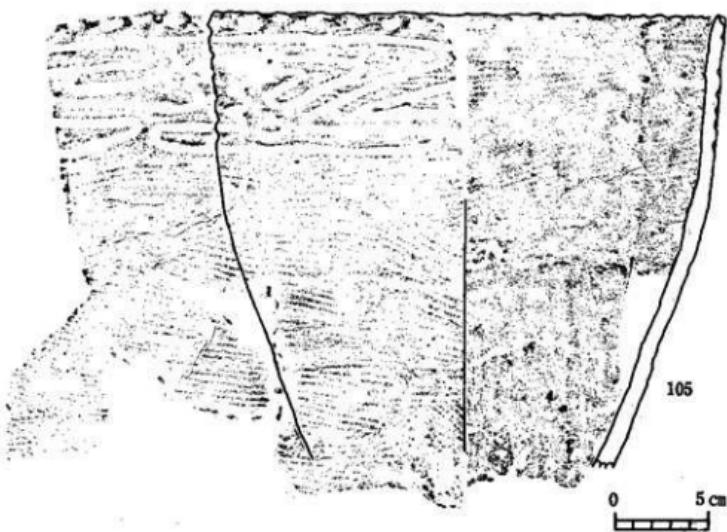
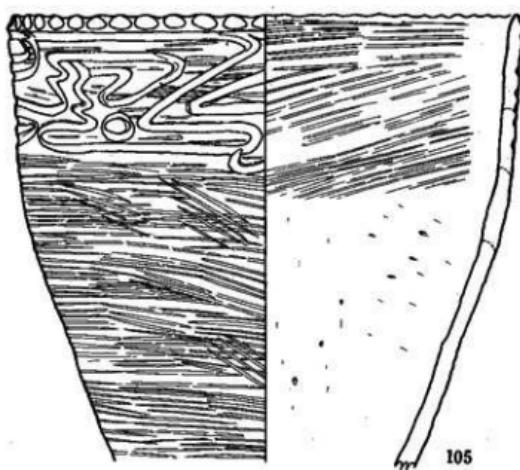
第87図 3号トレンチ出土石器



第38図 3号トレンチ出土石器



第39図 3号トレンチ出土土器



第40図 3号トレンチ出土土器

C類 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

太形凹線文により文様が構成される一群で、文様は、指頭により描かれ指頭による凹線文は約1cmくらいである。一般的に口唇部は平坦面をなし、口縁部の形状は、山形を呈するものと平坦なものが見られる。器面の調整は非常に荒く浅い条痕文で、文様を描く際に途中で再度力を加えアクセントがつけられ、その部分は圧痕状となり他の部分よりも深く刻み込まれている。この深く刻み込まれた圧痕部分は内面で飛び出した状態となり、したがって、器面が一定せずデコボコしている。15・16は山形の口縁部である。17・18・19・20・21・22・23等は、平坦な口唇部をもち28では、山形に突出した部分の口唇部のみが内傾している。22の文様は、連続して描いていくもので（いわゆる一筆描）三角形の組み合せ文となる。この種の文様は、14・20も同様と思われ、30・32等は円文の組み合せ文と思われる。また、22の内面は、荒い撫で仕上げが見られる。また、外面文様帶に見られる荒い条痕文は斜め方向に付けられるものが多く文様化している様相も見られる。

D類 38 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44

口縁部を肥厚し、四点文や棒状の施文具により刺突文を巡すものである。これらのなかで、33・34・37・41・44は、指頭による圧痕文と思われ、先に述べたB類と類似しているが、B類の場合半月形状が主体で文様も1本（単線）と限られているために分離してとらえている。

35は、頸部が強くしまり、胴部下位が大きく膨み最大径となる。口縁部は頸部より直線的に外反する小形の鉢形土器の形状を呈している。口唇部外面だけに棒状のもの（5mm）で連続する刻み目がつけられ、外面は条痕文がそのまま残され、口縁部の刺突文は棒状のもので左方向より刺突を繰り返し、二段目は一つ置きに繰り返される。頸部から胴部にかけては不規則な曲線が描かれる。内面の胴部より口縁部にかけては撫で消しが行われ条痕文が消されている。胎土には多くの石英粒や長石を含み焼成は良好である。38・40等は、文様帶は明らかな貼り付けによる肥厚がみられ、38では3.4cm、40では2.8cmくらいの粘土帶の貼り付けがみられる。39では指頭による連続した刻み目の口唇部、41・43では平坦、38・40等ではやや丸みのある口唇部をなし、42ではやや内傾する口唇部になっている。

E類 42

口縁部は山形をなし、山形の口縁部に最大径のある深鉢形土器である。器面は内外面とともに条痕文が著しく、内面の口縁部上以て荒い撫で消し、口唇部は撫で仕上である。口縁部に対し直角になる短線（棒状のもの）を連続して加える。胴部文様は、短線と同一の棒状のもので曲線文（沈線文）を描いている。

F類 47・48・49・50

貝殻腹縁部を連続して刺突し文様構成するものである。

47は、山形の口縁部をもつもので、口唇部は平坦面をなしやや内傾する。器面は内外面ともに横ないしは斜め方向の条痕文が著しく、口縁部に貝殻腹縁による刺突文が施されている。48は口唇部は平坦面をなし、やや外に傾いている。貝殻刺突文は口縁部の上位に施され、下位に

は棒状のものにより斜めの連続した短線が加えられている。49は、口縁部が山形をなし口縁部に48にみられたと同様の斜めの連続した短線が施されている。貝殻刺突文は、胴部に描かれた凹線文、特に長梢円形の凹線文間と直下の右上りの凹線文間にみられる。また、この土器では口縁部の短線が施された部分では条痕文がよく残されているが、貝殻刺突文の施される部分では入念な撫で消しが行なわれている。文様は、条痕文の撫で消し、貝殻刺突文、凹線文という順序である。この連続刺突文は、擬似磨消済文と呼ばれる手法と同一である。50は、山形に突起した口縁部に粘土帯を貼りつけたもので、突起部分の上位は指頭によりつまみがみられ座んでいる。貝殻刺突文と凹線文の組み合せがみられ、器面は条痕文がそのまま残される。

G類 52 53 54 56 57 58 59 60

いわゆる無文土器で、52・58の山形の口縁部をもつものと、他の平縁とがみられる。52の外面は条痕文の入念な撫で消しがみられ、58では内外面ともに撫で消が行なわれる。また58・54では輪積みの成形痕が認められ、58では上から4段目で1cm、順に7mm、8mm、8mmを測る。また、輪積みは右下りの傾向を示している。54でも同様であり、右下りの傾向を示し、やや波を打つ状態がみられる。また、58では、内面の整形が入念であり、外表面に輪積みの状態は観察できない。このことは土器の目的が容器であることをよく現わしているものと考えられる。この傾向は、58・59等の無文土器でもみられ、円盤の整形が外よりもより入念に行なわれていることと共通して言える。これらの無文土器は有文土器と共存関係にあり、粗製土器の範囲にはいる。

底部

70は、底部径9.2cm組織圧痕文をもち、外面に指頭による整形の痕跡を残し、張り出した底部である。71は、底部径7.2cm直線的な底部の形状をもち、条痕文が残される。72も底部径11cm組織圧痕文をもち、円盤状の粘土貼り付け成形がみられる。73は底部径9cmで、外面は条痕仕上げ、接地面には木葉圧痕文が残される。74は底部径7.8cm、75は底部径8.6cm、76は底部径13.1cmで、内外面ともに条痕仕上げと思われるが、外面は剝脱が激しくみだれている。77は、底部径10.8cmで一部に条痕文を残し、撫で消しも行なわれ、また張り出した底部となっている。78は底部径9.5cm、79は底部径11cmで、横方向の撫で仕上げられている。80は底部径9.8cmで、77と同様の形状を呈している。81は底部径11.5cm、82は底部径9.4cm、88は底部径11cmで条痕文が著しい。

石錐 87・88、いずれも石材は砂岩で小砾を用い、87は、打ち欠いただけのもの、88は、上面は打ち欠いた後に、研磨し溝状に仕上げ、下面是、そのまま砾面に研磨を行ない溝状につくりあげている。

石包丁状石器 84・85・86、石材は、いずれも砂岩、扁平で板状の素材を横方向の研磨により造り上げるもので、刃部は、さらに入念に研磨され、「U」字ないしは「V」字状の形状をなし、平均して中央部で5mmの厚さをなしている。

小形の磨製石斧 89先端部は欠落している。扁平な磨石と思われ、右のスクリントーンの部分が目的部で、その他は穂面を残している。石材は砂岩である。

剣片 91 石材に砂岩を用い円錐より剝出されたもので、使用はされていない。黒の三角形は打点を示している。

磨製石斧 92 やや大形で、泥岩を用いる。そのためか破損が激しくほとんど原形をとどめない。二次的に他の用具に利用された可能性もある。

打製石斧（石錐） 94・97 穂面を多く残すもので、剝出された大形の剣片が素材となっている。打製石斧ないしは石錐的な用途があったと思われる。94の主要剝離面にみられる面側と頭部の剝離面は成形剝離と思われ、下端部の小さな剝離は使用時の剝離と思われる。また、97の側縁部の剝離痕も使用時の痕跡と考えられる。

凹石 98 石材は砂岩

叩石 96 周辺部と中央部の両面に敲打痕がみられ、石材は粒子の荒い砂岩

ハンマーストーン 95・98・95は石材は砂岩で破裂痕がみられ、敲打の跡のものと思われる。98は、石材は砂岩で右側下端部に破裂痕がみられる。

石皿 99・100・101・102、いずれも砂岩を石材としたもので、素材に板状のものを使用している。99では二面の石皿面をもち板状の全面を使用し、100でも両面を使用しているが、中央部だけを使用した面とほぼ全面を用いた面とがみられる。101では他のものよりやや厚手の素材を用いているが、利用面が特に窪んでいることはない。102が最も一般的にみられる石皿で使用面が特に窪んでいる。

108 復元口径29.5cmの深鉢形土器で、口縁部がやや広くなる器形をなしている。二枚貝による条痕整形の後、内面と外面の文様帶の一部に擦で消しが行われている。口縁部の文様帶は粘土板の貼り付けがみられ他の部分よりも肥厚し、指頭による凹点文（圧痕文）が二段平行につけられ、凹点文の右側には爪痕も残されている。下位の文様は、指頭による浅い凹線文がつけられ、三角形文様と曲線の平行線文がみられる。また、凹線文間には、上位の口縁部につけられたと同様の凹点文がみられ、凹点文は、二段と三段がある。胎土には、多くの砂粒が含まれ、黒褐色を呈しているが、器面の剥脱がみられる。この土器の帰属は、口縁部の文様施文よりD類土器が最も近いと言える。また、下位の文様構成は基本的にC類土器に認められるものであり、このことよりC類土器とD類土器との両様相を持っていると言える。さらに、このことは、C類土器とD類土器が極めて近い関係にあるとも考えられる。

104 復元口径29.8cmの深鉢形土器で、口唇部は、条痕整形の後、指頭の圧痕による連続した刻み目がつけられ、その後、横方向の擦でがみられる。器面全体は、条痕仕上げであり、文様帶だけに荒い擦で消しが行われている。文様は、棒状のもので浅い凹線文で、A類土器に近

いと思われる。

105 復元口径27.8cmの深鉢形土器で、胴部上半より口縁部へかけ直線的に立ちあがる器形を呈している。口唇部は、指頭による連続した刻み目がつけられ、刻み目は左側より右方向へと連続してつけられている。器面全体は、条痕仕上げであり、文様帯の一部に荒い撫で消しがみられる。104と類似した土器であるが、文様施文具として用いられた棒状施文具は104よりもやや細く、文様も円文や巻賛文等やや煩雑である。104と同様、A類土器と近い関係をもつと思われる。

1号トレント

106 (B) 口唇部は平坦をなし、外面にのみ棒状のものにより連続した刻み目がつけられる口縁部はやや肥厚し、指頭による半月形状の凹線文が施され、その下位に長椭円形状の凹線文がつけられる。この凹線文は棒状の施文具により浅くつけられる。器面は内・外面ともに条痕文が著しい、内面口縁部直下にのみ撫で仕上げとなる。

110 (F) 器形は直線にやや外開きに立ち上がり、口唇部は尖る。器面は円外面ともに入念な撫で消しが行われ、貝殻腹縁により連続した刺突文が施されている。施文に用いられる貝殻腹縁は17cmくらいである。

109 (F) 口唇部が平坦面をなし、口縁部に二段にわたり貝殻刺突文がつけられ、下位には棒状のもので凹線文がつけられている。円・外面ともに条痕文が残される。

111 (F) やや丸味をおびた口唇部をもち、外面を連続した浅い刻み目をついている。口縁部の文様は、貝殻による連続刺突文である。

112 (F) 110を同様の手法で文様をつけたもので口唇部の形状がやや異なっているが、同一個体の可能性もある。なお、111・112の器面は、円・外面ともに入念な撫で消しが行なわれている。

113 (B) 口唇部は平坦面をなし、口唇部に対しやや斜めの単線を連続して施し、施される単線はかなり深くえぐり取られている114 (B) も同様であるが口唇部が内傾し、単線は113程深くない。両器とも条痕文が激しい。

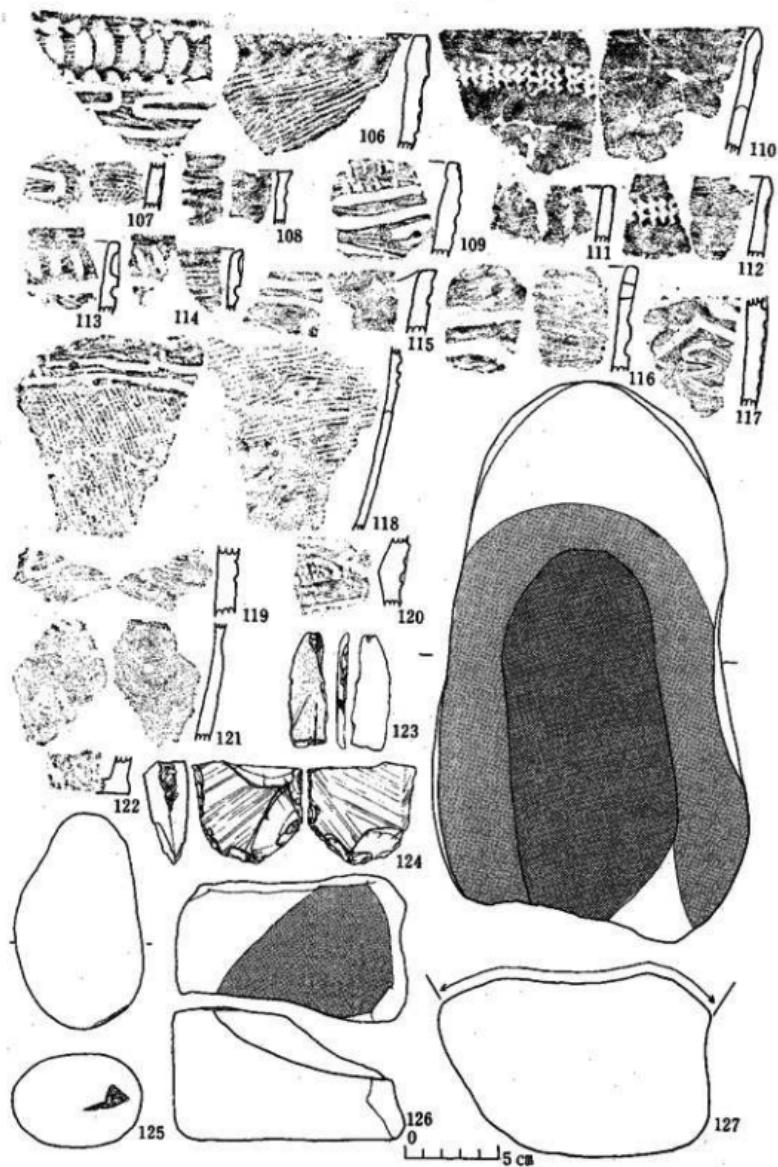
107 (F) 長円月形状の凹線文間に貝殻刺突文が施されたもので、入念な撫で消しの後、施文している。

123の石錐は、節理面に添って分離した剥片を素材とし、上面は打ち欠いた後に一部に研磨し、下面は下端部を研磨した後、研磨で溝状に切り込んでいる。

124は破損した磨製石斧の先端部で、石材は泥岩、125は叩石で石材は砂岩を用いている。

126は、深い使用面をもった石皿の破片で、石材は砂岩である。

127は、枕石状の砂岩礫を素材とした石皿で、使い分けたスクリントーンは内面の黒の強い部分は、ほぼ磨耗痕が主として観察できるエリアであり、外周の黒の薄い部分は磨耗痕と蔽打痕のともにみられるエリアである。

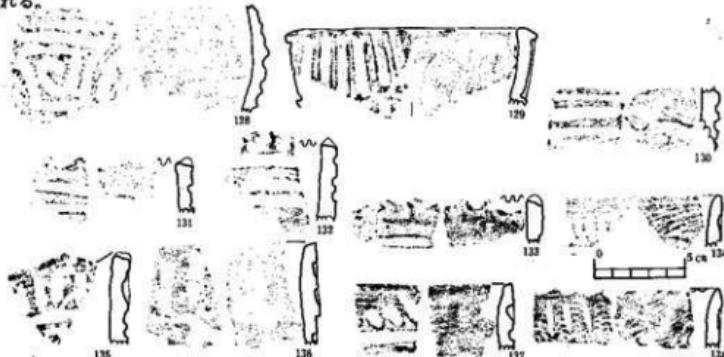


第41図 1号トレンチ出土遺物

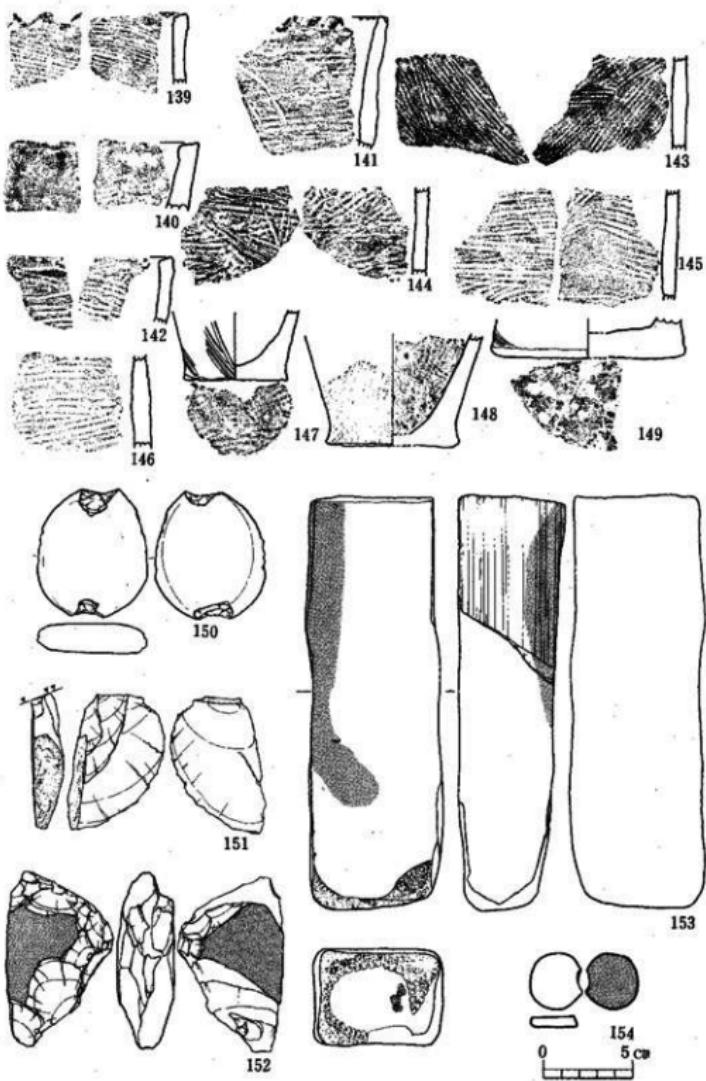
第2号トレンチ

128、胸部の破片と思われ、最大径は、この一部にあると考えられる。文様は棒状のもので深く刻まれ一筆描による組み合せ文となっている。内面は、横方向の条痕文が著しく、外面の文様帶では入念に撫で消しが行われている。129、復元口徑12.0 cmで、口唇部は平坦面をなし、やや外傾し、内面の仕上げは撫で整形の後に条痕仕上げがみられる。また、外面は条痕整形の後に荒い撫で消しが認められる。文様は口縁部に対し直角に棒状のものでつけられ、凹線文間の中央部に必ず一束の筋が残されている。130～133はA類土器と思われる。131の口唇部は内面・外面と交互にそれぞれの方向より棒状のもので刻み目がつけられ、132では、指によりつまみ上げられ、133では、内面方向より棒状のもので刻み目がつけられている。いずれも、外面の文様帶では撫で消しが認められる。134～138これらはD類土器に含まれるものである。134は焼成の極めて良く堅ろうである。口縁部文様の単線は、棒状のもので斜めに深く刻み込まれている。135は、焼成が悪く剝脱も激しい。口縁部が山形をなし内面の撫で消しは入念であったと思われ、外面は条痕仕上げのままと思われる。136は胎土が荒く、長石や石英の粒子も大きく器面はザラザラとしている。口縁部の文様帶は、粘土板の貼り付けがみられ、文様は棒状(半截竹管状のもの)のもので下から上への粘土のけずり取りが行われている。137では内外面ともに入念な撫で消しが行われている。139～142は無文土器でG類土器である。139の口唇部は、指頭による連続した刻み目がつけられ、内外面ともに横方向の条痕文が著しい。140は、口唇部は平坦面をなし、器壁も厚くなっている。荒い撫で消しが内外面ともにみられる。141は、口唇部外面に棒状のもので浅く刻み目がつけられ、刻み目は二個が単位となっている。器面調整は荒く、また、器面の乾燥する以前に行ったと思われ整形後の粘土板の返り粘がみられる。外面の左側に浅い沈線文がみられるが意図的なものか定かでない。

147底部径5.7 cm, 148・7.5 cm, 149・11.0 cmである。149の接地面は木葉痕の圧痕文と思われる。



第42図 2号トレンチ出土遺物



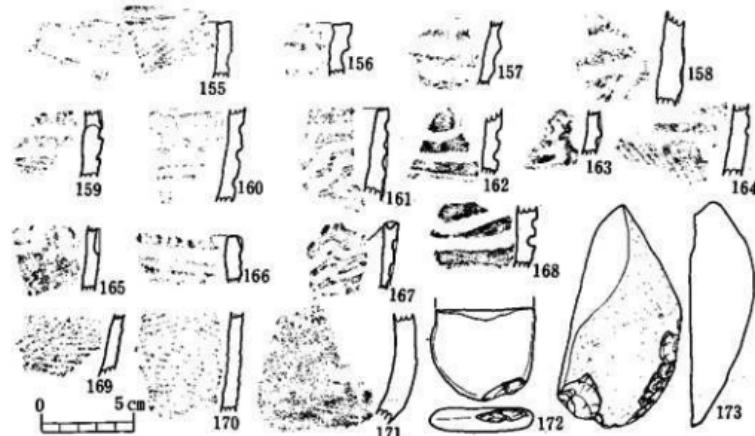
第43図 2号トレンチ

150 石材は砂岩で、両端とともに打ち欠きにより石錐をつくり出し、また、打ち欠き面は磨耗が認められる。151は、砂岩の剥片で、黒の三角点は連続した打点の位置である。152は、石皿（板状の石皿）と再利用した石器で、石斧ないしは石鎚的用途が考えられる。スクリントーンは、もとの石皿面である。158は、叩石・石槌の用途が考えられるもので、ススが多量に附着している。スクリントーンで示した部分である。154は磨製の石製加工品で一部は欠落している。

4号トレンチ

155 (C) 指頭により浅く太い凹線文がつけられる土器で、二枚貝による条痕文の上に太形凹線文がつけられる。口唇部は平坦面をなし、指頭による撫で仕上げとなる。この手法は156・157・158も同様である。この4点に描かれる太形四線文は、直線を主体とし、158では三角形の組み合わせ文となっている。159 (E) 口縁部直下に、垂直方向で単線の連続文がみられるもので、単線文の下位に三本以上の平行線文がつけられている。161撫で仕上げの行われた器面に巻文を組み合わせたもの、屈曲した平行線文で162と同様である。また、山形口縁部をもっても同様である。162・168は、入念な撫で仕上げのみられるもので、A類土器と思われる。171は、胴部下位が丸くなる器形となすもので、他と類似がなく、底部が丸底に近いと考えられる。

172は、ハンマーストーンで石材は砂岩を用いている。半上部は欠損しているが、目的部には破裂痕がみられる。173は、粒子の細かい砂岩を用いている。素材に、礫面を残す厚手の剥片を用い、打製石斧的様相が考えられるが明らかでない。



第44図 4号トレンチ出土遺物

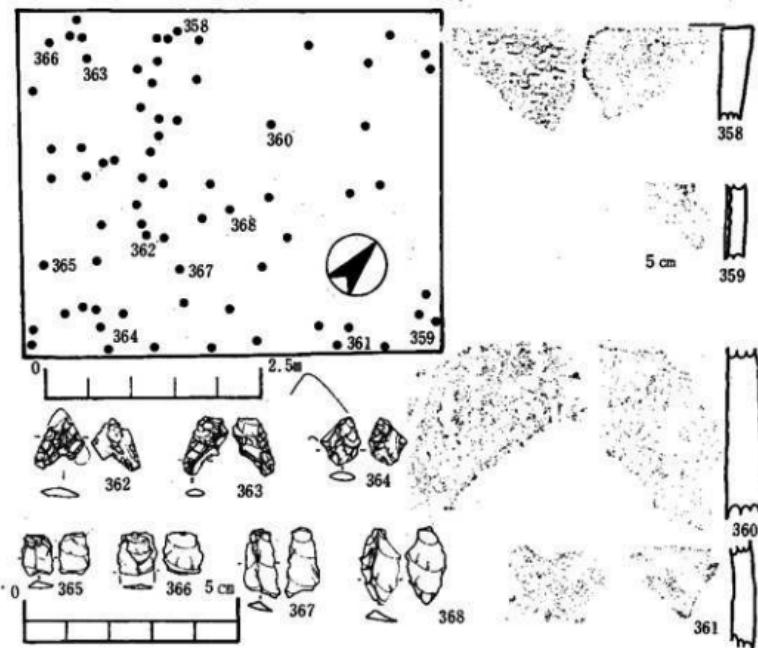
7号トレンチ

本試掘地は、耕地や開地により堆積土の上層が削平を受けた場所である。そのため、縄文時代中期以降の遺物を含んだ層は存在せずアカホヤ火山灰が現在の耕作（表土）面に相当している。調査の結果、本トレンチからは、縄文時代早期の遺物が出土し、通称、貝殻文土器と呼ばれる土器片と、チャート・黒曜石・水晶等を石材とした石器や剣片、チップ類も出土している。

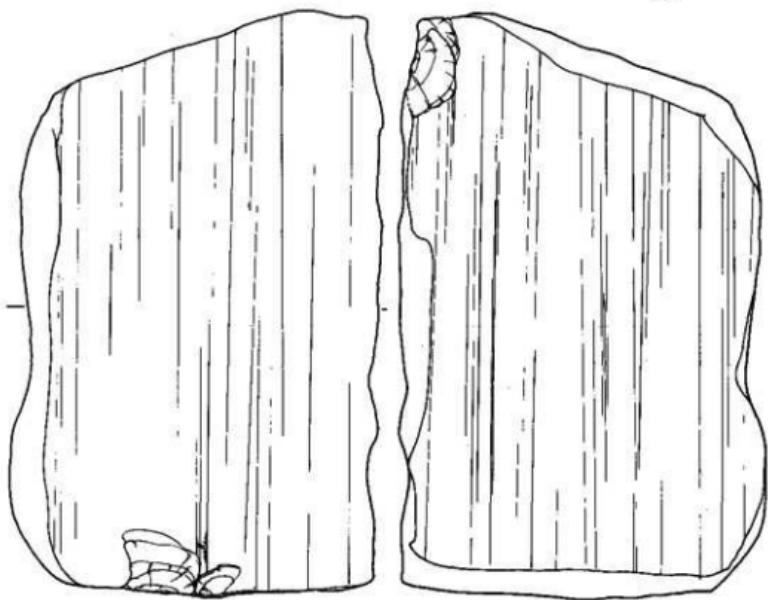
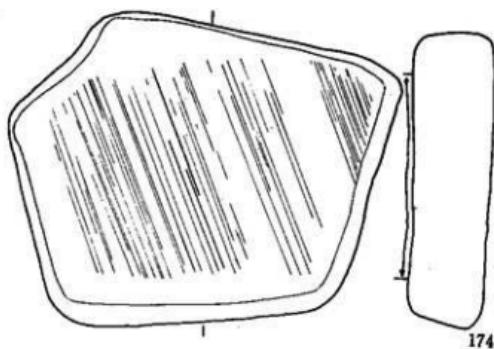
858 口唇部が平坦面をなした円筒形深鉢形土器で、内外面ともに条痕調整の後に、撫で消している。文様に用いた施文具は、二枚貝の腹縁部と思われ、連続した刺突文で構成されている。859も858と同種の文様がみられるもので、内面は剥脱している。860は胸部附近と思われるもので、内外面ともに撫で仕上げが入念である。胎土は、砂粒が外く含まれ粒子も大きいものが目立っている。文様は、貝殻腹縁で縱・斜め方向につけられ三角形文や菱形文の構成とみられる。861も貝殻腹縁により文様を施したものである。

石器 362 368 364

362 透明な黒曜石を用いた凹基式の開脚形で、整形剝離は細かく全周におよんでいる。なお裏面の大剝離痕は、頭部の欠損の際生じたものと思われる。363も362と同様の石器でやはり



第45図 7号トレンチ



第46図 7号トレンチ出土遺物



第47図 11号トレンチ出土

11号トレンチ

176 横面を残す縦長削片で、頭部は分離されているが14.1cmの長さをもっている。石材は砂岩、右側縁に使用痕と思われる剥離痕がみられる。177 叩石で、中央部と両端に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。178 番平な円盤状の素材の片面を研磨したもので、磨製の石製加工品である。使用目的は不明、石材に砂岩を用いている。179 両端を打ち欠いて目的部とした石錐で、砂岩を用いている。

180 小さな山形をなす口縁部をもつもので口唇部はやや丸味をもっている。180と188とは同一個体と思われる器面の文様帶は入念な撫で消しが行われ、線は4mm程の縦状のもので浅く半円形状に連続しと施されている。この撫で消しの手法は182・184・188・189・198・195でもみられる。また182・198・194・195に描かれた文様は、長横円文と思われる。これらの土器はA類に帰属する可能性がある。185・186は口縁部に縱方向の単線が連続して施されるものでE類土器であるが、器形等はA類土器の器形と類似している。185では文様帶のみに入念な撫で消しが行われ、口唇部には小さな刻み目がみられる。186では、口縁部の連続単線部分は条痕文がそのまま残され、単線部以下の沈線文帯と内面では撫で消しが行なわれている。口唇部は平坦面を形成し、内面方向にのみ連続した指頭による刻み目口縁となっている。187(F) 口唇部は平坦面をなしや内傾し、口縁部に貝殻腹縁により連続刺突文がみられる。また、二本の沈線文間に棒状刺突により二段の連点文がつけられる。器面は条痕文が著しく主に横方向の条痕整形である。

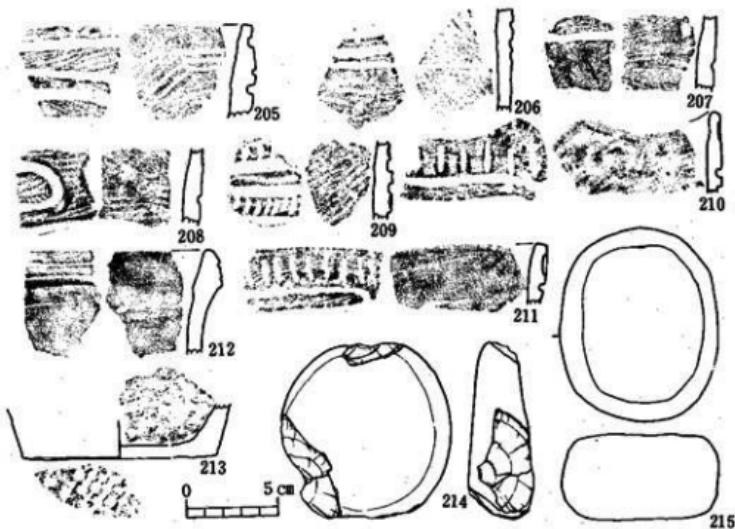
201 底部径11.6cm張りのある底部形を呈している。202 底部径11.0cm、203 底部径9.0cm、いずれも内外面ともに条痕仕上げである。204 底部径11.6cm、接地面中央部がやや上げ底様のもので、接地面には組織圧痕がみられる。

12号トレンチ

205 口縁部の器面がやや薄くなり、撫で仕上げのために面形成が不安定となっている。器面の調整は、内外面ともに条痕であり、口唇部と内面の上位だけが撫で消されている。文様は棒状のもので深く刻まれ4本以上の横走る沈線文である。206も205同様の横走する沈線文が描かれたもので、この土器片では、文様帶に撫で消しがみられる。外面は主に横方向の条痕文、内面では、斜・横方向の条痕文が著しい。207も横走する沈線文を描くもので、内外面ともにも条痕調整の後に、荒い撫で消しが行われている。この205~207の土器はA類土器的様相が強く感じられる。

208 凹線文間に貝殻腹縁による刺突文がみられる異色の土器で、内面では入念な撫で仕上げが認められ、外側では荒い撫で消しがある。209 横走する凹線文間に貝殻腹縁部を刺突したもので、208に比べて大きめの二枚貝を利用している。この2点の土器は、F類土器と同様と思われる。

210 山形の口縁部をもち、口縁部に直交する単線がほぼ垂直につけられている。内外面と



第48図 12号トレンチ出土遺物

もに条痕整形の後に、荒い撫で消しが行われている。黄褐色の土器である。211 口唇部は平坦面をなし、内面のみに撫で消しが認められる。文様帯は、著しく条痕文が残され、黒褐色の堅ろうな焼成である。この 2 点は、E 類土器に属している。

212 口縁部が外に開く形状のもので、口縁部が三角形(断面)に肥厚している。入念な撫で仕上げが行われ、口縁部に横走する沈線文を描いた後に撫でられている。

213 底部径 10.5 cm, 接地面に組織の圧痕がみられる。

214 石材は砂岩で、破砕痕や敲打痕がみられる。215 安山岩を用いた磨石で、通称「石けん石」と呼ばれている。

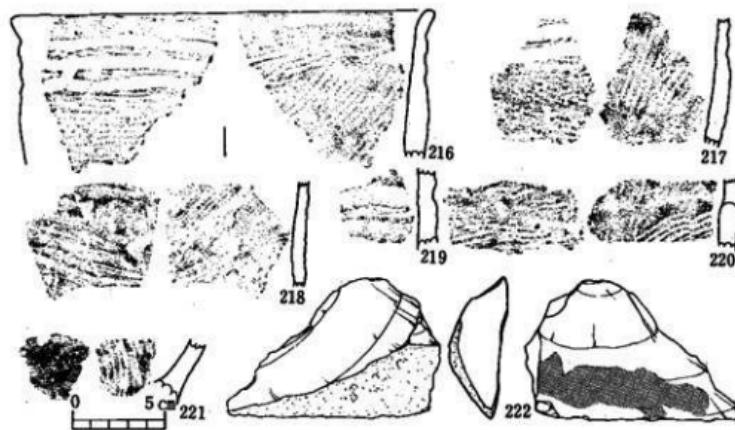
13号トレンチ

このトレンチでは、遺物の分布が希薄であり、その反面標の散布がみられた。

216 22.0 cm の復元口径をもち、口縁部がわずかに開く器形である。内外面ともに条痕文が顕著に残され、横走する浅い凹線文は棒状のもので描かれている。赤褐色で焼成は良く堅ろうである。217 も同様であり同一個体の可能性もある。

219 指頭による浅い凹線文がつけられた C 類土器で、胎土に多量の金雲母を含んでいる。

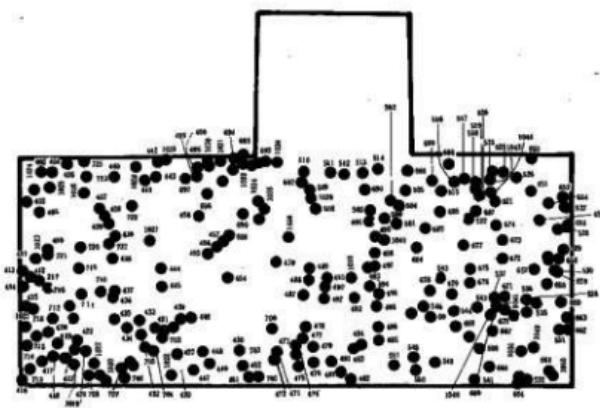
222 厚手の横長剝片で、石材は砂岩である。主要剝離面に研磨痕があり、かなり磨かれているが、その用途は不明、剝片の下端部に刃こぼれ的な剝離もみられるが、極端に利用された状況はつかめない。



第49図 18号トレンチ出土遺物

14号トレンチ

調査地域の最南部、台地の最先端に設けたトレンチで、8号トレンチとともに最も多くの出土がみられている。また、人工遺物の出土と同様に、数多くの礫（主に砂岩の小円礫で、大きもとにぎりこぶし（大）が散乱していたが規則制等は認められなかった。



第50図 14号トレンチ遺物分布状況

石器 228・224

2点出土し、いずれも黒曜石を利用している。

228は剝片を素材とし、裏面の周辺剥離は細かく小さいために、中央部に素材の剥離面が残されるが、正面では、平坦剥離が全体までおよび素材の剥離面は残されない。224でも剝片を素材としているが、素材は扁平でなくやや厚みの

ある剝片を利用している。周辺剥離は細かく小さいもので全局において、素材の剥離面は残されている。

225・226 突帯文をもち、突帯文の中に二段に刺突文をつける。突帯文は、粘土板の貼り付けであり、胴部の上位に位置すると思われる。連続する刺突文は棒状のもの（半截竹管？）でつけられる。225の器面は、内外面ともに条痕文が著しく、226の場合、内面は条痕文、外内は条痕文に重ねて株状ないしはヘラ状のもので撫でられている。いずれも、胎土に砂粒等を多く含み、焼成はやや軟弱と思われる。

227 (A) 多くの横走る凹線文(4~5mm)がつけられ、文様の中心部は長梢円形文と思われる。内外面ともに入念に撫で消されている。赤褐色で2~3mm程の小礫を含んでいる。

228 口縁部が外反する形状のもので、内外面ともに良く撫で消されている（横方向）。

229 口縁部が部分的に山形（瘤状突起）に突起した深鉢形土器で、直線的に立ち上がる器形と思われる。文様は、直線文を組み合わせた沈線文で三角形を中心構成し、沈線は浅く行われる。口唇部・口縁部では撫で仕上げとなるが、その他の部分は条痕文が著しく残される。

230 口唇部がやや内傾し、わずかに内反した口縁部をなす深鉢形土器で、製作の際の粘土板の接合等は入念さを欠いている。内面では、横・斜方向の条痕仕上げがみられ、外面では、縱方向の荒い条痕仕上げとなっている。文様は、棒状のもので浅く不規則なもので、焼成も良くななく、胎土には多くの砂粒を含んでいる。

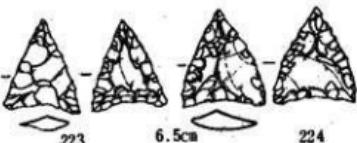
231 (G) 口唇部が平坦面をもつ無文土器で、多くの砂粒を含み、スス等も附着している。主に横方向の荒い撫で仕上げである。

232 挿文時代早期の前平式土器の底部片で、外面は斜方向の条痕仕上げとなる。文様は、貝殻腹縁による刺突文で、底部外面には、斜方向の条痕文が明瞭に残される。

233 脱部附近の破片と思われる。この破片も輪積みの良く観察できる資料で、1本の粘土紐は1.4cmくらいが残されている。内面は、条痕仕上げで接合面が消されているが、外面では荒く、そのまま残されている。外面には、多くのススの附着がみられ、胎土は多くの砂粒を含みザラザラした器面を呈している。

234 (C) 復元口径80.8cm程の深鉢形土器で、口唇部は平坦面を形成している。内面では、横・斜方向の条痕文、外面では横方向の条痕文が頗著で、文様は、指頭によっている。

235 (C) 指頭の一筆描による三角形文をもつもので、色調は灰黒色を呈している。口唇部



は平坦面をなし、器面は条痕仕上げで、横および斜方向の条痕文が残される。

286 (C) この破片の文様帶では撫で仕上げがみられる。

なお、これらの284～287の土器片は、いずれも灰黒色を呈し、胎土にも共通したものがみられ同一個体の可能性もある。

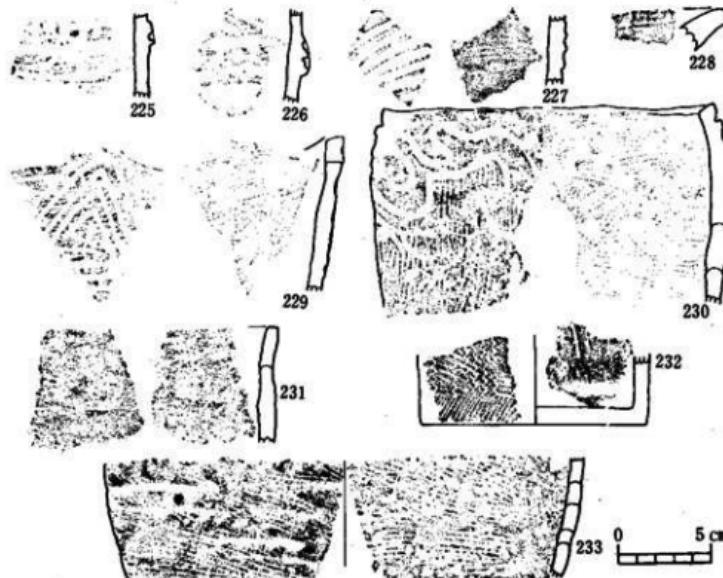
288 (C) 復元口径22.8 cm程の、口縁部がやや丸味をもつ深鉢形土器で、口唇部に貝殻刺突による連続した刻み目をついている。器面調整は、内外面ともに条痕仕上げで指頭で文様を描き、凹線文は浅くつけられる。器壁は、胴部で厚く、口縁部では薄い。胎土に多くの砂粒や金雲母が含まれている。

289 (C) 外面では主に横方向、内面では斜方向の条痕文がみられ、器壁の薄い土器である。

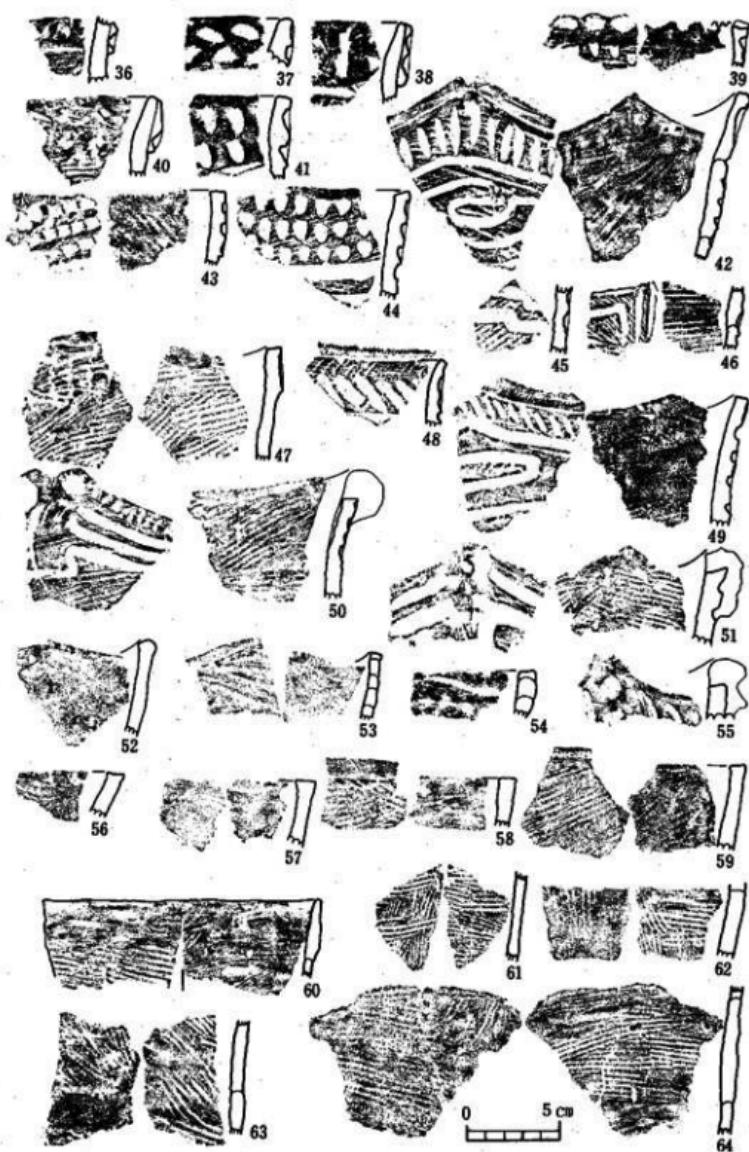
248 (C) 口縁部が山形なし、口唇部は平坦面を形成している。

248 (C) 復元口径20.4 cmの深鉢形土器で、口唇部は平坦面をもち、やや内傾し、直線的に立ち上がる器形である。内外面ともに、条痕文が顕著である。

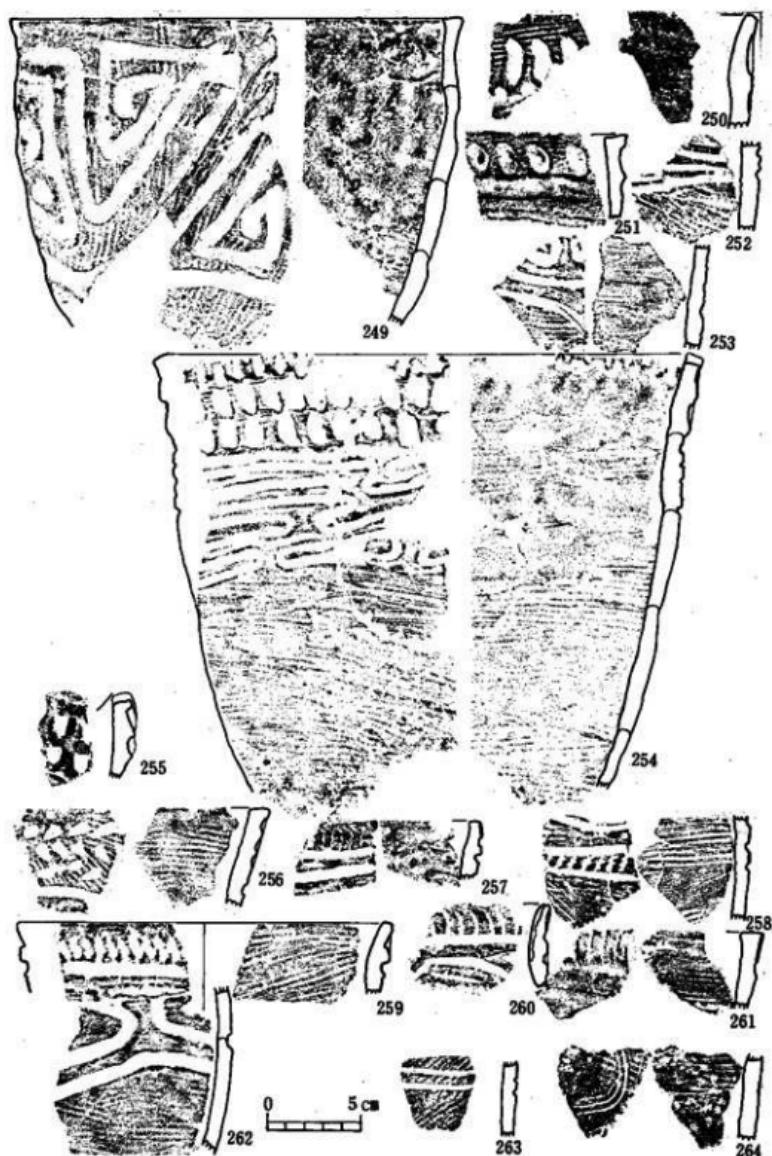
249 (C) 復元口径24.8 cmくらいの深鉢形土器で、胴部上半部より頸部にかけてやや内反し口縁部へは直線的に立ち上がる器形を呈している。口唇部は、撫で仕上げで平坦面をなし、内面は、条痕調整の後に荒く撫で消されている。外面でも、部分的に荒い撫で消しがみられるが条痕文を消すまでは残っていない。文様は、指頭で描かれ、爪痕も残されている。



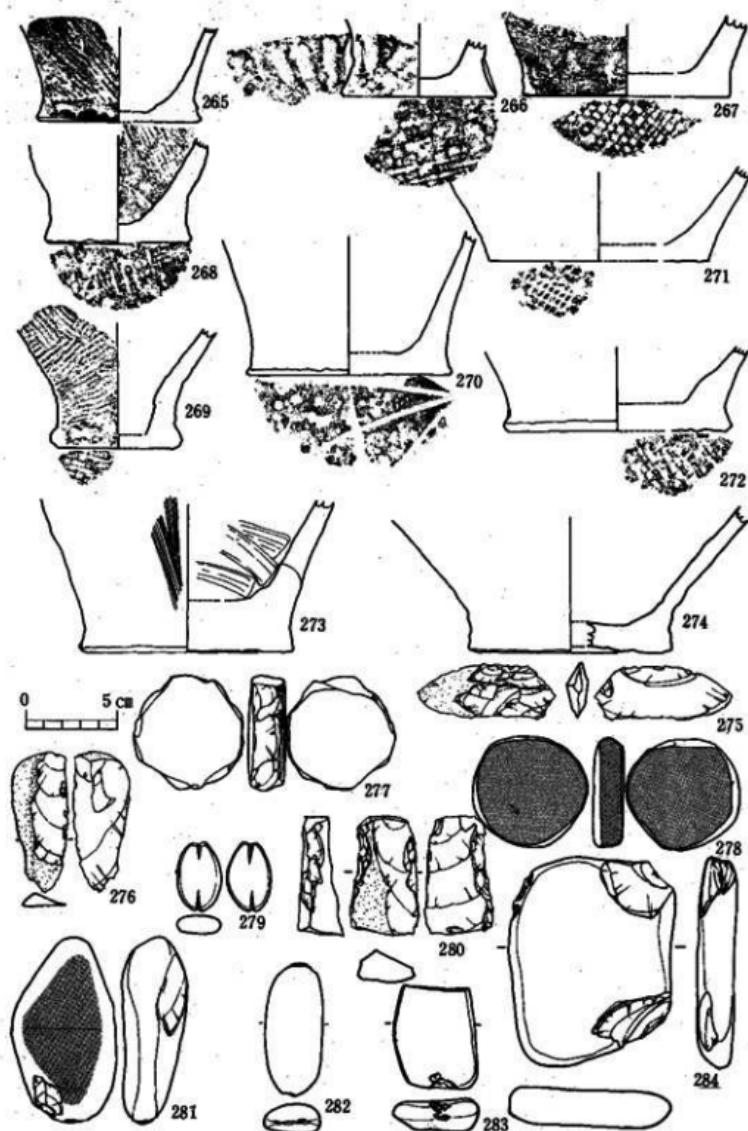
第52図 14号トレンチ出土土器・遺物



第53図 14号トレンチ出土



第54図 14号トレンチ出土土器



第55図 14号トレンチ出土

これらの、234～249の土器は、C類土器（太形凹線文土器）であり、後で紹介する290とともに、本トレンチを代表する一群である。

250・251・254これらは、B類土器に含まれる。

250（B）口縁部に指頭による凹線文がつけられるもので、肥厚した口縁部に半月形状の指頭圧痕文が爪痕と同時につけられている。内面は、横方向の入念な撫で消し、外面はアナダラ属の条痕文が明瞭に残されている。251（B）黒色で砂粒を多く含み、口縁部の文様は、指頭による凹点文で爪痕も残される。凹点文の下位には、指頭による太形凹線文がみられる。

254（B）口唇部は、棒状のもので外面方向より内面へと連続して押しつけられた刻み目をなし、口縁部の文様帯は粘土板の貼り付けにより肥厚している。その肥厚した口縁部に、指頭による凹点文が二段にわたり平行してつけられ、指頭の動きは上方より下位へとみられる。なお、凹点文には爪痕も残される。条痕文は、肥厚した口縁部ではそのまま残され、特に、口唇部附近で大きく、一見文様的景観をも見せさらに、下位では煩雜となる。また、胴部には横位の（平行）凹線文がつけられ、この文様帯では施文後に撫で消しが行われている。文様帯以下では、条痕文がそのまま残され、内面は、上位のみが撫で仕上げ、その他の部分では条痕文がそのまま残されている。この土器は、一見して立体感の感じられるものである。

255・256この2点はD類土器に含まれる。

255山形に突起した口縁部に相当する部分で、内外面ともに入念に撫で消されている。文様は、半截竹管状のもので粘土の欠き取りであり、下方より上方への動きである。256三段に刺突凹点文がつけられ、条痕文が著しい。

257・258・259・260・261、文様構成に貝殻腹縁の刺突があるもので、F類土器である。

257口唇部だけに条痕文が残され、その他の面では撫で消されている。口縁部に貝殻刺突文がつけられる。258内外面ともに条痕文の顯著にみられるもので、貝殻刺突文は沈線文間に施されている。259口縁部が外反する形状を示し、貝殻刺突文は口縁部に深く刻み込まれている。261は、口唇部が平坦面をなし、内外面ともに入念に撫で消しが行われる。

262 凹線文を主体としたもので、荒い撫で仕上げとなる。264は、細い沈線文で平行した曲線を描いている。

底部 265・266・267・268・269・270・271・272・273・274

265底部径9.0cm、接地面は平坦で、器壁は薄く、外面は斜方向の条痕が著しく、内面も同様である。266底部径8.4cm、接地面は組織圧痕文であるが剥脱が激しい。円盤貼り付けで、内面は、円盤に対して縱方向の条痕整形がみられ、外面は、棒状のものにより縱方向の凹線文がつけられる。267底部径11.2cm、接地面は組織圧痕文である。内面は条痕仕上げ、外面は、貝ないしは棒状のもので撫でたような状態である。268底部径8.1cm、269底部径7.1cmで張り出した形状をなしている。内面は入念な撫で消しが行われ、外面は、条痕文が著しく残される。270底部径11.2cm、272底部径12.8cm、273底部径11.5cm、274底部径10.9cmで剥離が激しく、胎土には、多くの砂粒を含みザザラしている。

剝片石器 275・276・280

275は、横剥ぎの剝片で、一部に磨製石斧にみられる研磨痕がみられ、二次的に再利用したものと思われる。断面は菱形でレンズ状を呈している。276も砂岩を利用し、主に右側縁部に使用痕とみられる刃溝れが残されている。280も砂岩である。断面の厚いもので、他の剝片とは趣を異にしている。したがって、打製石斧・ハンマーストーン的機能も考えられる。

磨製石製加工品 277・278

いずれも砂岩を石材としている。277は、扁平で板状の素材に周辺加工を加え円形につくり出し、その後、両面と周辺剥離の上を研磨している。268も、277と同様の過程を経ているが周辺（全周）は、剥離痕が全く残らないまでに研磨されている。

石錐 279

砂岩の小円錐を素材とし、剥離（打ち欠き）は、正面の上端部のみに行われ、その他の三ヶ所は、溝状に研磨されている。なお、正面の剥離面も、その後、溝状に研磨されている。

ハンマーストーン 281・282・288・284

いずれも石材に砂岩を用いている。282に蔽打痕が残されるだけで、他の三点には破裂痕がみられる。281のスクリントーンの部分は研磨痕のみられる部分である。研磨の方向は、主に横方向に観察でき、破裂痕は、研磨部分を切り取っている。なお、下端部には蔽打痕も一部にみられ、複数の機能をもった石器と思われる。研磨部分は、正面のみである。上端と下端部に蔽打痕が残される。278は、硬質の砂岩を用いたもので、下端部に破裂痕と蔽打痕が残されている。284、全周に蔽打痕がみられ、三ヶ所の各コーナー部分には、破裂痕が残される。破裂痕は、かなり大きく、相当の力の加ったことを示している。

円盤状石器 285

石材は砂岩で、断面はかなり厚くなる。剥離は、周辺より交互に内・外に行っている。

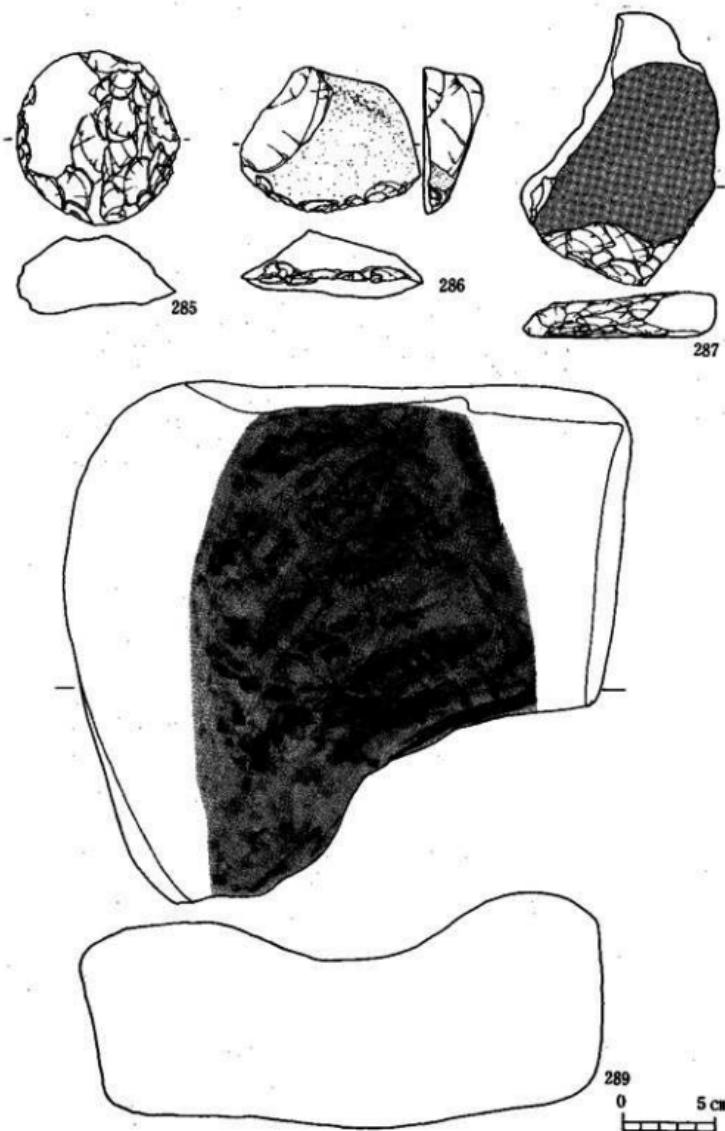
286・287は、打製石斧的用途をもつ石器と思われる。286、石材は砂岩で、剝出した剝片の下端部に、刃溝しを行ない、その後、蔽打し、剥離面はつぶれている。287も砂岩を用い、石器は石皿と転用したものである。

石皿 289

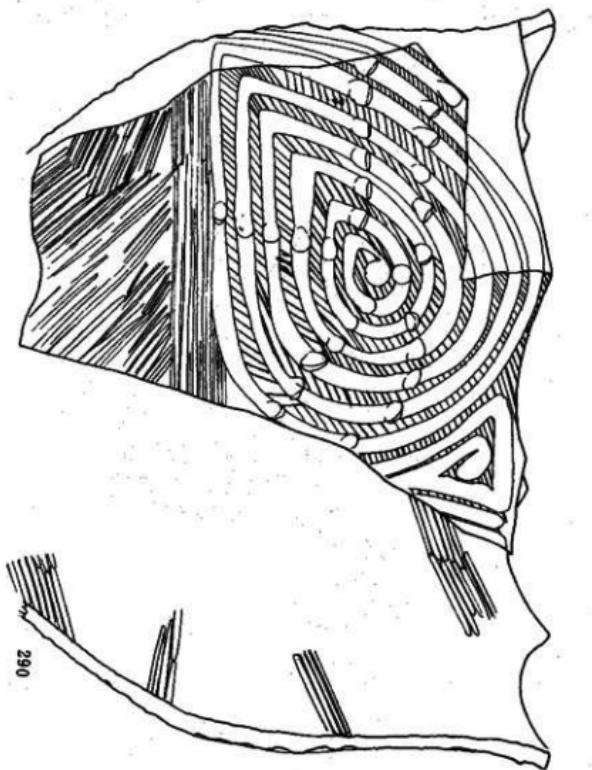
砂岩を石材とし、石皿面は、かなり窪んでいる。使用面の周囲は蔽打痕が残される。

290 C類土器

復元口径41.0cmのC類土器の深鉢形土器である。大・小の山形をもつ口縁部で、口唇部は平坦面を形成している。文様は、指頭による渦巻文と三角形文の組み合わせである。器面調整は内外面ともに貝殻縁による条痕仕上げであり、横および斜方向の調整がみられる。文様帶の条痕文は、そのまま残され意図的な感がある。器形は、胴膨みで、器高はあまり高くはない。



第56図 14号トレンチ出土遺物



第57図 14号トレンチ



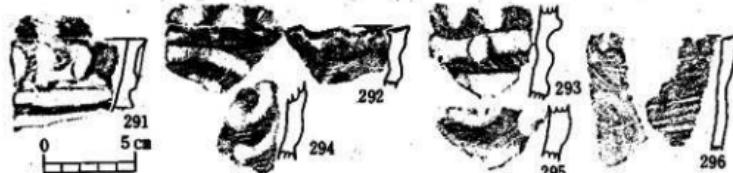
第58図 14号トレンチ出土土器

15号トレンチ

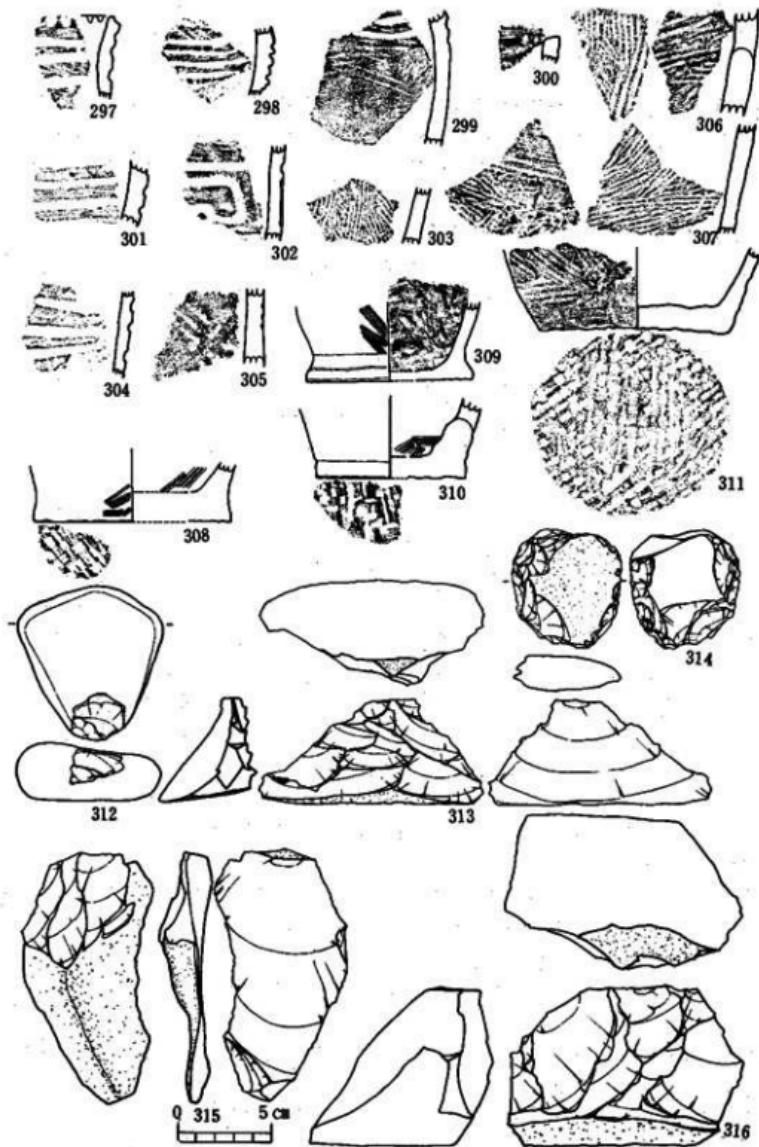
291 (B) 平坦な口唇部をもち、口縁部は、指頭による半月形状の圧痕文がつけられている。器面調整は、条痕調整で、施文後に一部に撫で消しが認められ、内面は条痕文がそのまま残される。292 (C) 口唇部に指頭の押圧による連続刻み目がみられ、やや内傾した形状をなしている。298・294・295も同様で、指頭の浅い凹線文がつけられ、円文・直線文がつけられる。296 (G) やや内傾した平坦面をなす口唇部に、貝殻腹縁を刺突したもので、内面の上位だけに撫で消しが行われる。277 A類土器と思われるが、文様帯は条痕仕上げのままである。内面は、簡単な撫で仕上げであり、口唇部外面だけに半截竹管状のもので連続した刻み目が施されている。298・299・301・302も同類土器で、いずれも棒状のもので主として横走する凹線文が描かれている。299・301・302・304では、文様帯は撫で消され、特に、302は入念な撫で消しがみられる。309 底部径9.0cm、円盤の貼り付けで、外側は条痕仕上げ、内面は撫で仕上げである。308 底部径10.7cmで、内外面ともに荒い条痕仕上げ、310 底部径8.0cm、内外面ともに荒い条痕仕上げで、内面の整形も荒く粘土板の接合部がよく観察できる。311 底部径10.2cm、外側は、横斜方向の条痕仕上げで、内面は、指頭による接合の痕がよくみられる。接地面には、組織圧痕文がつけられている。

312 石材は砂岩で自然縞を組材とし、素材の尖った部分を目的部としたハンマーストーンと思われる。しかし、長時間使用したとは思われず、破裂痕の生じた後は利用されていない。818 横長剝片の創出のための石核で、砂岩の自然縞を素材としている。石核のフルーティング面には、8枚以上の剥片剥離痕が残されるが、それによると、作り出された剝片は概して小形のものと思われる。また、フィンジクリッチャーとなっていることより、石核に用いた縞は、球形の形状をなしていたと思われる。

814 円盤状石器で、石材は砂岩を用いている。素材は、円盤を分割した剝片で、断面が半月形状のものを用い、剝片の全周に用面方向からの調整剝離で整形している。使用目的は、打製石斧的なものと思われる。815は、継長剝片で、石材は砂岩である。角縞状の縞面をもつ石核より剥離されたものである。使用痕等は、認められない。816、812と同様の石材に砂岩を用いた石核で、不定形な剝片が取り出されている。打面調整は、行われず平坦打面となっている。この石核の素材は、石皿を転用した可能性が強く、風化しているが、打面と下面は、磨耗痕らしきものが残されている。



第59図 15号トレンチ出土遺物



第60図 15号トレンチ出土遺物

16号トレンチ

817 (A) 4mmくらいの棒状のもので平行した沈線を巡らすもので、口唇部はやや丸みを持つ深鉢形の土器で、818と同様A類土器に含まれると思われる。817では横と斜め方向の条痕文が著しく残され、818では、内外面ともに撫で消しが行なわれ、特に外面は入念である。

15の文様は長椭円形と思われる。819は、小形の深鉢形土器で、口唇部に棒状のもので小さな押点がみられる。内外面ともに入念な撫で消しが行なわれ4本の平行沈線文が巡らされている。820・821・822・824、これらはF類の貝殻腹縁による連続刺突文がつけられるものである。820は、口唇部が丸みを持つ深鉢形の土器で口唇部に最大径がある器形を呈している。条痕整形の後、内面上部と外面文様は撫で仕上げがとられ、口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文、不定形な沈線文がみられる。821は、口唇部が平坦面をなし、822ではやや中央部がへこんだ状態である。822の文様帯では条痕文がそのまま残されている。824は、口縁部が山形をなし、山形部は4ヶ所と思われる。口縁部外面には、棒状工具により連続した刻み目がつけられ、内外面ともに撫で仕上げが行なわれる。文様は5mm程の棒状のもので描かれ、山形部を中心とした文様構成と思われ、二本の平行した山形沈線文と平行し渦巻文との組み合わせである。825 (D) 口縁部外面は連続した刻み目で、凹点文のつけられる文様帯は粘土の貼り付けが行なわれ、肥厚し内外面ともに入念な撫で消しが行なわれている。826 (E) 口縁部が山形をなす深鉢形土器で、外反しながら直線的に立ち上がる器形をなしている。口縁部に対し直角になる短線を連続して描き、その下位に平行する8本の沈線文がつけられる。器面の外面内面は撫で消しが行なわれる。880も同様の器形をなすもので、連続する単線だけの文様であり、また、外面には条痕文がそのまま残され、内面では部分的に撫で消しがみられる。25は、A類土器と同様の手法がみられ、また、328・332・338・328等には長椭円文がみられる。338にみられる屈曲しながら平行して走る四線文は、文様的に個性をもったものと思われ分離されるべきと思われるが、出土器が少ないので明確ではない。887は、平坦面をなす口唇部をなし、櫛描き状の平行沈線文がみられる。340は、山形の口縁部をもち、内外面ともに入念な撫で仕上げがみられ、文様は、沈線文様が不定形に描かれ沈線文間に棒状の施文具による凹点文がつけられている。244は口唇部に連続した浅い刻み目がつけられ、条痕文調整の後に撫で消しが行なわれ、特に内面では横方向の撫で消しがみられる。文様は浅く細い沈線文で、逆し字状の組み合わせ文である。341は、深鉢形土器の胴部下位の破片であり、内面では主に横方向の二枚貝による条痕仕上げ、外面は軽い撫で仕上げがみられる。345も胴部破片であるが、この場合は内外面ともに条痕仕上げで、外面では斜方向の不規則な条痕文、内面は斜め方向の条痕仕上げがみられる。

343・346・347・348 ((G)) 無文土器で、口唇部は343・346で平坦面、347ではやや丸味をもち、348では刻み目がみられる。

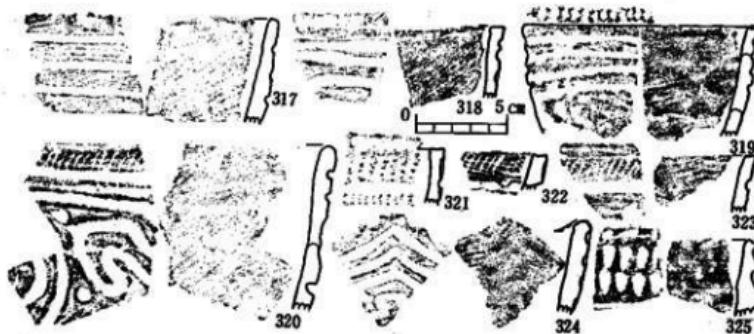
350、底部径9.0cm、353、底部径9.2cmで内外面ともに条痕調整で円盤部と胴部の貼り付け部分は指頭による貼り付け調整がみられる。352、底部径11.0cmで、円盤部はかなり張り出して

いる。外面は二枚貝による条痕仕上げ、内面では接合部に指頭調整痕がみられる。353 底部径 9.0cm、内外面ともに撫で仕上げである。354 底部径 10.4 cm、内外面ともに荒い条痕仕上げである。

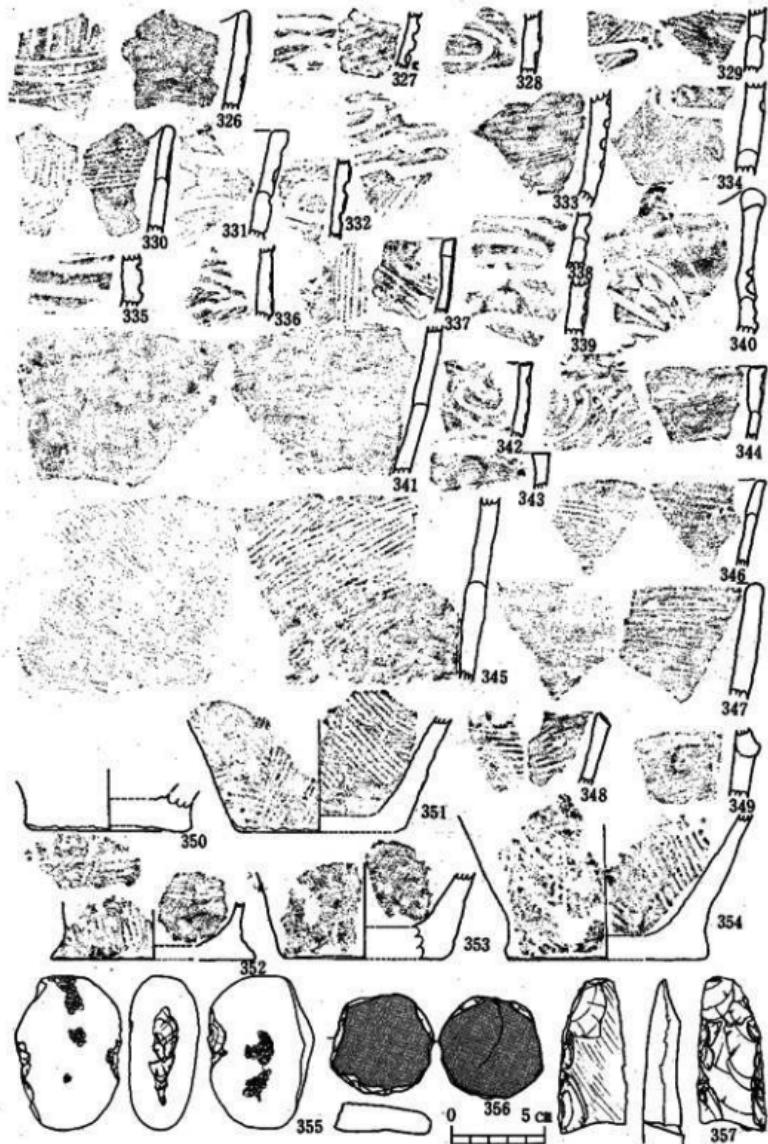
355、叩石で、敲打痕がよく残されている。また、破裂痕もあり、ハンマーストーン的用途もあったと考えられる。石材は、粒子の荒い砂岩である。

356、磨製の石製加工品で、石材は砂岩・板状の扁平なものを素材とし、全周を円形にトリミングし、その後両面を研磨し、仕上げている。

357、刃部の失われた石斧で、正面は研磨仕上げ、裏面は、素材の剝離面と調整剝離面がそのまま残されている。



第61図 16号トレンチ出土遺物



第62図 16号トレンチ出土遺物

第5章まとめにかえて

十文字遺跡は、縄文時代中期後半より縄文時代後期前半へかけての遺物を中心に営なされた遺跡であった。大量の土器片・石器等が出土し、遺跡も広範囲であり、集落を形成していたことも充分にうかがえる内容である。

7号トレンチの調査では、縄文時代早期の貝殻文土器が、石器や石皿と共に出土している。この調査地は、畠地の開墾の時、すでに上位の層（遺物包含層）が削りとられ、その結果、下位の縄文時代早期の文化層だけが残されていた。同時に出土した石皿2点については、多分に上位の文化層の所産と考えている。なお、このトレンチより多く出土した水晶を石材とした、石器やフレイク、チップ類は、本県の縄文時代では初めてのことであり興味深い内容である。フレイクの中には、形態的に細石刃に類似したものもあり、調査中も入念に検討を行ったが、包含層の層位的判断・伴伴遺物等の関係を判断し、縄文時代早期の遺物として捉えている。

出土した遺物は、各トレンチ別に記載し、土器については、A～G類土器の7つに分類している。その内、G類土器は無文土器で、他のA～F類土器の粗製土器として考えねばならないが、いずれに帰属すべきか全く不明である。したがって、一括した取りあつかいである。そこで、A～F類土器について考え、本遺跡の位置づけを、宮之迫遺跡を比較の対象とし、他の関連した遺跡も加えて行ないたい。

A類土器と、最も近いと思われるものに宮之迫J類土器がある。宮之迫J類土器は「……文様が三角形文・菱形文・円文等の規則的な傾向を示しているもので、深鉢形を示すものである。また、器面は貝殻状の施文具で条痕整形を行っているが、特に、文様部分はナデ状のていねいな仕上げを行う傾向も認められる。」⁽⁴³⁾とし、本遺跡の5・7・182に現われる特徴と同様の要素を示すこととなる。このA類土器の特長の一つである、文様が規則性をもつ（例えば、三角形文等の組み合せ）こと、文様帶の条痕文を擦り消す手法は、本県の在来の土器文化にはみることのできない。そこで、中尾田遺跡出土の阿高式土器（中尾田第I類土器・第II類土器）⁽⁴⁴⁾に、焦点を求めるところとする。中尾田遺跡では第I類土器を阿高式土器・第II類を出水式土器とし器面調整は、ていねいなナデ・ヘラケツリ等が行われていると報告される。中尾田第II類は、純粹の阿高式土器で、指頭や棒状のもので文様が描かれ、文様帶は、胸部上半より口縁部へかけて集中して來ている傾向が認められる。文様も単位文様の組み合わせで、規則性を持つ傾向が強く感じられる。また、出水式土器とされる第II類土器もあり、中尾田遺跡が、全般的に南福寺式土器へより近づいていることが読み取られる。したがって、A類土器にみられる特徴（文様構成・文様帶への擦り消し手法等）が阿高式土器等の外来文化にその起源・要素を求めざるを得ない状況が出てくる。さらに、このA類土器は、田中良之の阿高II式土器とも直接間接につながるものと考えている。⁽⁴⁵⁾

本遺跡のB類土器は、河口貞徳の岩崎下層式土器で、10・12・254が最も良く特長を現わしている。この岩崎下層式土器は、在地化した土器文化であり、特に、大隅半島地域に分布する

をもっている。B類土器は、口縁部の肥厚した凹線文（指頭等）帶では、条痕文がそのまま残されているが、胴部上半の凹線文帶では、擦で消しが行われている。この擦で消しの手法だけで考慮すると、B類土器も、A類土器や中尾田第Ⅰ類土器と近い関係をみることができる。しかし、岩崎遺跡や、宮之迫B類土器では、この擦で消しの行われる手法は少なく、逆に貝殻条痕文がそのまま残される場合が多くなっている。したがって、このB類土器（岩崎下層式土器）は、文様構成・施文方法・器形等を検討し帰属しなければならなくなる。まず、最も特長的な文様である。口縁部の凹線文（指頭による半月形状の凹線文）は、やはり、その起源は阿高式土器に求められる。加えて、D類土器としてとりあつかった18・108・825等の口縁部に連続した凹点文（指頭・棒状のもの）土器も本文中に記したように、本質的にB類土器の同一様式の範囲に含まれるものである。これらの、口縁部に連続して凹点文（凹線文）をつけた土器は、近くでは、中尾田第Ⅱ類土器にみられ、また、田中良之の阿高Ⅱ式土器・阿高Ⅲ式土器や坂の下遺跡出土の、第1類・第2類土器に盛行しているもので、それらの影響を多分に受けたものと思われる。108は、B類土器とD類土器、さらに後述するC類土器の全ての特長を備えた土器であるが、口縁部の指頭による凹点文は、坂の下第1類土器に見られるものと同一のものである。さらに、口縁部文様帯が、意図的に肥厚していることは、本来の阿高式土器ではみられない特長であり、阿高式土器の次に位置づけられる南福寺式土器の影響下に出現する特徴である。

次に器形について考えてみる。

A類・B類・D類土器の完形品は、宮之迫遺跡で知られている。宮之迫J類土器（本遺跡A類土器）は、口唇部が刻み目（棒状のものを連続して押印）をなし、平底の底部（組織圧痕文が多くみられ、円盤の貼り付け）で、大きく外へ開きつつ胴部が膨み、胴部上半に最大径が現われ、さらに、口縁部がやや縮り、その後、口縁端部で外反する器形である。さらに、この基本的な器形に、7~8ヶ所の山形突起がつけられた口縁部をもつ器形も知られている。この種の器形は、中尾田第Ⅱ類土器の特に、胴部の凹線文が消滅し、口縁部の肥厚部分だけに施文が限られ、指頭による凹点文だけがつけられる土器に見られている。また、田中良之の阿高Ⅱ式土器にも多く見ることができる。また、B類土器の器形も、本遺跡の場合は、12・254にみられるごとく、最大径が口縁部に位置する深鉢形土器であるが、宮之迫遺跡では、A類土器と同様胴部が膨みをもつ平縁口縁の器形も多数出土している。したがって、A類・B類土器とともに①最大径が口縁部にある深鉢形土器②最大径が胴部にある深鉢形土器を備えていることが理解できる。

E類土器は、口縁部に棒状のものにより垂直～斜方向の短線を施したもので、宮之迫D類土器と共通している。口縁部にこのような短線をもつ土器としては、坂の下第4類土器・出水式土器・西和田貝塚等で知られている。これらの中で、出水式土器の口縁部の短線は、短線が浅くつけられること、短線に規則性が見い出せず、不規則であり退化している様相もあり、直接本遺跡B類土器とは結びつけがたい。したがって、坂の下第4類土器等の影響はあったにし

ろB類土器やD類土器の中にすでに崩芽する要因があったと思われ、他の土器文化との交流は行ないつつも、独自に展開したものと考えられる。

次に、C類土器について考えてみる。

C類土器=宮之迫A類土器である。主に、指頭による太形凹線文で文様が構成され、施文途中で、再び力を加えアクセントとなりより深く指痕痕が刻み込まれることとなる。また、全般に条痕仕上げで、著しく条痕文が残される土器もある。口縁部の形状は、平縁・山形の二種類があり、器形も、口縁部に最大径のくる深鉢形と、A類土器に類似したような胴部が膨みそこに最大径のくるものがある。指頭を使って文様を描く点では、中尾田第Ⅰ類土器や阿高式土器と同一であるが、最大の相違は、中尾田第Ⅱ類土器・阿高式土器で行われる擦でやヘラケズリ等の整形が全く見られず、条痕文が著しく残されることである。また、文様構成も大規模であり、口唇部も鋭い平坦面であり、多くの相違がみられる。したがって、指頭で文様を描く点では阿高式的土器であり、条痕文が著しい点では在地的土器とも言える。

F類土器は、宮之迫L類土器であり、綫式土器である。しかし、本遺跡での出土量は少数である。

以上のように考えた時、A類・B類・D類土器が、阿高式土器や坂の下第1・第2・第4類土器等に大きく影響を受けたことと思われる。これらの土器類の前段階に中尾田第Ⅱ類土器・C類土器が、最も古く位置づけられる要素があると言える。中尾田遺跡では、阿高式土器文化が純粋な姿そのままで伝播し、大隅半島一帯では、阿高式土器文化の影響を強く受けたC類土器が展開していったと考えられる。大隅半島では、その後、隨時入ってくる他土器文化の影響を呼吸しつつ、岩崎下層式土器等その典型とする貝殻条痕文土器を生み出していったものと思われる。したがって、本遺跡もまさに、このような段階に位置づけることができる。

本遺跡で採集された石器は、石鎌・石斧・石皿・磨石・ハンマーストーン・剝片石器・磨製の石製加工品、さらに石包丁状石器である。このような石器の組み合わせは、近年解明されつつある本県の縄文時代中期より縄文時代後期へかけての石器組成の一一般的な傾向を示していると言える。特に、注目されるのは、この石器の組み合わせは、それまでの内容と異なり、大きな違いが認められ、石器に依存した生産様式に変化が生じたことがうかがえる。この変化は石鎌の減少、石皿・磨石の急増という具体的な形で現われ、また、それは石鎌を中心とした狩猟依存主義からの脱脚が始まり、石皿・磨石等の加工品・調理品を媒介とした植物質食料採集活動への移行としてもとらえられるものである。

これまでに知られている同時代の遺跡を見ると、石鎌の出土数は、本遺跡で4点、宮之迫遺跡で0点、浅川牧遺跡⁽¹⁰⁾0点、草野貝塚⁽¹⁰⁾0点と、本県を代表する集落遺跡でありながら極めて少ないことが理解される。反面、これらの遺跡で共通し、かつ大量に保有した石器が石皿・磨石等であり、宮之迫遺跡では、石皿30点、磨石78点、叩石にいたっては100点を越す内容である。また、最も多く出土した浅川牧遺跡では、最大径が1mを越す石皿や、棒状磨石等も出土している。本遺跡でも、石皿 点、磨石 点、叩石 点を出土し、遺跡全体を復元すると相当数の

これらの石器を保有していたと推定できる。

(811) 剝片石器は、石材に砂岩（硬質砂岩）を用い、縦長剥片と横長剥片を素材とし、簡単な二次加工を施したものである。剥片の生産には、連續した剥離技術のあったことが知られ、石核も用意されている。特に、石皿を石核に転用している例（816）が注目され、石皿の使用面（石皿面）を打面とし、平坦打面で石核への打面調整は、特に認められない。また、自然縫を用いた石核（818）では、打面に縫面を残し、この場合も、打面調整は行われない。多く出土している、破裂痕等をもったハンマーストーンが、剥離段階で用いられたことは充分に推定できる。この剥片石器の中で、特に、興味深いものに横長剥片を素材とした222の石器がある。この石器は、主要剥離面の中央部より先端部へかけての一部に磨耗痕が見られ、先端部は、刃部として使用し、一部に剥離痕があるが、特に激しいものではない。磨耗痕は、刃部に対し直角方向が主と観察でき、意識的な研磨が、使用後の研磨かは定かでない。また、これと同様の石器が宮之迫遺跡でも1点出土しており、その形状・磨耗痕の方向とも同一であるが、石器の役割等は全く不明である。

次に、磨製の石製加工品（278等）は、本県でその出土例がよく知られていないもので、本例が初見かと思われる。形状は、通常メソコと呼ばれる土製加工品と同一で、石材は砂岩で、扁平で板状のものを素材とし、円形状に周囲をトリミングし、その後、平坦面に研磨を行ないつくりあげている。おおよそ、8つのタイプがみられ、片面のみに研磨を行ったもの（178）、両面の平坦面に研磨を施すもの（277）、さらに、両面の平坦面とトリミング後の剥離面にも研磨が行われるもの（278）である。

(811) 石皿で注目されるのは、扁平で板状の石皿が多く存在することである。石皿の素材として、扁平で板状のものを選び、石皿面が大きく窪むことはなく、石皿面が平坦面をなしている。この種の石皿は、宮之迫遺跡や浅川牧遺跡でもみられ、特に、浅川牧遺跡では、棒状の磨石とセットで発見されている。

石包丁状石器は、宮之迫遺跡で注目した石器であり、扁平な板状の砂岩を素材とし、素材の両面を入念に研磨し、5mmくらいの厚さに磨きあげ、刃部の両面は、さらに入念に研磨を行ない、断面形が「U」字「V」字状につくり出している。この石器は、昭和28年の河口貞徳・河野治雄の調査した草野貝塚で3点が発見されている。その後、草野貝塚は2回の発掘調査が行なわれ10点程が出土しているとのことである。また、川上貝塚・田布施大貝塚・大波遺跡でも出土が知られ、宮之迫遺跡で7点（内打製2点）、柳井谷遺跡1点、本遺跡で8点が現在までの出土数である。この種の石器について、高木正文は、「収穫用石器」とし、縄文時代後期・晩期の畑作作物の収穫具（籠挽具・穂刈り具）の可能性が高いと考えて、興味深い考察と言える。

これまで、本遺跡について出土遺物を中心に考えてみたが、土器の位置づけより、縄文時代中期末より後期初頭の可能性が高いことが言えそうである。西九州方面からの技術の導入があり、それらを受け入れ、独自の土器文化を展開していった時期でもあった。独自の文化

を開いていった背景は、例えば、中尾田遺跡の第Ⅱ類土器（阿高式土器）では、石器が68本
伴っていることより、狩猟に重点が置かれていた食料経済が考えられるが、在地化していくC
類土器等以後は、急増していく石皿、磨石等を中心とした生産活動に求められそうである。

- 註1 長野真一・井ノ上秀文「宮之迫遺跡」末吉町教育委員会(1981)
- 註2 " 宮之迫の報告文中より
- 註3 新東晃一・井ノ上秀文他「中尾田遺跡」鹿児島県教育委員会(1981)
- 註4 田中良之「中期阿高式系土器の研究」古文化談叢第6集(1979.6)
- 註5 河口貞徳「南九州における縄文文化の研究」鹿児島県考古学会紀要 第8号
- 註6 河口・前川威洋・田中等の先学も同様に位置づけしている。
- 註7 森脽一朗「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館(1975)
- 註8 板本嘉弘「西和田貝塚」
- 註9 浅川牧遺跡は、種子島の西之表市現和にあり、昭和55年の冬に畠地整備事業に伴い、発掘調査を行ない、現在、整理途上である。
- 註10 河口・河野治雄により発掘調査が行われ、その後、昭和56・57年に鹿児島市教委により発掘調査が行われ、指宿式・松山式・市来式・草野式土器が多數出土している。また、石包丁状石器も出土し、他の遺物とともに注目される。
- 註11 宮之迫遺跡では、总数70点の石皿のうち、そのほとんどが板状の石皿であった。また、浅川牧遺跡では、板状の石皿で径が1mを越すものもあり、棒状の磨石とセット関係にあると思われる。このような傾向は、縄文時代晩期Ⅱ式に編年される岩戸遺跡でも認められ、板状の石皿と棒状の磨石が同時発見されている。
- 註12 剝片石器は、宮之迫遺跡でも大量に発見されている。宮之迫遺跡では、横長剥片が縦長剥片よりも優し、使用痕も横長剥片に多く残されている。さらに、宮之迫遺跡では縦長剥片の調整打面をもつ石核もみられ、横長剥片の石核は、本遺跡同様石皿を再利用したものが用いられている。
- 註13 高木正文「九州縄文時代の収穫用石器」鏡山猛先生古稀記念古文化論文集刊行会
- 註14 河口貞徳「草野貝塚発掘調査報告」鹿児島県考古学会紀要1号 1962報文では「磨製の薄い板状の石器は注意すべきもので………」としている。
- 註15 田中良之の阿高Ⅱ式、阿高Ⅲ式土器等の口縁部につけられる、指頭やヘラ、木の実等による押点文にその起源がもとめられると考える。



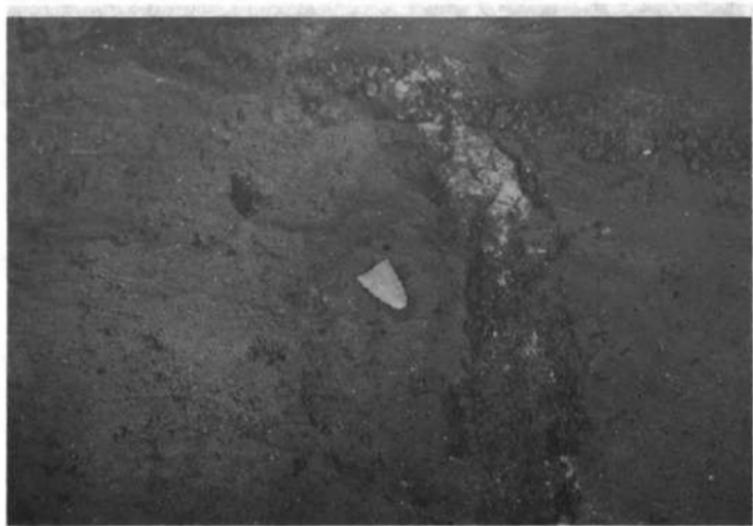
1. 倉園B遺跡遠景



2. 第1トレンチ集石



1. 第1トレンチ石皿出土状態



2. 第14トレンチ磨製石錠出土状態

図版 3

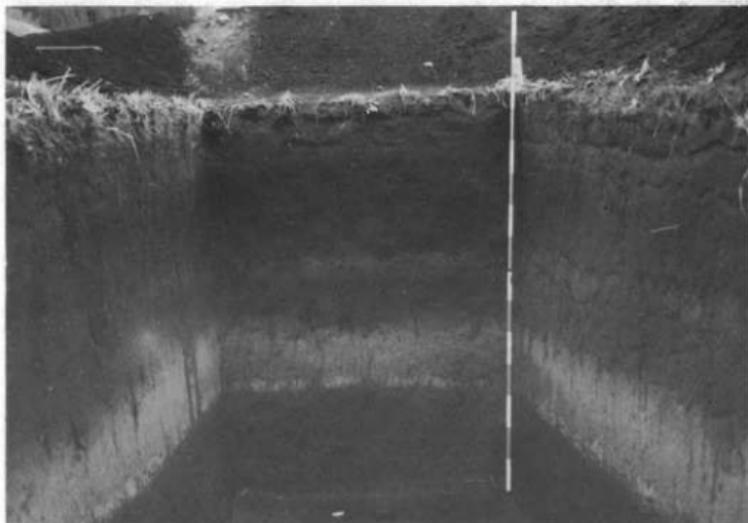


1. 第11トレンチ断面

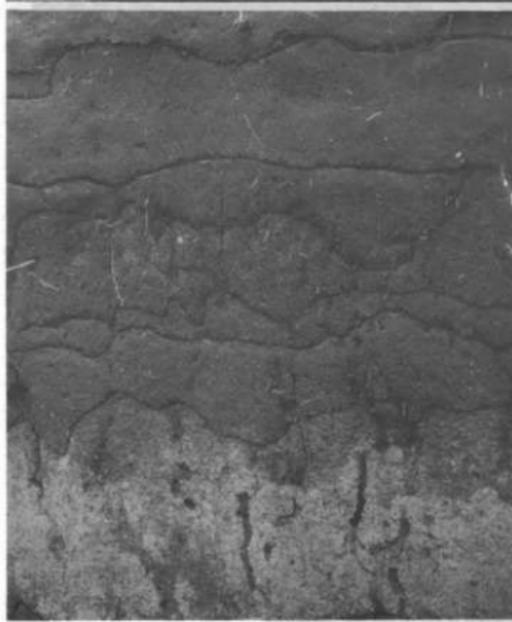


2. 第17・20トレンチ
調査風景

図版 4



1. 第13トレンチ断面

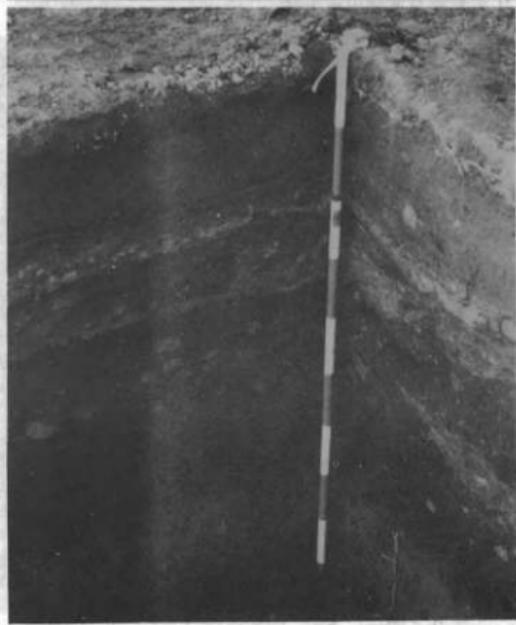


2. 同 上

図版 5

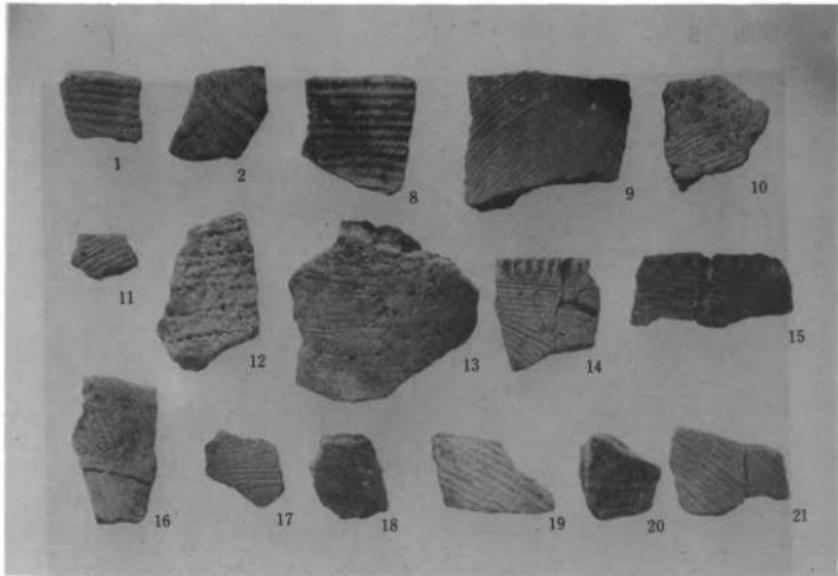


1. 第19トレンチ断面

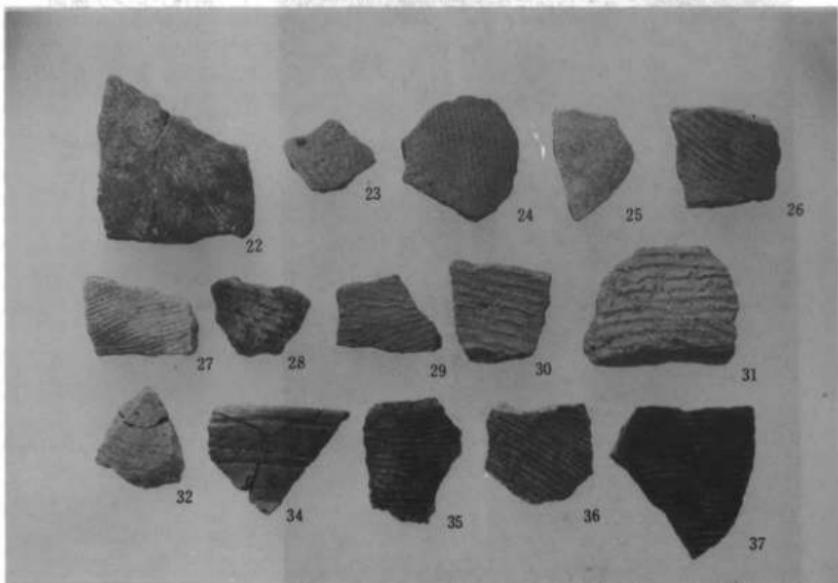


2. 同 上

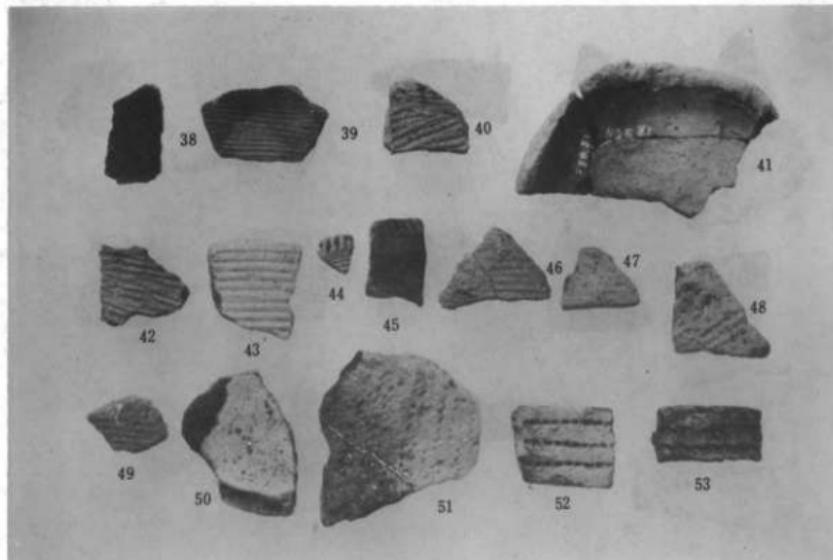
図版 6



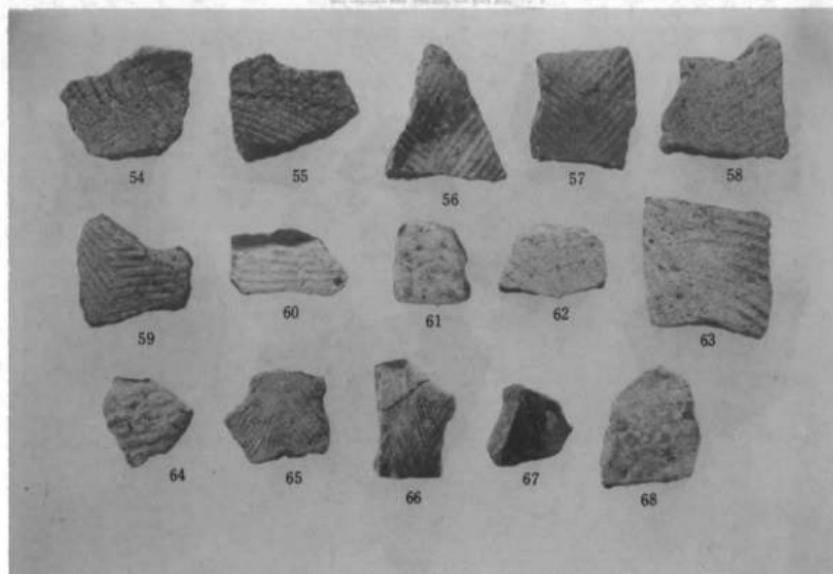
1. 倉園B遺跡出土土器



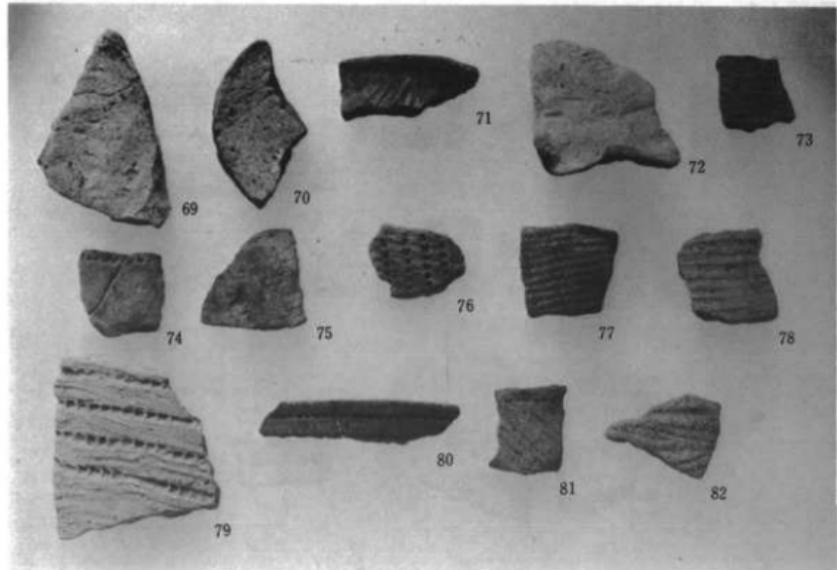
2. 同 上



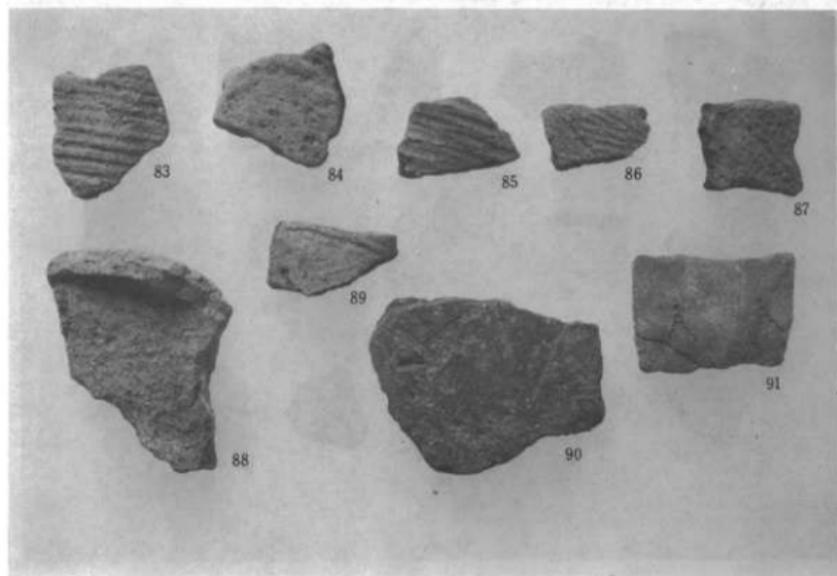
1. 倉園B遺跡出土土器



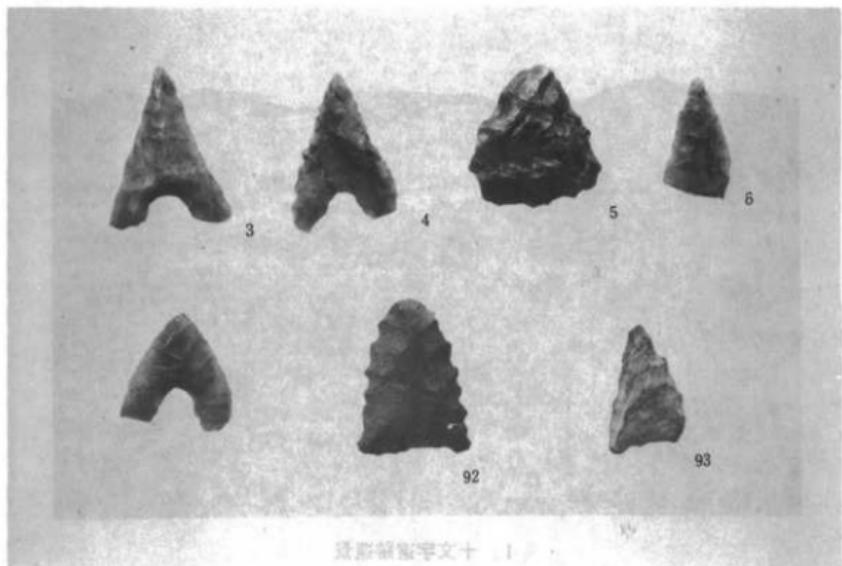
2. 同 上



1. 倉園B遺跡出土土器

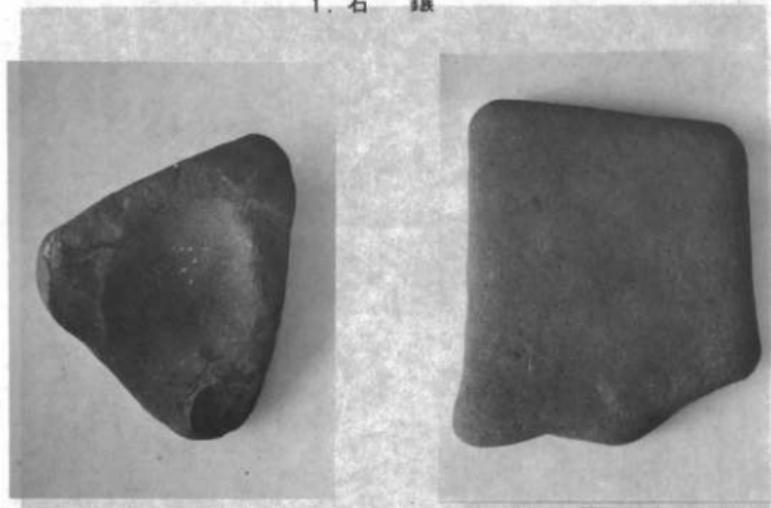


2. 同上



透影顕微写真

1. 石 錙



2. 第1トレンチ出土の石皿

石皿出土

3. 第5トレンチ出土の石皿



1. 十文字遺跡遠景



2. 土器出土状況



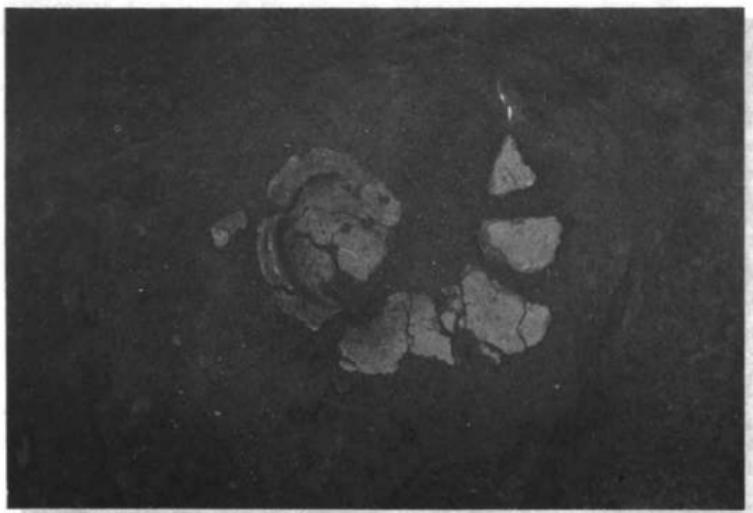
1. 土器出土状態



2. 石錘出土状態



1. 遺物出土状況



2. 遺物出土状態

図版 13

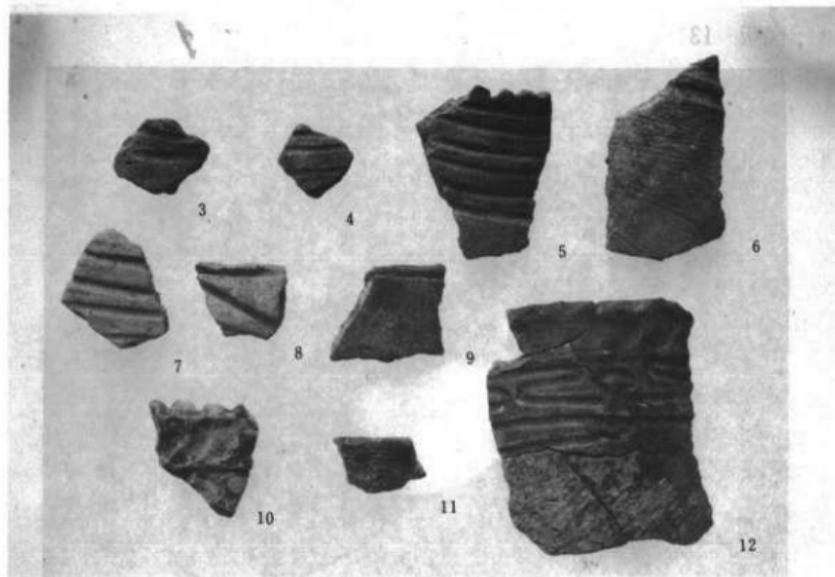


器土 1. 石皿出土状態

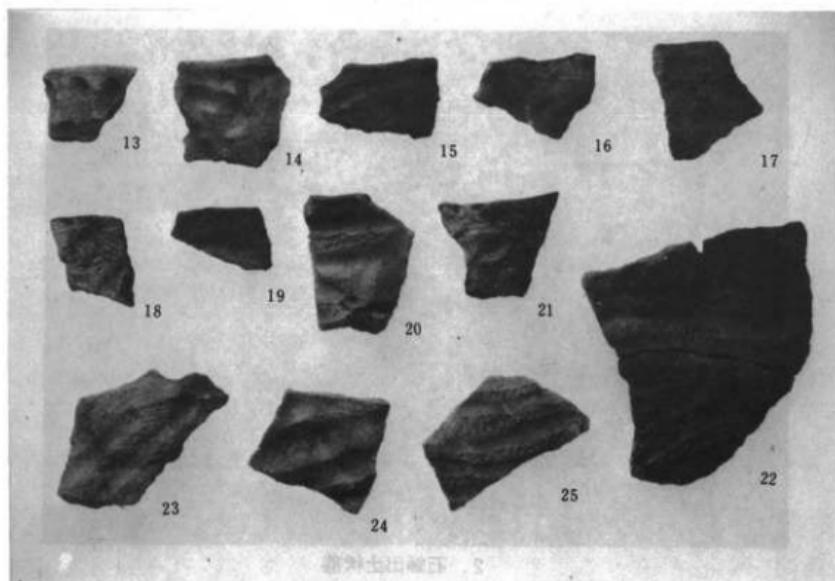


2. 石錘出土状態

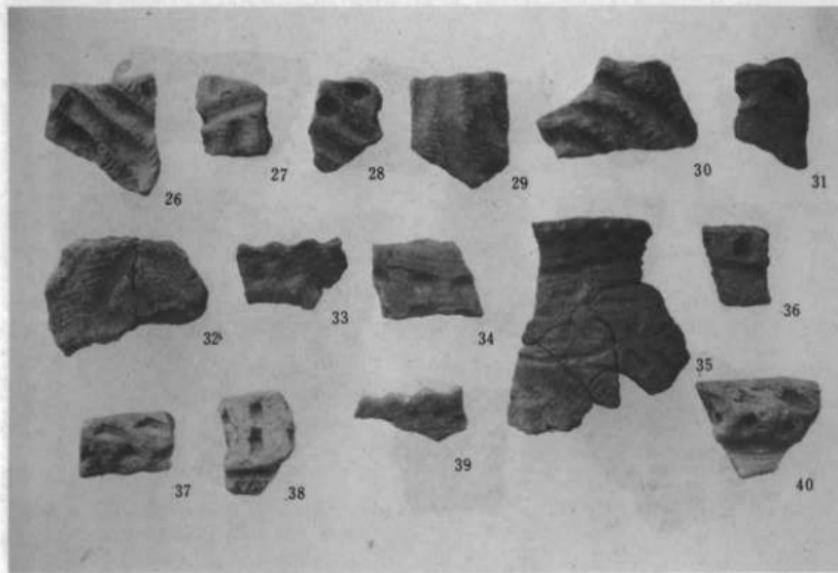
器土出土モノノイモノ



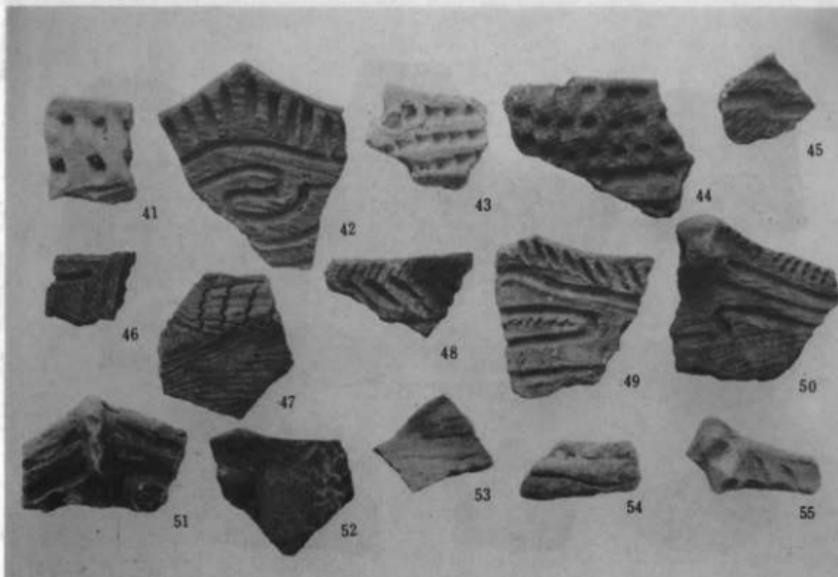
1. 3号トレンチ出土土器



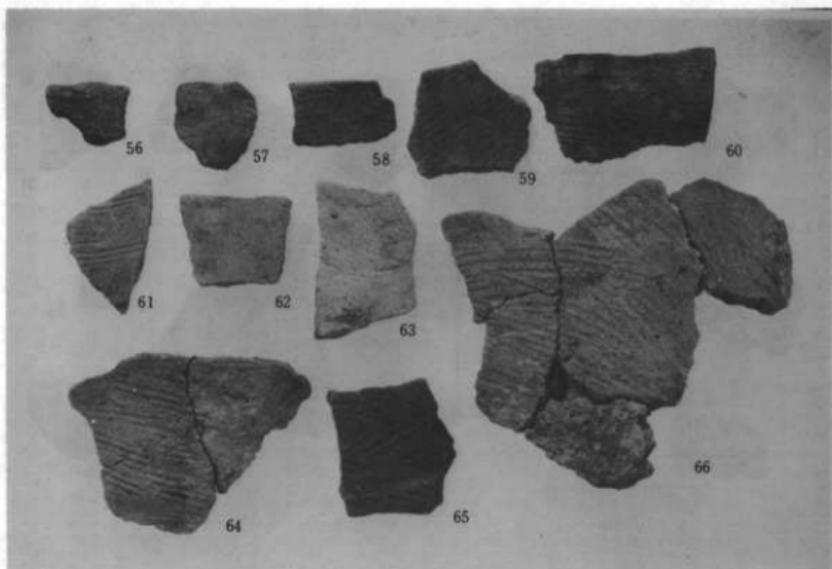
2. 3号トレンチ出土土器



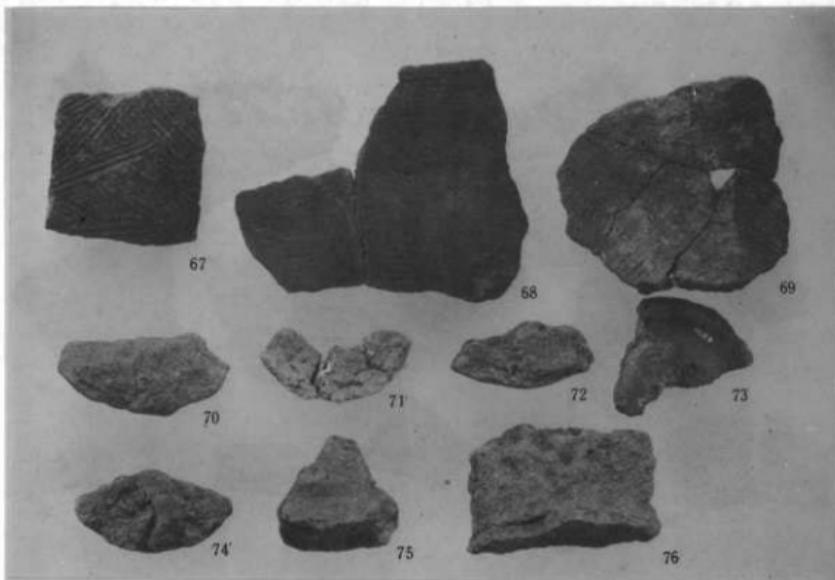
1. 3号トレンチ出土土器



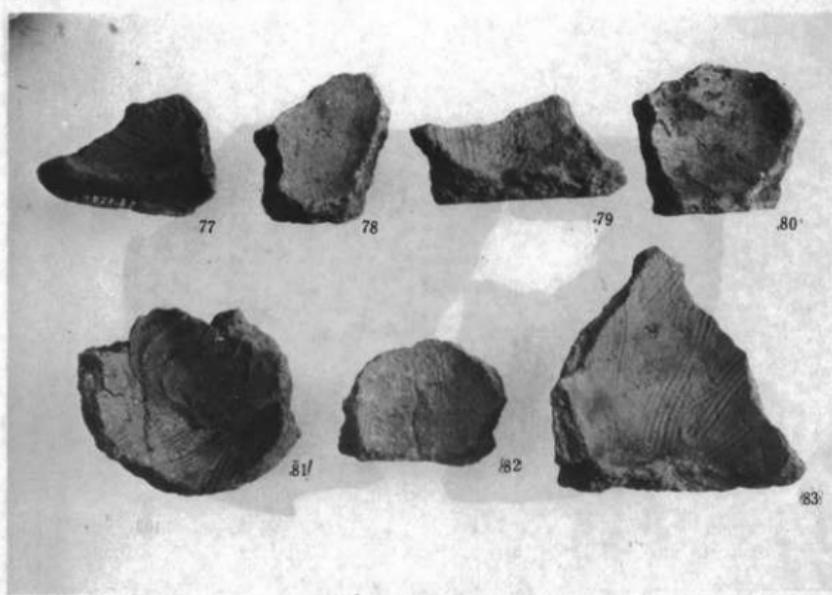
2. 3号トレンチ出土土器



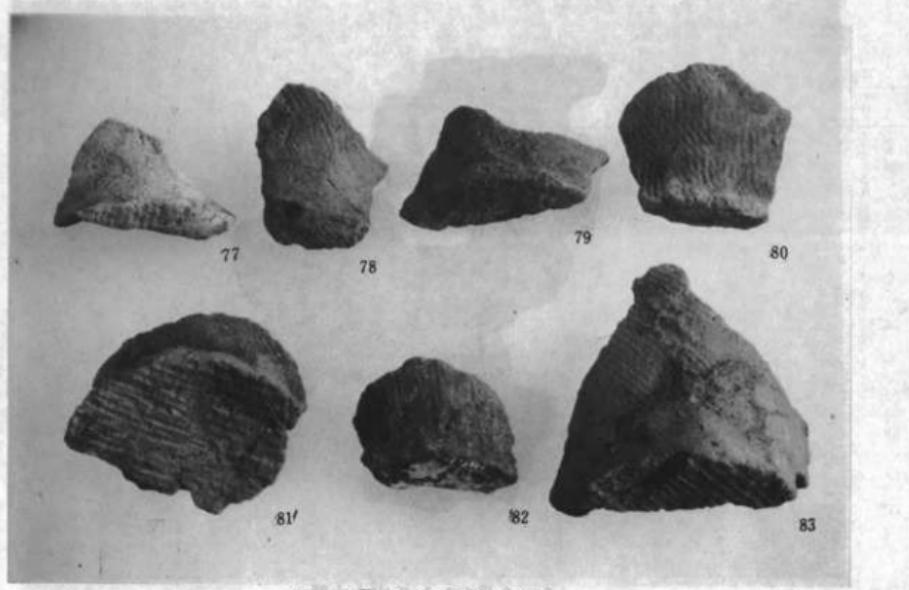
1. 3号トレンチ出土土器



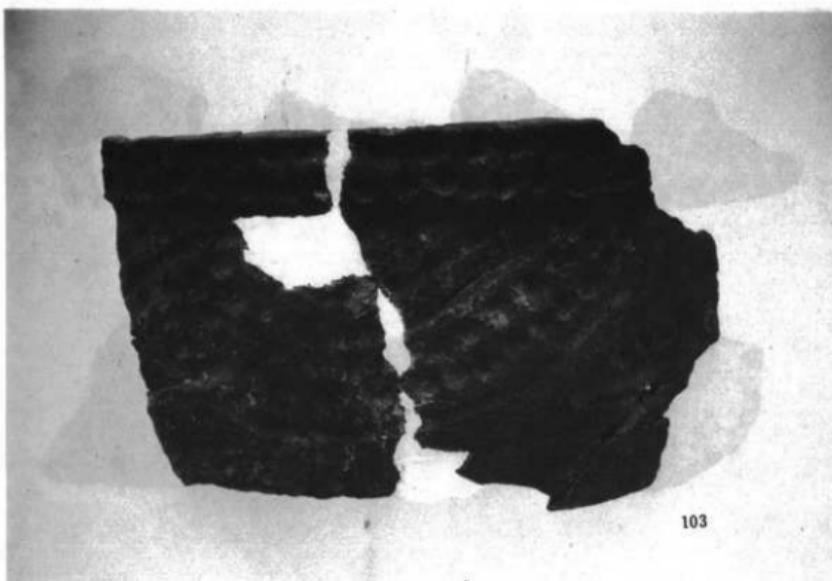
2. 3号トレンチ出土土器



1. 3号トレンチ出土土器

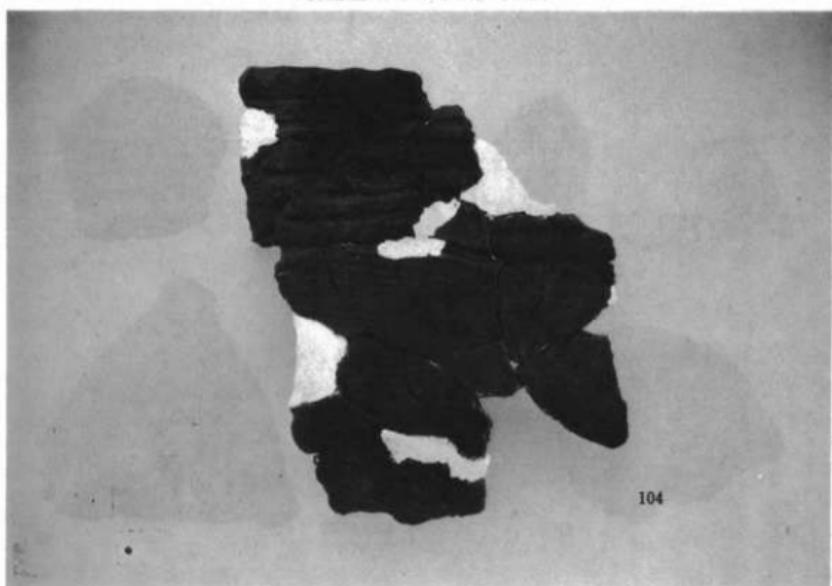


2. 3号トレンチ出土土器



103

1. 3号トレンチ出土土器

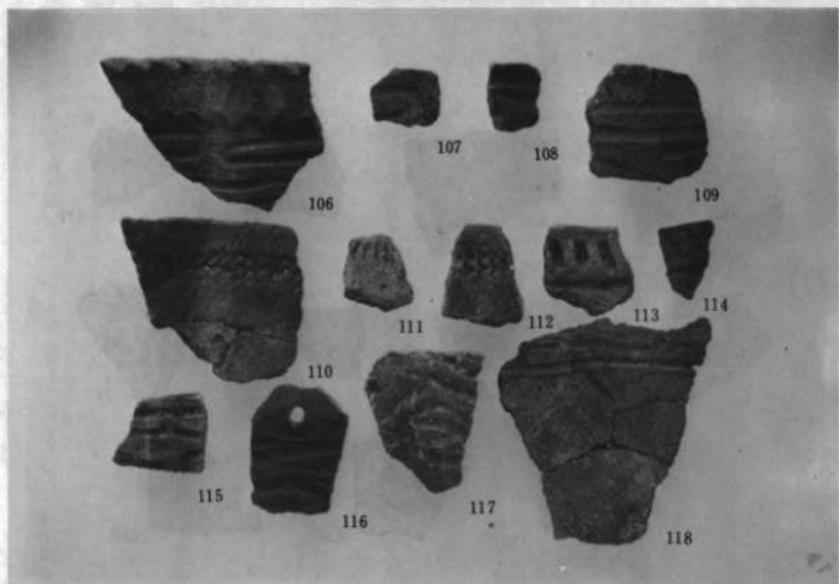


104

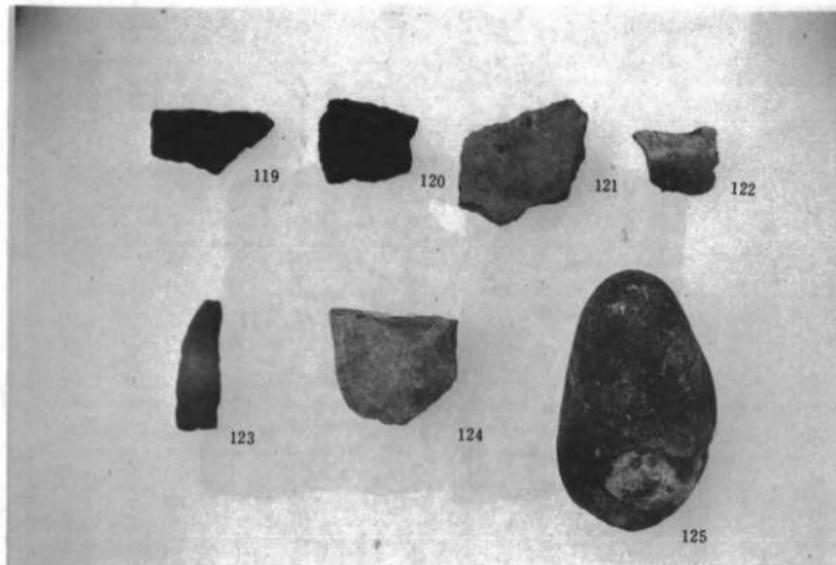
2. 3号トレンチ出土土器



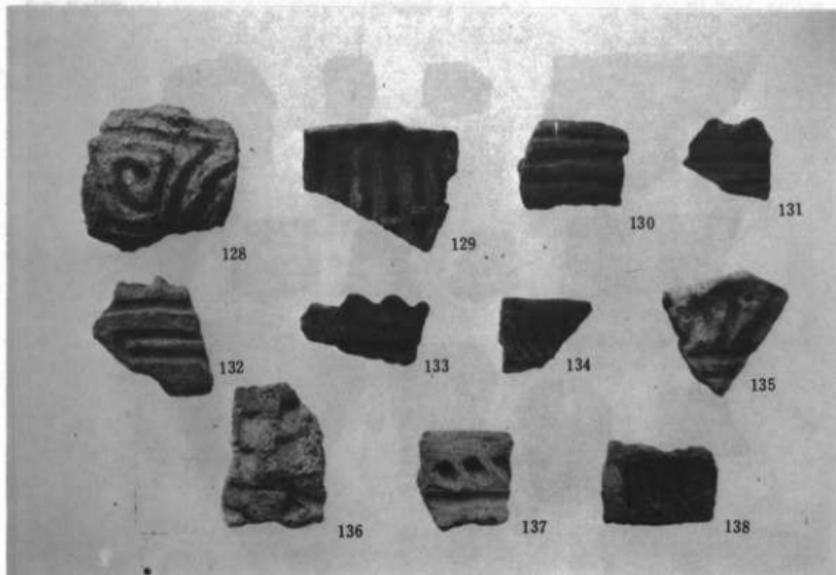
1. 3号トレンチ出土土器



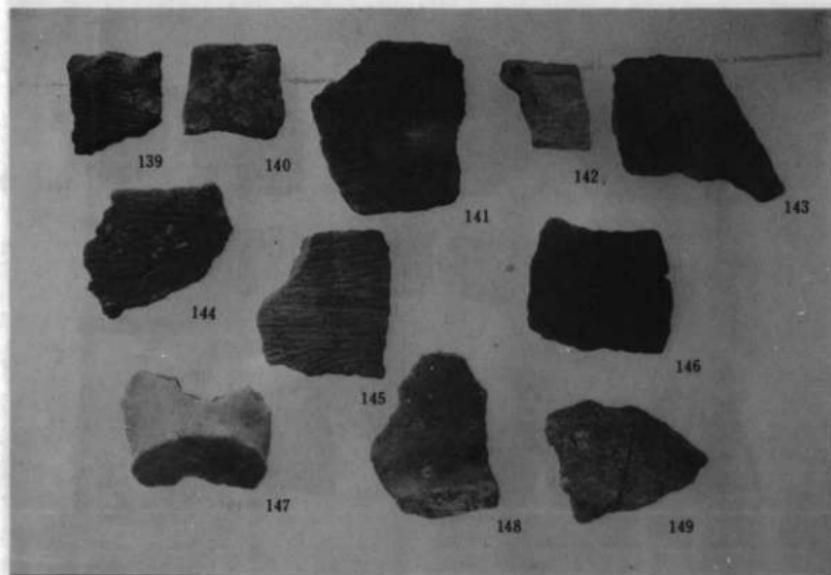
2. 4号トレンチ出土土器



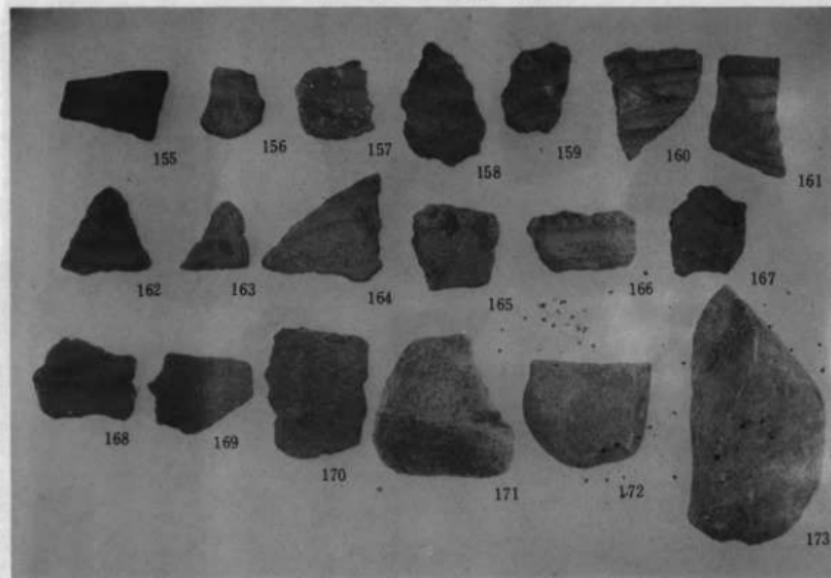
1. 1号トレンチ出土遺物



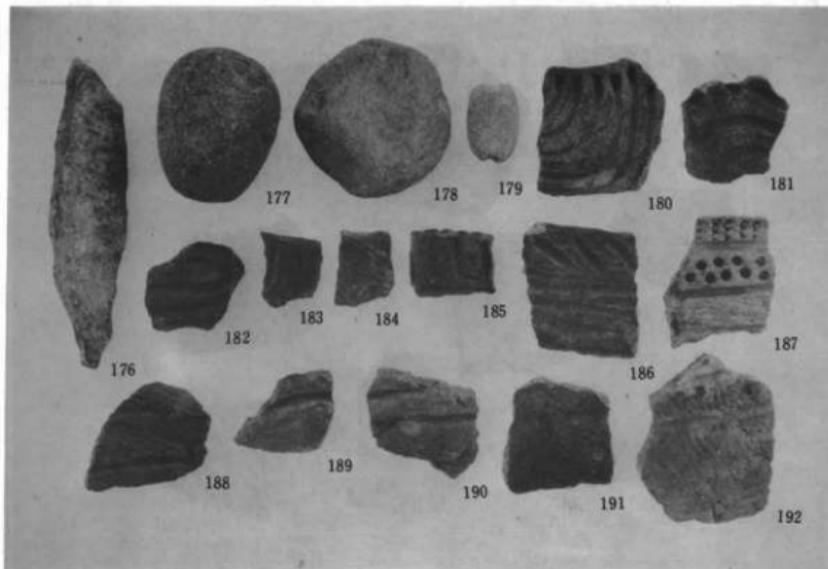
2. 2号トレンチ出土土器



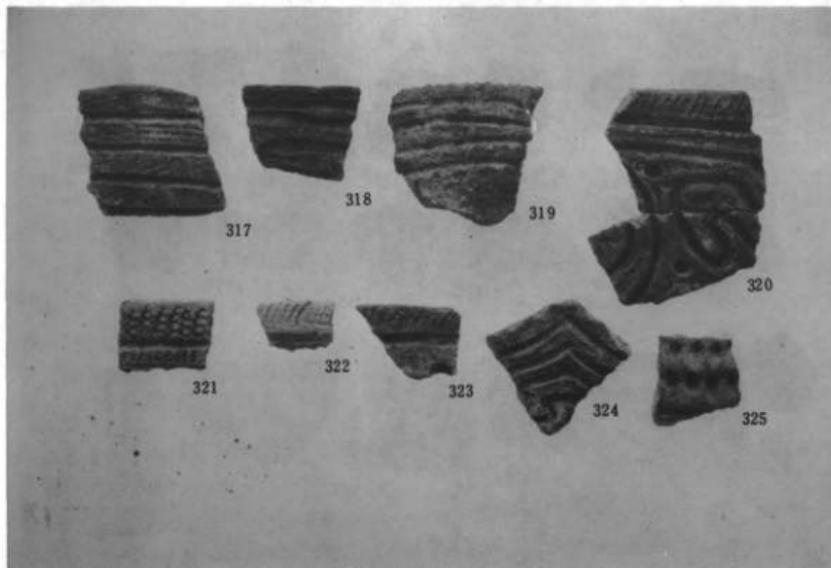
1. 2号トレンチ出土土器



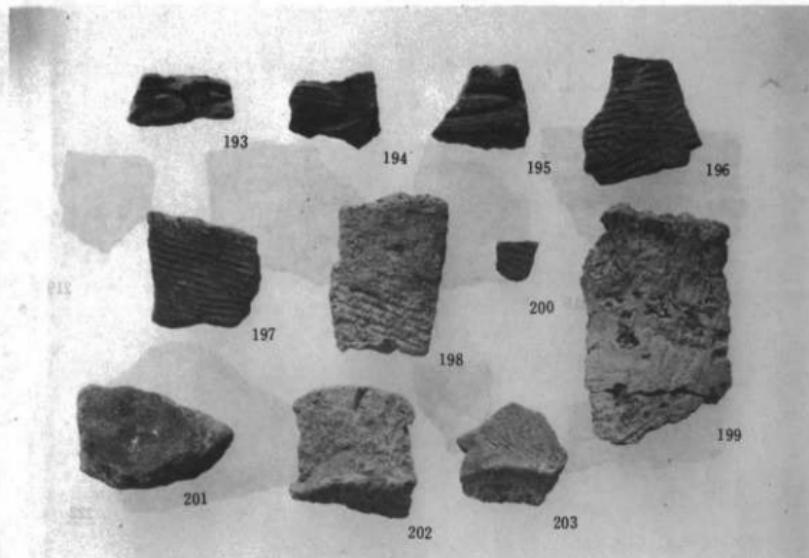
2. 4号トレンチ出土遺物



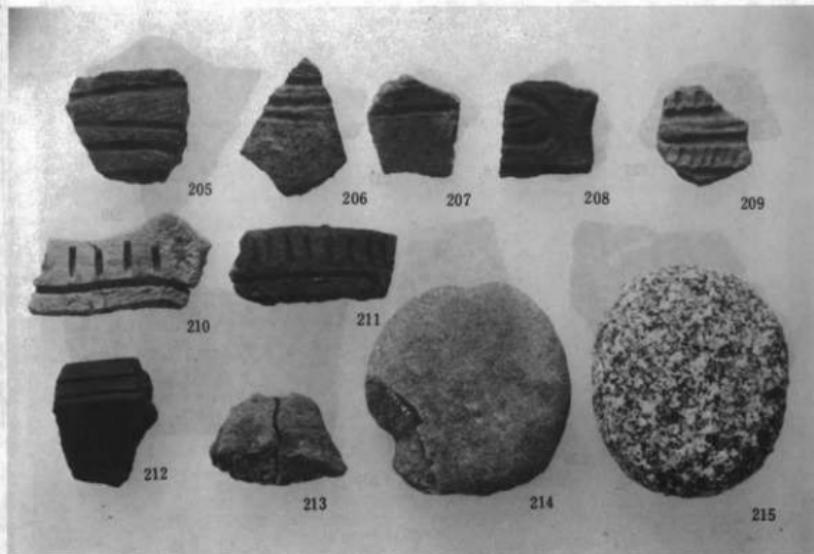
1. 土 11号トレンチ出土土器



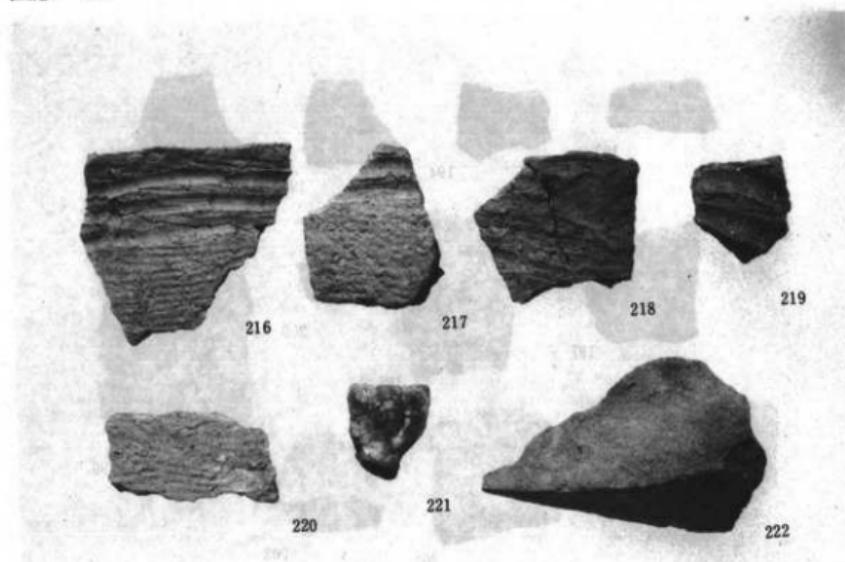
2. 土 16号トレンチ出土遺物



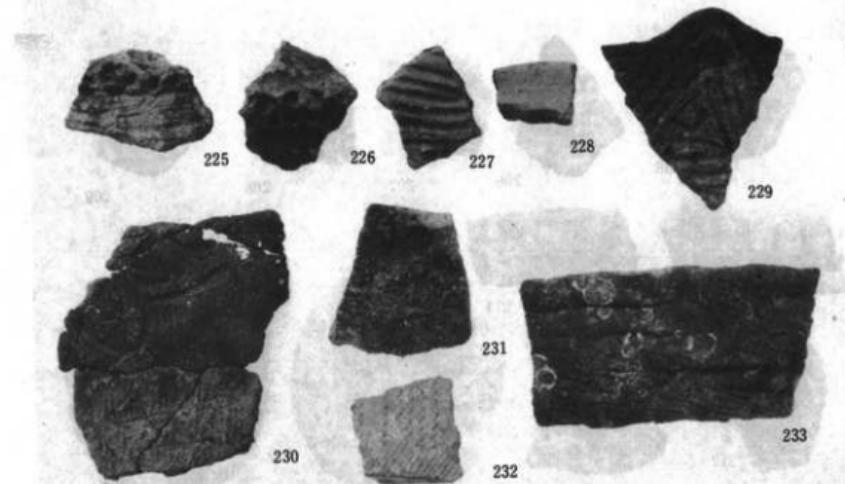
1. 11号トレンチ出土土器



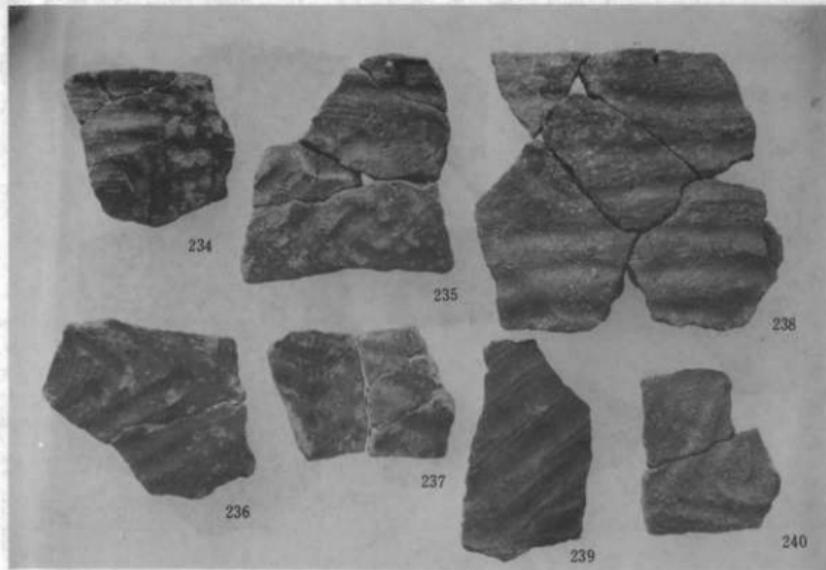
2. 12号トレンチ出土遺物



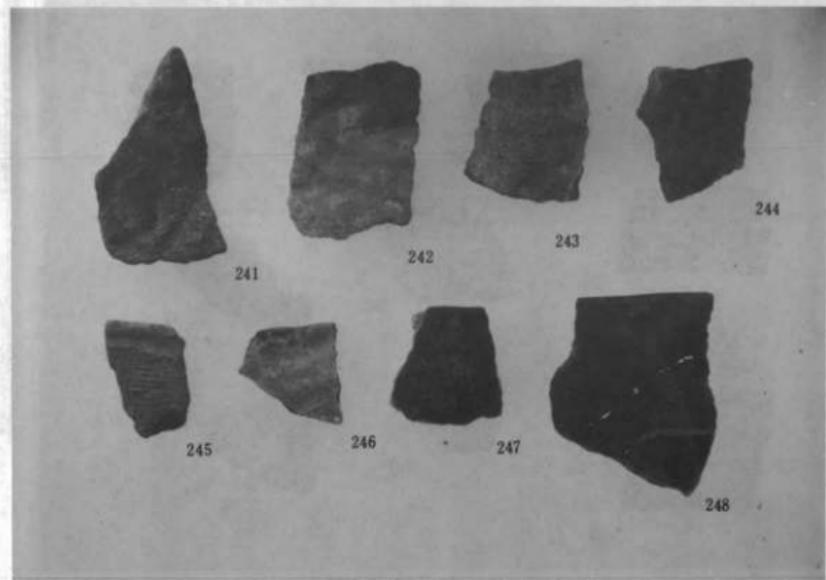
1. 13号トレンチ出土遺物



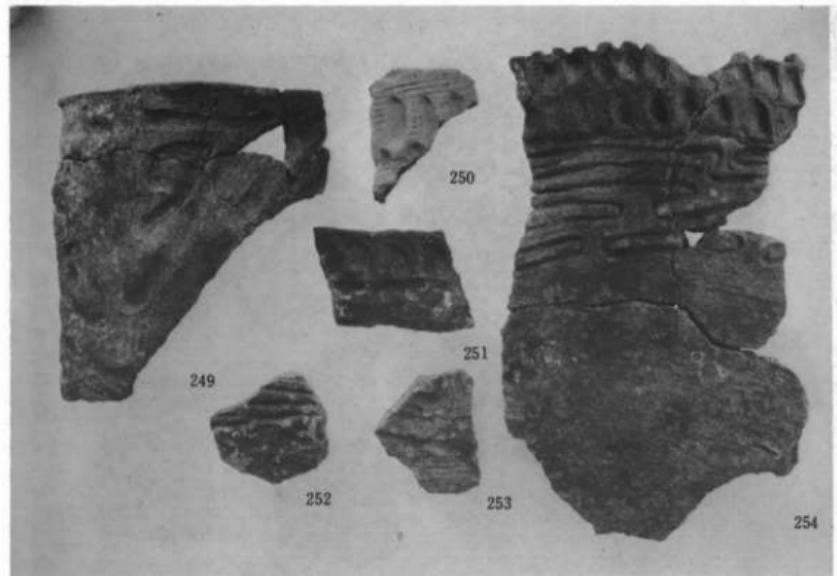
2. 14号トレンチ出土土器



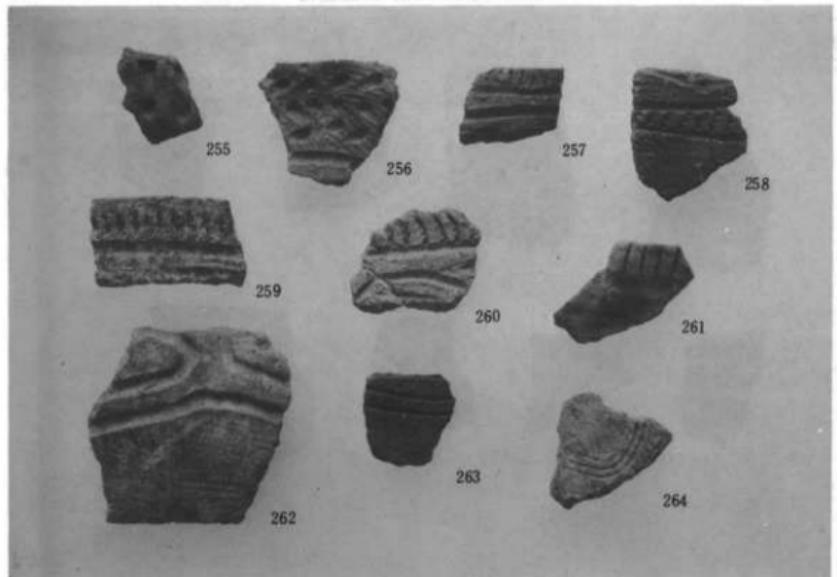
1. 14号トレンチ出土遺物



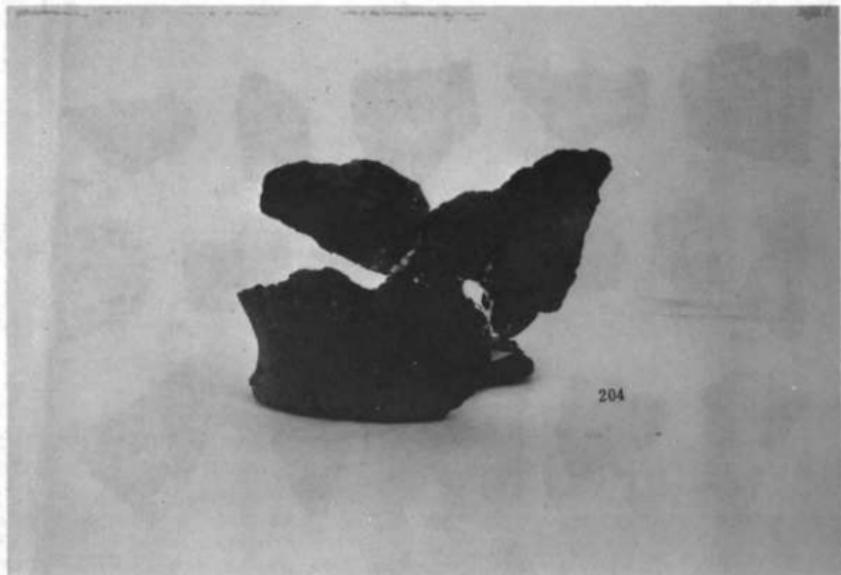
2. 14号トレンチ出土土器



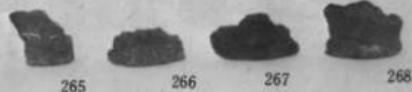
1. 14号トレンチ出土土器



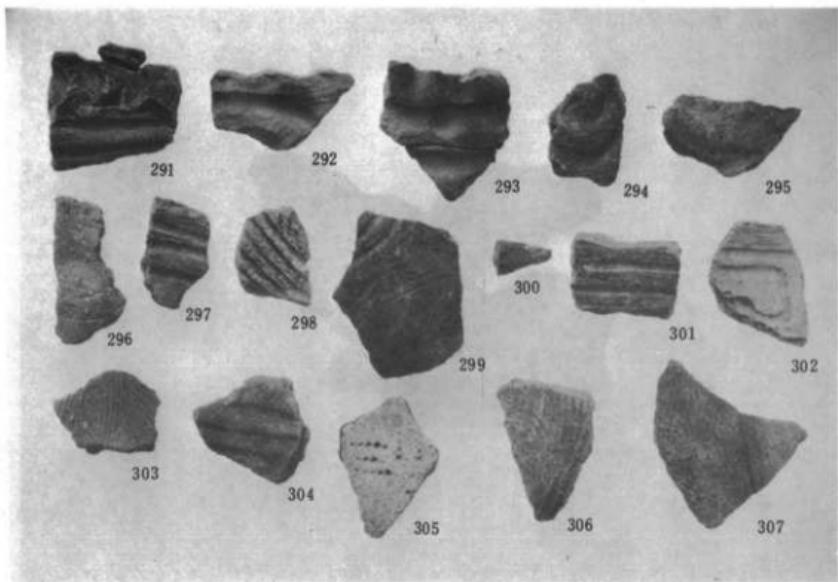
2. 14号トレンチ出土土器



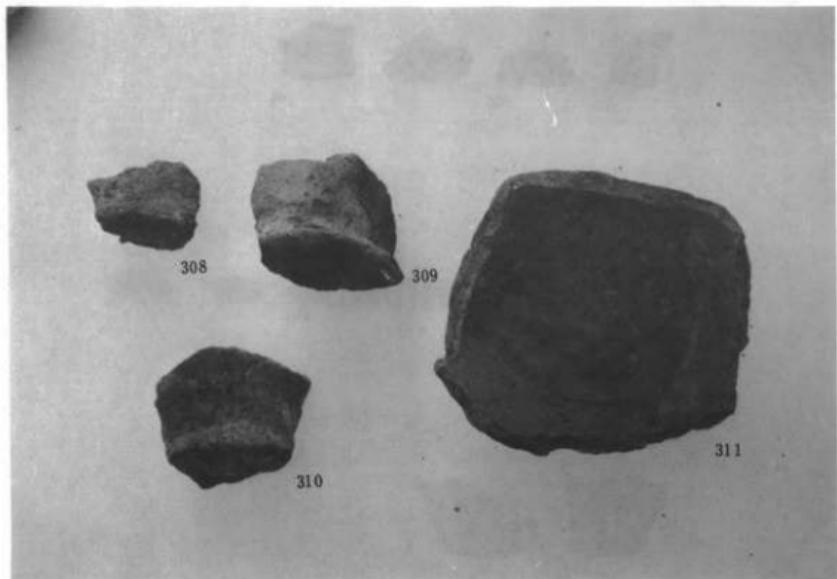
1. 11号トレンチ出土土器



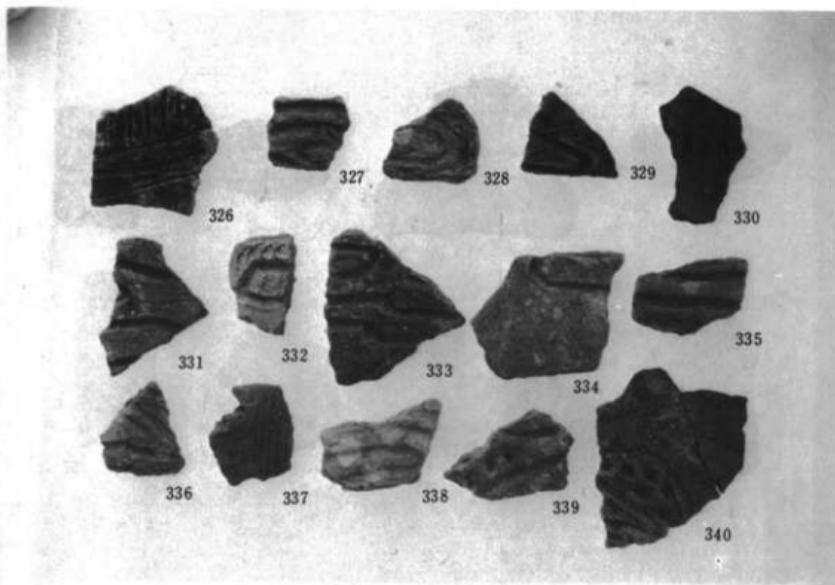
2. 14号トレンチ出土土器底部



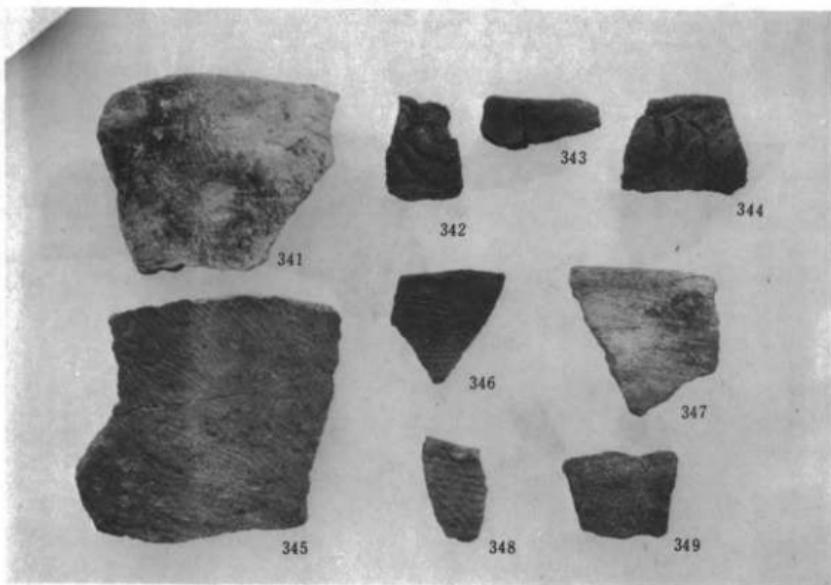
1. 15号トレンチ出土土器



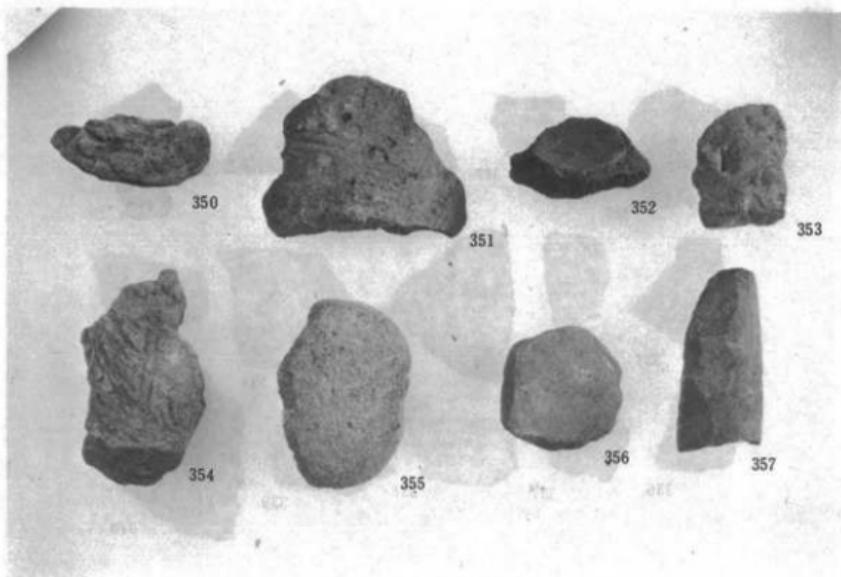
2. 15号トレンチ出土土器底部



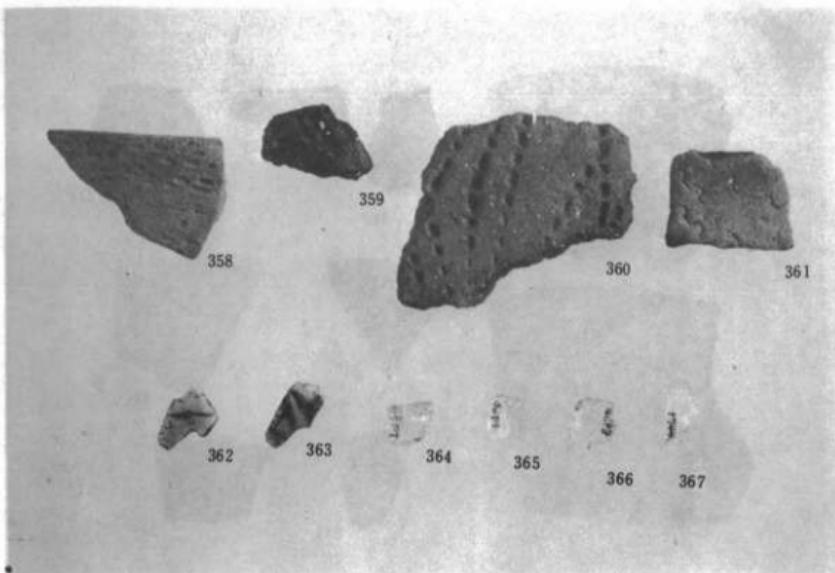
1. 16号トレンチ出土土器



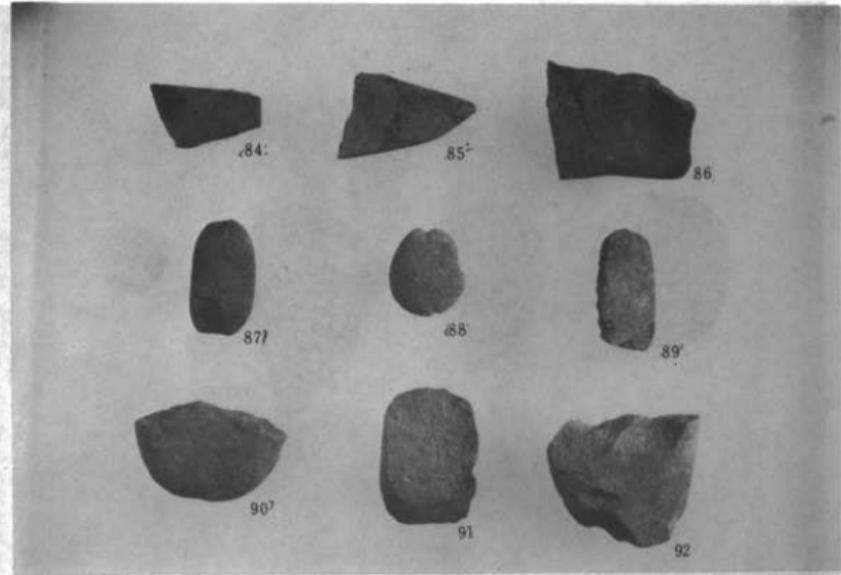
2. 16号トレンチ出土土器



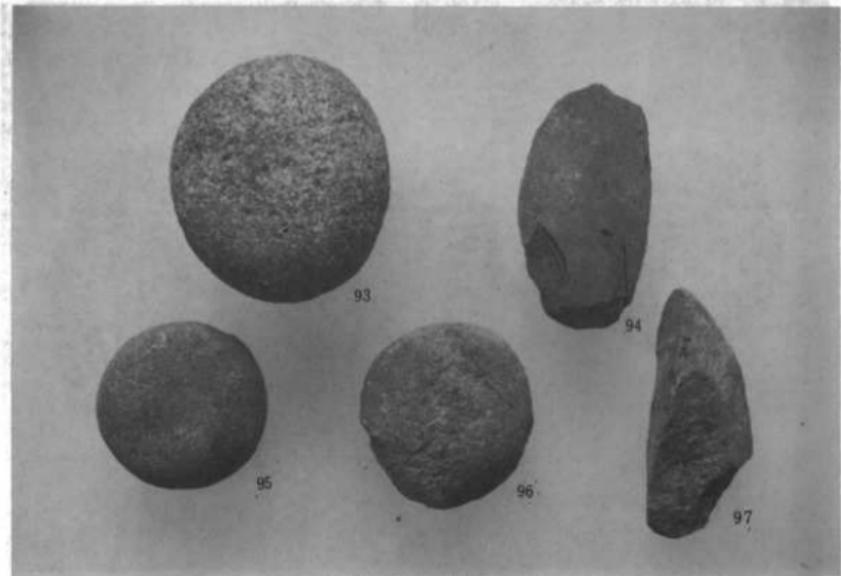
1. 16号トレンチ出土土器



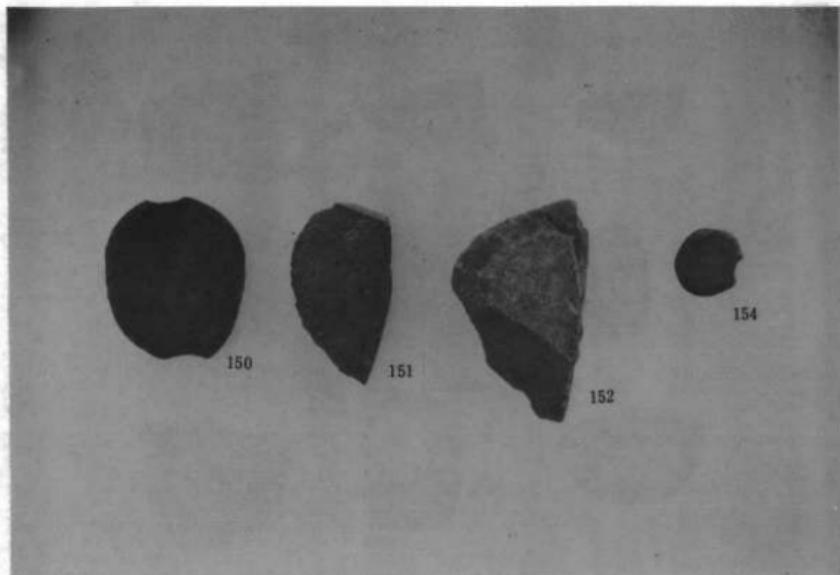
2. 7号トレンチ出土遺物



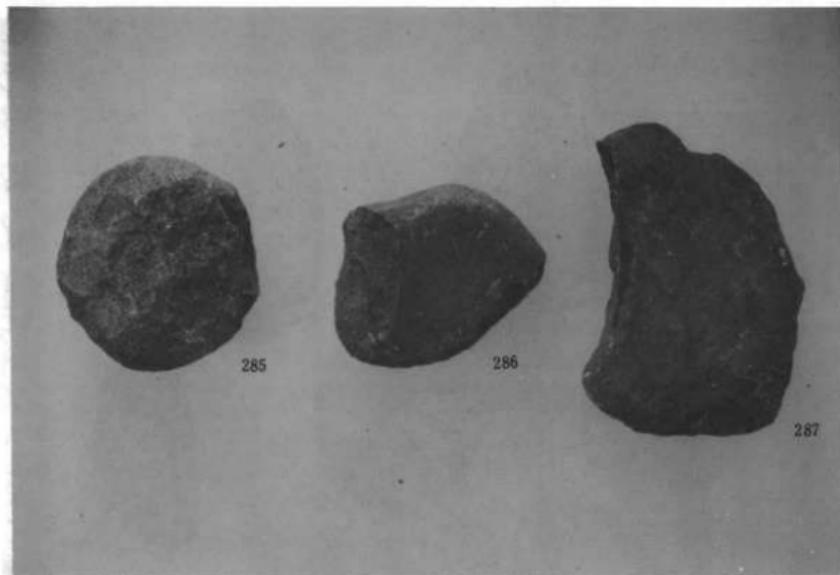
図版31出 1. 3号トレンチ出土土器



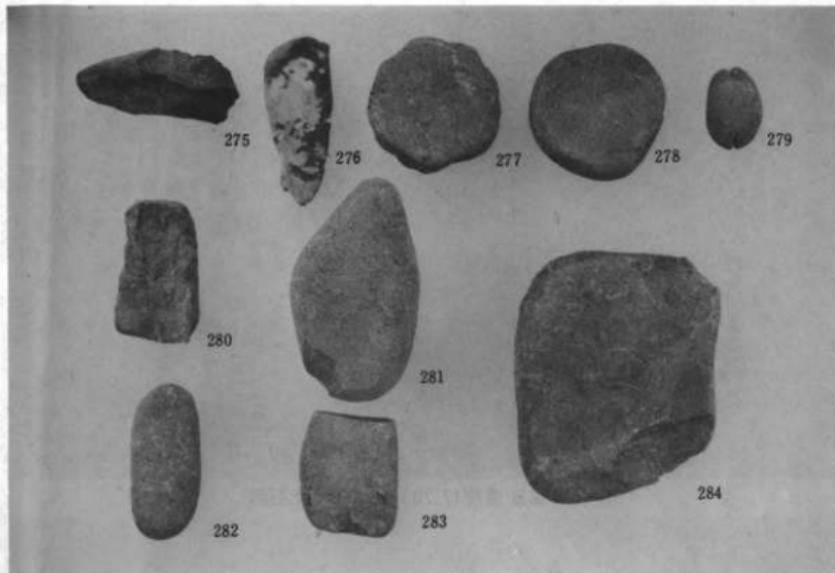
図版32出 2. 3号トレンチ出土石器



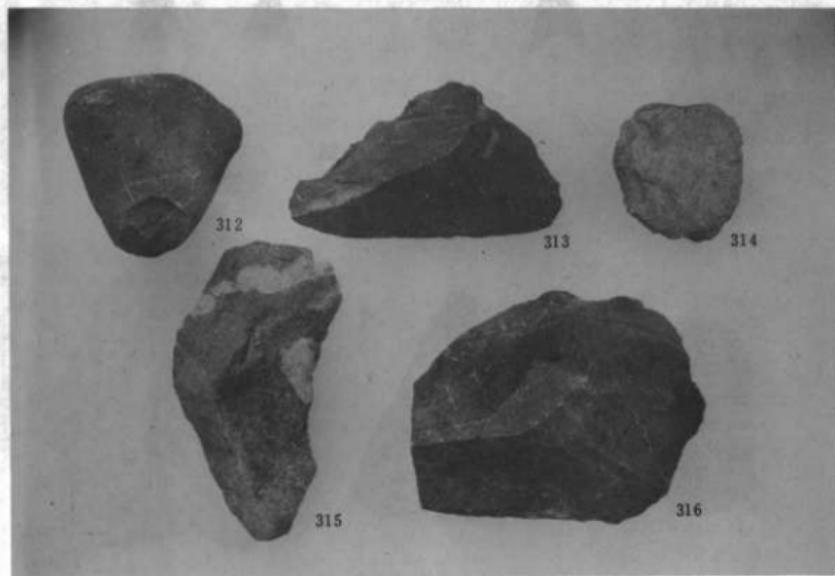
1. 2号トレンチ出土石器



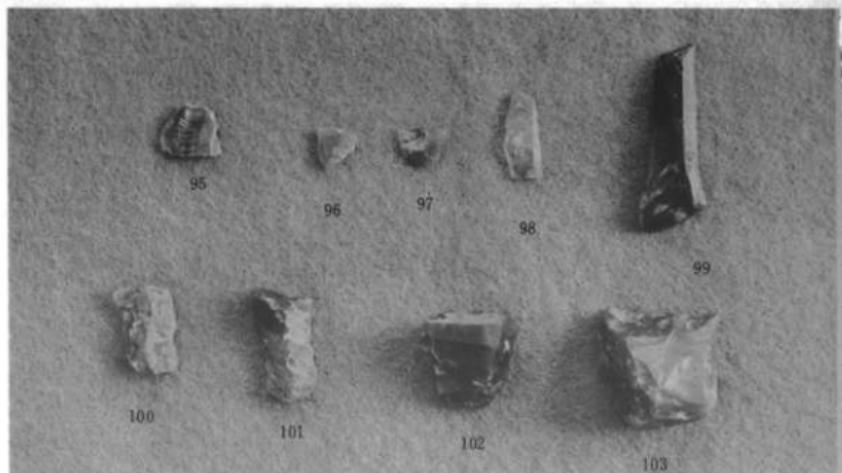
2. 14号トレンチ出土石器



1. 14号トレンチ出土石器



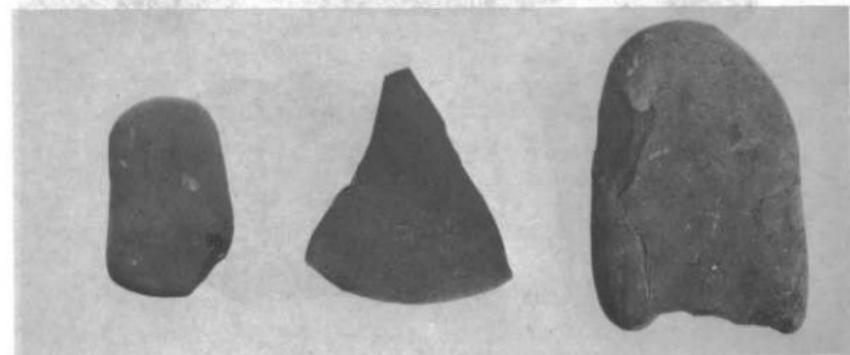
2. 15号トレンチ出土石器



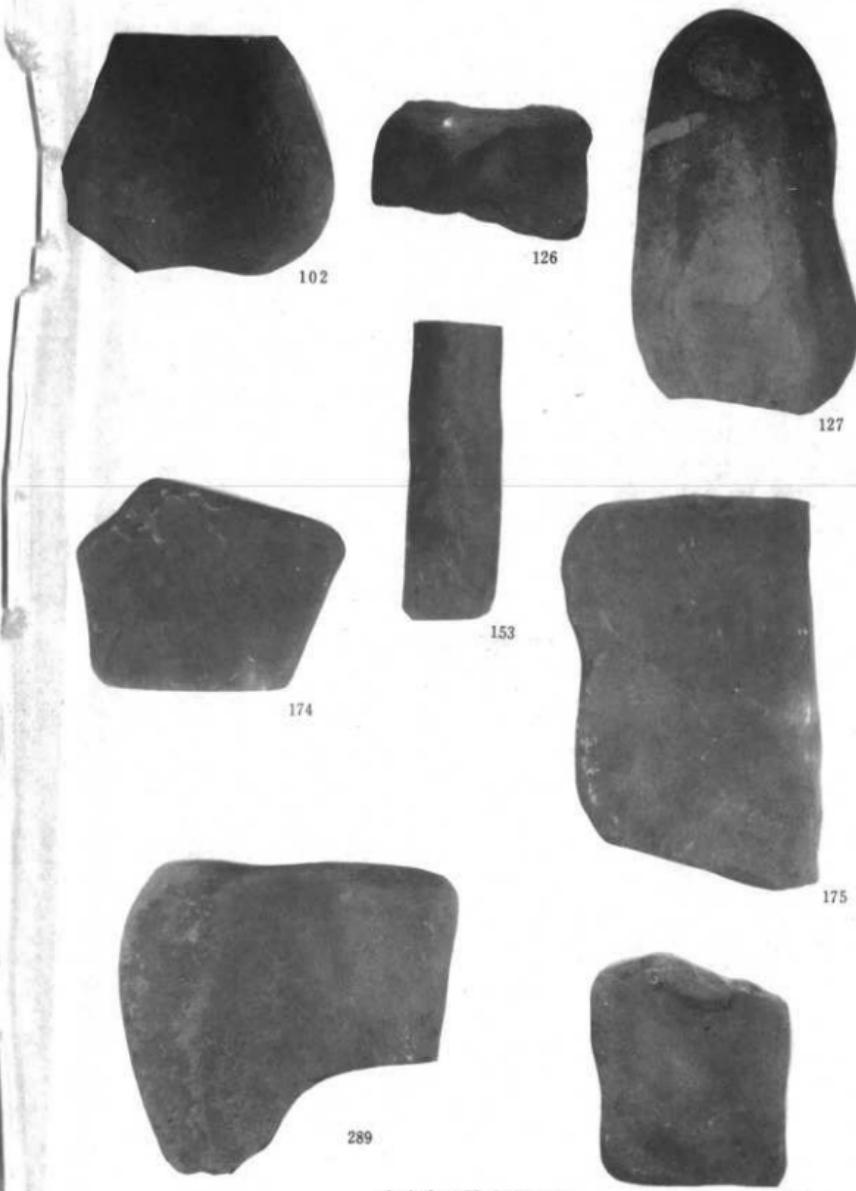
1. 倉園B遺跡17.20トレンチ出土石器



2. 十文字遺跡出土石鏃



3. 十文字遺跡出土石器



十文字遺跡出土石皿